京都市内遺跡発掘調査報告

平成20年度

2009年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

ご　あ　い　さ　つ

昨年は，源氏物語千年紀という記念すべき年を迎え，京都をはじめ，日本各地で記念の催しが開かれました。物語は都を舞台として繰り広げられていますが，この都こそ，桓武天皇によって，延暦１３年（７９４）に建都された平安京であり，現在の京都の原点といえるものです。京都は，その後政治，宗教，経済，文化の中心として，数多くの文化財を現在に伝えています。地中に眠る埋蔵文化財も，先人が残した貴重な足跡であり，遷都以前からの歴史を今に伝える国民共有の財産であります。これらの文化財を適切に後世に伝えるのは我々の責務であり，「保存」と「開発」の調和を図りながら，埋蔵文化財の保存と保護，更にはその活用に取り組んでおります。

この度，平成２０年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が，京都の歴史と文化財への理解を深めるために，広く御活用いただければ望外の喜びであります。

結びに，各調査の実施に当たって，御理解，御協力を賜りました市民の皆様と，御指導を賜りました関係機関の皆様に深く御礼申し上げます。

平成２１年３月

文化市民局長　　山　岸　吉　和

例　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成20年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（文化財保護課番号　08K177）

京都市上京区竹屋町千本東入主税町1200番地

2008年７月22日～８月11日　　54.5㎡　　近藤奈央

Ⅱ　八幡古墳群（文化財保護課番号　08S033）

京都市左京区岩倉幡枝町地内

2008年５月７日～５月９日、12月25・26日　　48㎡　　菅田　薫

Ⅲ　北白川廃寺（文化財保護課番号　07S223）

京都市左京区北白川堂ノ前町36番地

2008年２月１日～2008年３月７日　　83㎡　　布川豊治

Ⅳ　史跡・名勝嵐山

京都市右京区嵯峨鳥居本化野町12番地34

2008年９月８日～10月１日　　85.4㎡　　近藤奈央

Ⅴ　大原域遺跡確認調査

京都市左京区大原草生町地内

2008年２月12日～２月26日　　98㎡　　尾藤徳行

京都市左京区大原野村町地内

2008年７月７日～７月24日　　84㎡　　尾藤徳行

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。

Ⅰ　近藤奈央

Ⅱ　菅田　薫

Ⅲ　布川豊治

Ⅳ　近藤奈央

Ⅴ　尾藤徳行

4　整理作業および本書の作成には、上記の執筆者のほかに以下の者が参加した。

出水みゆき（遺物彩色）、村上　勉（遺物復元）

5　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行った。

6　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」「二軒茶屋」「幡枝」「田中」「清滝」「小倉山」「金毘羅山」「大原」を調整したものである。
図39は、国土地理院発行の１：25,000地形図「大原」「京都東北部」を調整して使用した。

9　本書の編集は、近藤奈央・児玉光世・山口　眞が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1．調査経過 …… 1

2．遺　　構 …… 2

（1）基本層序 …… 2

（2）江戸時代前期の遺構 …… 2

（3）江戸時代中期の遺構 …… 3

（4）江戸時代後期の遺構 …… 3

3．遺　　物 …… 5

4．ま と め …… 11

Ⅱ　八幡古墳群

1．調査経過 …… 14

2．遺構・遺物 …… 15

3．ま と め …… 15

Ⅲ　北白川廃寺

1．調査経過 …… 20

（1）調査経過 …… 20

（2）位置と環境 …… 23

2．遺　　構 …… 23

（1）基本層序 …… 23

（2）遺　　構 …… 24

3．遺　　物 …… 27

（1）土器類 …… 28

（2）瓦類 …… 29

4．ま と め …… 31

Ⅳ　史跡・名勝嵐山

1．調査経過 …… 32

2．遺　　構 …… 33

3．遺　　物 …… 36

4．ま と め …… 36

Ⅴ　大原域遺跡確認調査
1．調査経過 …… 42
2．位置と環境 …… 43
3．大原草生町地区 …… 43
（1）調査経過 …… 43
（2）遺　　構 …… 45
（3）遺　　物 …… 50
（4）ま と め …… 51
4．大原野村町地区 …… 52
（1）調査経過 …… 52
（2）遺　　構 …… 52
（3）遺　　物 …… 56
（4）ま と め …… 57

報告書抄録 …… 59

図　版　目　次

図版１　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺構　1　調査区全景（北から）
2　土坑26断面：瓦出土状況（南東から）
図版２　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺物　土坑26出土瓦
図版３　北白川廃寺　遺構　1　第２面全景（南東から）
2　第３面全景（南東から、奥が溝54）
3　第４面全景（南東から）
図版４　北白川廃寺　遺物　1　土器類
2　瓦類
図版５　史跡・名勝嵐山　遺構　1　調査区全景（北西から）
2　西壁断割（南東から）
3　北壁断割（北東から）
図版６　大原域遺跡確認調査　遺構　1　大原草生町地区１・２区全景（北東から）
2　大原草生町地区１区断割断面（南西から）
3　大原草生町地区３区断面（南西から）
4　大原草生町地区３区拡張全景（南西から）
5　大原草生町地区４区全景（南東から）

図版７　大原域遺跡確認調査　　遺構　１　大原野村町地区１・２区全景（北東から）
２　大原野村町地区３区全景（北北東から）
３　大原野村町地区３区石列断割断面（南西から）
４　大原野村町地区１区断割断面（北東から）
図版８　大原域遺跡確認調査　　遺物　１　大原草生町地区出土遺物
２　大原野村町地区出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：300）　……　2
図３　調査前全景（南から）　……　2
図４　調査風景（南から）　……　2
図５　調査区実測図（１：80）　……　4
図６　溝８断面図（1：40）　……　5
図７　軒丸瓦拓影・実測図（１：４）　……　7
図８　軒平瓦拓影・実測図（１：４）　……　8
図９　軒平瓦、鬼瓦、平瓦拓影・実測図（１：４、19は１：６）　……　10
図10　刻印拓影（１：２）　……　11
図11　凝灰岩　……　11
図12　調査地周辺の調査（１：1,000）　……　12
図13　調査位置図（１：5,000）　……　14
図14　調査前全景（南東から）　……　15
図15　調査風景（南から）　……　15
図16　調査区配置図（１：300）　……　15
図17　調査区実測図（１：100）　……　16
図18　調査区全景（北から）　……　17
図19　周辺地形測量図（１：600）　……　18
図20　２号墳実測図（１：200、１：30）　……　19
図21　調査区配置図（１：200）　……　20
図22　調査前全景（南から）　……　21
図23　調査風景（北西から）　……　21
図24　調査位置図（１：2,500）　……　21

図25　第１・２面平面図（１：200）　……　24
図26　第３・４面平面図（１：100）　……　25
図27　西壁断面図（１：50）　……　26
図28　土器実測図（１：４）　……　29
図29　瓦拓影・実測図（１：４）　……　29
図30　北白川廃寺伽藍の推定復元図（１：2,500）　……　30
図31　調査位置図（１：2,500）　……　32
図32　調査前全景（南から）　……　33
図33　調査風景（南西から）　……　33
図34　調査区配置図（１：400）　……　33
図35　調査区平面図（１：100）　……　34
図36　調査区壁面断面図（１：50）　……　35
図37　既往の調査位置図（１：5,000）　……　37
図38　現地表と遺構検出標高（１：150）　……　39
図39　調査位置図（１：50,000）　……　42
図40　調査区概要図（１：5,000）　……　44
図41　調査前全景（北東から）　……　45
図42　調査風景（北東から）　……　45
図43　調査区配置図（１：500）　……　46
図44　１・２区断面図（１：50）　……　47
図45　１・２区平面図（１：200）　……　48
図46　３区実測図（１：50）　……　49
図47　４区実測図（１：50）　……　49
図48　遺物拓影・実測図（１：４）　……　50
図49　調査前全景（西から）　……　52
図50　調査風景（北から）　……　52
図51　調査区配置図（１：500）　……　53
図52　１・２区実測図（１：100）　……　54
図53　３区実測図（１：50、１：100）　……　55
図54　遺物拓影・実測図（１：４）　……　57

表　目　次

表１　遺構概要表 …… 3
表２　遺物概要表 …… 6
表３　周辺調査一覧表 …… 13
表４　周辺調査一覧表 …… 22
表５　遺構概要表 …… 23
表６　遺物概要表 …… 27
表７　掲載土器一覧表 …… 28
表８　遺物概要表 …… 36
表９　周辺調査一覧表 …… 38
表10　遺構概要表 …… 45
表11　遺物概要表 …… 50
表12　遺構概要表 …… 53
表13　遺物概要表 …… 56

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1．調査経過

調査地は、京都市上京区竹屋町千本東入主税町に所在する。竹屋町通より一筋北の通りと、土屋町通との交差点から西に入った道路北側の住宅地である。調査地の東側が朝堂院東回廊中央に位置する宣政門推定地に接しており、調査地の東側に接する住宅地（1994年の発掘調査、図12－2）や南側の道路（1979～1980年の立会調査、図12－1）からは、基壇や階段の一部とみられる凝灰岩列や凝灰岩の抜き取り穴を検出している。また、宣政門南西に位置していた承光堂の基壇の一部が道路の立会調査で検出されている（図12－9）。これらの成果から、宣政門の基壇と階段を構成する凝灰岩や、その他の朝堂院関連遺構の検出が見込まれた。そのため、今回、個人住宅建設に伴い発掘調査を実施することとなった。

調査区は、調査地の中央から北にかけての住宅新築範囲である南北約12m、東西約4.5mに設定した。その後、調査区の一部拡張を行い、最終調査面積は約54.5㎡となった。

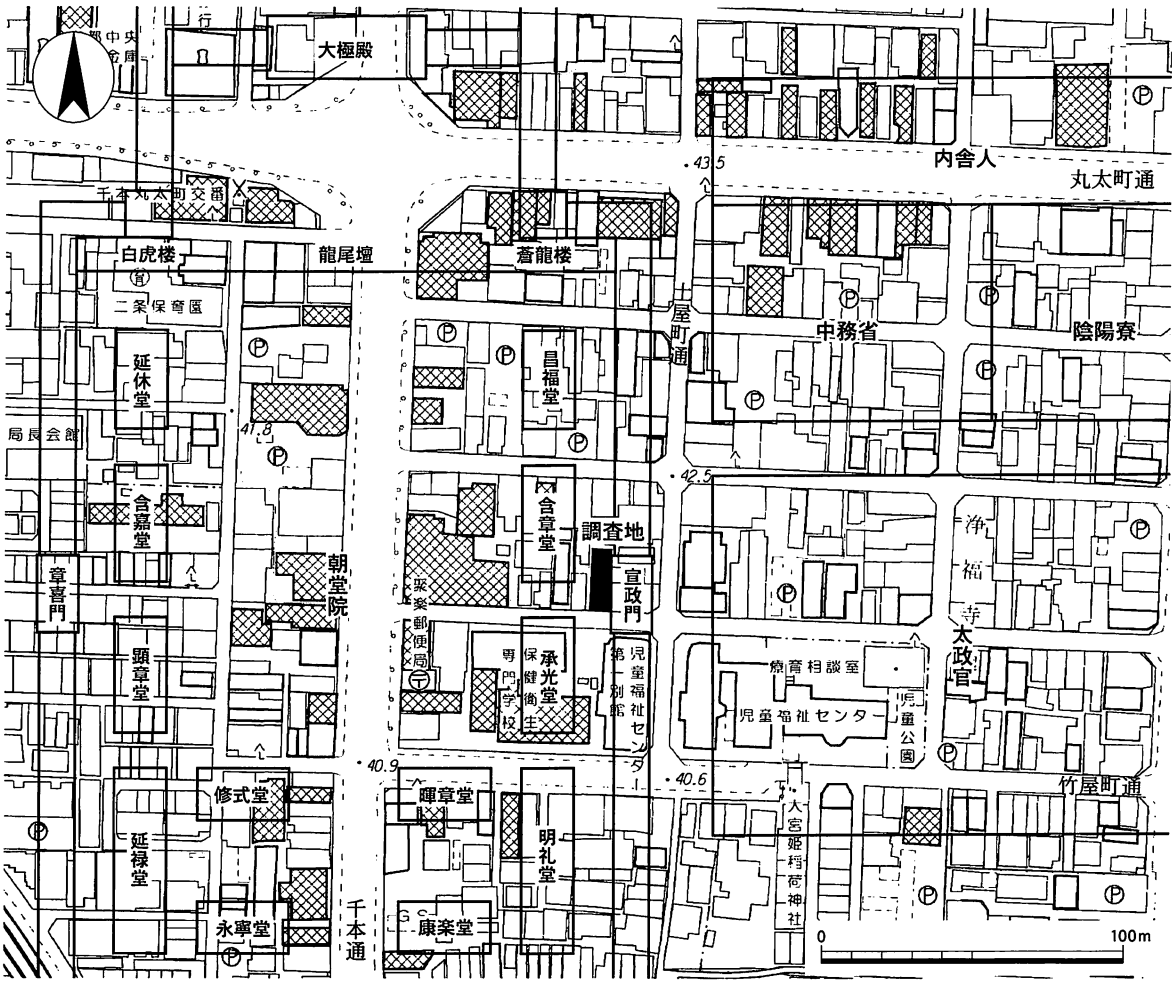


図１　調査位置図（１：2,500）

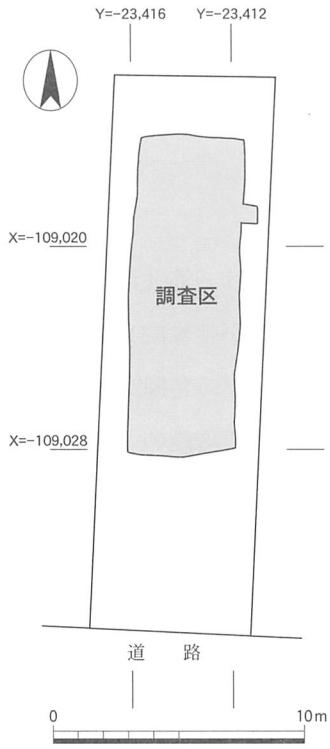


図２　調査区配置図（１：300）

調査は平成20年７月22日から開始し、江戸時代遺構面まで重機による掘削を行った。調査の結果、平安時代の遺構面は近現代の撹乱や江戸時代の土取土坑に壊され、遺構が残存していないことが判明した。調査終了時に、調査区の東側を一部拡張して宣政門基壇の遺構を追求したが、江戸時代の遺構のみの検出にとどまった。その後、重機による埋め戻しを行い、８月11日にすべての作業を終了した。

２．遺　　構

（１）基本層序（図５）

基本層序は、表土下約0.6mまで近現代盛土である黒褐色砂質土と灰黄褐色粘質土、その下に厚さ約0.2mの江戸時代包含層であるにぶい黄褐色粘質土、遺物を含まない厚さ約0.2mの暗褐色粗砂礫（第22層）、厚さ約0.15mの平安時代以前の自然堆積とみられる褐色シルトや褐色粘質土混微砂、明黄褐色粘質土の基盤層の順に堆積している。北西で検出した土坑26の上面は厚さ0.05mの褐色粘質土（第14層）で覆われていた。第14層は良く締まっており、遺物がほとんど含まれていない均質な土であったことから江戸時代後半頃の整地層とみられる。第22層は平安時代の頃は基盤層であったとみられる層で、調査区南西の一部に残存していた。基盤層は北側が高く、南側はやや低い位置で検出している。

検出した遺構は、すべて江戸時代のものであった。大半の遺構は近現代盛土直下の、平安時代以前の自然堆積とみられる層や基盤層上面で検出した。以下に、遺構の概略を述べる。

（２）江戸時代前期の遺構（図５、図版１）

土坑11　調査区中央西で検出した。一辺約1.8mの隅丸方形を呈し、深さは検出面から約0.8m

図３　調査前全景（南から）

図４　調査風景（南から）

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構
江戸時代前期	土坑11・12
江戸時代中期	柱穴10、溝８、土坑９
江戸時代後期以降	柱穴25、井戸24、土坑１・26

である。基盤層の明黄褐色粘質土を切り込んでいた。土師器、炮烙、施釉陶器椀、肥前磁器染付椀、焼締陶器擂鉢などが出土している。

土坑12　調査区中央東側で、土坑11と東西方向に並んだ状態で検出した。基盤層の明黄褐色粘質土を切り込んで造られていた。検出面から0.7m程度の深さで、一辺約1.8mの隅丸方形になるとみられ、土取穴である。土師器皿、肥前磁器染付椀、肥前陶器皿、施釉陶器片、砥石、鉄釘、丸・平瓦および平安時代の緑釉瓦が１点出土した。

（３）江戸時代中期の遺構

柱穴10（図５）　調査区中央西端で検出した。径約0.4m、検出面からの深さ0.36mである。埋土下層には、径15㎝前後の黄色系チャートの栗石が多量に入っていた。根石とみられる。土師器皿が出土した。

溝８（図５・６）　調査区中央で検出した東西方向の溝である。溝の東端は調査区外に延びる。長さ3.4m以上、最大幅約1.0m、深さ約0.4mである。埋土は、炭や土師器片を少量含む黄褐色系の粘質土が主体であるが、途中に炭を多量に含む黒褐色粘質土が堆積していた。埋土に水が滞留または流れていた痕跡が認められないことや、調査地東側の住宅地で行われた調査で溝の続きを検出していないことから、長さが隣接地に及ばない細長い土坑であった可能性がある。出土遺物には、土師器皿、肥前磁器染付椀、炮烙、火消壷、焼塩壷、施釉陶器椀、煙管の吸口などがある。

土坑９（図５）　調査区中央西端で、溝８に切られた状態で検出した。南北約1.6mの隅丸方形または楕円形を呈するとみられるが、遺構の大半が調査区外であるため、詳細は不明である。埋土は、暗褐色粘質土などで、下層から平安時代の丸・平瓦が多量に出土した。江戸時代の遺物は出土していないが、埋土の状態から土取りに伴って掘削された遺構と考えられる。

（４）江戸時代後期の遺構（図５）

井戸24　調査区北東角で検出した。遺構の大半が調査区外であるため、正確な規模と形状は不明である。検出規模は、南北、東西共に２m以上で、掘形の平面形は円形を呈するとみられる。検出面より約1.2mの深さまで掘削したが、壁面近くであり、更に0.5m以上深くなることがわかったので、安全上、掘削を中止した。埋土は、上層がにぶい黄褐色粘質土混礫、下層は平安時代の瓦と径１～２㎝の礫を少量含む褐色粘質土であった。灯明皿受けなどが出土している。

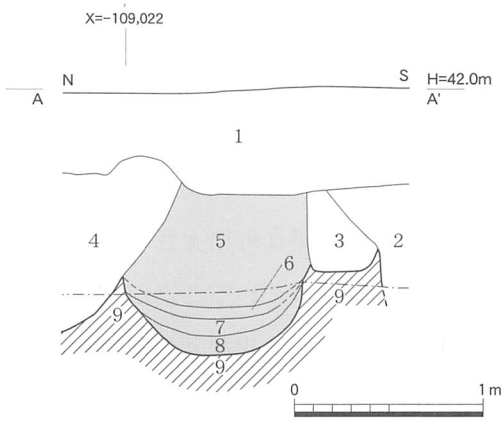
図５　調査区実測図（１：80）

1　10YR3/2 黒褐色砂質土　径0.5～５㎝の礫多量含〔近現代盛土〕
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土　土師器・炭・径１～2㎝の礫少量含、コールタール状の塊微量含〔近代盛土か？〕
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　炭・径２～３㎝の礫少量含〔江戸時代：柱穴〕
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　土師器・炭・径２～３㎝の礫少量含〔江戸時代：柱穴〕
5　10YR3/4 暗褐色粘質土混細砂　土師器・炭・径１～２㎝の礫少量含〔江戸時代：土坑〕
6　10YR4/4 褐色粘質土　粒状の土師器・径１～２㎝の礫少量含〔柱穴10〕
7　10YR3/3 暗褐色粘質土　径15㎝の黄色系チャート多量含、土師器・炭少量含〔柱穴10〕
8　7.5YR3/4 暗褐色粘質土　粒状の土師器・炭少量含〔土坑９〕
9　10YR4/4 褐色粘質土　細かい平安時代の瓦片多量含〔土坑９〕
10　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　平安時代の瓦片少量含〔土坑９〕
11　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混礫（径0.5～５㎝）〔井戸24〕
12　7.5YR4/3 褐色粘質土　平安時代の瓦片・径１～２㎝の礫少量含〔井戸24〕
13　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　炭少量含〔江戸時代：柱穴〕
14　10YR4/4 褐色粘質土　堅く締まっている〔江戸時代後半頃の整地層〕
15　10YR3/3 暗褐色粘質土　平安時代の瓦多量含〔土坑26〕
16　10YR3/3 暗褐色粘質土　平安時代の瓦多量含〔土坑26〕
17　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　平安時代の瓦片少量含〔土坑26〕
18　10YR4/4 褐色粗砂〔土坑26〕
19　10YR7/6 明黄褐色粘質土混10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　平安時代の瓦片少量含〔土坑26〕
20　10YR5/6 黄褐色粘質土と10YR3/3暗褐色粘質土（土師器・炭・平安時代の瓦少量含）〔土坑26〕
21　10YR5/2 にぶい黄褐色粘質土　粒状の土師器・炭・径１㎝の礫少量含〔江戸時代：包含層〕
22　10YR3/4 暗褐色粗砂礫（径0.5～１㎝）　径２～３㎝の礫少量含
23　10YR4/4 褐色粘質土混微砂
24　10YR5/6 褐色シルト　粒状の炭微量含
25　10YR4/4 褐色粘質土混微砂　径２㎝の礫少量含、粒状の土師器・炭微量含〔平安時代以前の自然堆積か？〕
26　10YR6/6 明黄褐色粘質土〔基盤層〕

柱穴25　土坑１の南西下層で検出した。径0.25m以上、深さ約0.3mである。平安時代の瓦小片と共に、緑釉瓦が１点出土している。

土坑１　調査区南東で検出した。南北3.6m以上、東西2.8m以上の不定形土坑で、東端は調査区外となり、南端は撹乱に壊されていた。土坑の北端に沿って、径0.2～0.5mの柱穴が数基並んでいるが、関連性を確認することができなかった。土師器皿、施釉陶器椀、青磁椀・皿、肥前磁器染付一輪挿、丸・平瓦などが出土している。

土坑26（図版１）　調査区北西で検出した。南北4.4m以上、東西2.6m以上の隅丸方形の土坑になる。最も深いところで約2.2m、埋土上層は平安時代の瓦を多量に含む暗褐色粘質土、下層は平安時代の瓦を少量含むオリーブ褐色粘質土や基盤層の明黄褐色粘質土などが混じった土であった。遺構の底に土坑状の窪みが認められることから、土取りを連続して行っていたとみられ、その後瓦の廃棄土坑として使用されたと考えられる。出土遺物は、肥前磁器染付椀、平安時代前期から中期の軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、緑釉瓦、土師器皿、緑釉陶器、灰釉陶器椀片などと、平安時代後期の軒丸瓦がある。



1　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土　漆喰ブロック・炭ガラ少量含〔近現代盛土〕
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土　炭少量含〔土坑１〕
3　10YR3/4 暗褐色粘質土　炭・径１㎝の礫少量含〔柱穴〕
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　土師器・炭少量含〔江戸時代：土坑〕
5　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　炭・粒状の土師器・径２～５㎝の礫少量含〔溝８〕
6　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　炭多量含、土師器少量含〔溝８〕
7　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土〔溝８〕
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混10YR5/6黄褐色粘質土　漆喰・炭微量含〔溝８〕
9　10YR6/6 明黄褐色粘質土〔基盤層〕

図６　溝８断面図（１：40）

３．遺　　物（図７～11、図版２）

出土遺物は、整理箱に18箱あり、内訳は土器類２箱、瓦・石製品類16箱である。遺物の大半は平安時代の瓦であり、江戸時代の土坑９や土坑26から出土した。平瓦が主体であったため、軒丸・軒平瓦以外は法量が確認できるとみられた瓦をサンプルとして採集している。平安時代中期の遺物も同様に江戸時代の土坑26から少量出土している。また、緑釉瓦の細片は柱穴25や土坑12・26から合計４点、基壇化粧などに使用されていたと見られる凝灰岩は土坑26から出土し、整理箱に２箱分サンプルとして採集している。江戸時代以降の遺物は、当該期の柱穴、井戸、溝、土坑などから出土した。ここでは、土坑26出土の平安時代瓦と加工痕のある凝灰岩について詳述する。なお、瓦の調整の方向は瓦当面に直交する場合は縦、平行の場合は横と記載する。

軒丸瓦（図７）　瓦当文様は４種類あり、平安時代前期が２点（２種類、図７－１・２）、平安時代中期が３点（１種類、図７－３～５）、平安時代後期が１点（図７－６）ある。

１は複弁十一弁蓮華文である。弁の中央が盛り上がっている。間弁は撥状を呈するが、一見しただけでは蓮弁と見間違うほど、形がわかりにくくなっている。蓮子は中心に１＋６個、中房は

真ん中が高く、周りに圏線が巡る。外区には、蓮弁を囲む界線と16の珠文がある。瓦当裏面上部に丸瓦を接合し、粘土を充填して接合しているため、瓦当裏面に上下方向のナデ痕が明瞭に残る。瓦当側面は横ケズリ、丸瓦側面は縦ケズリ、丸瓦凹面は布目の圧痕である。胎土は粗く、径１～５㎜の砂粒を多く含む。色調は黒色で、一部浅黄橙色を呈し、焼成は良好で硬い。大山崎瓦窯や大宅廃寺、平安宮采女町出土瓦などと同笵である。砂粒を多く含むことや、笵面が大山崎瓦窯のものよりも甘くなっていることから、笵が移動した先で造られたものとみられる。西賀茂瓦窯産の可能性がある。２は複弁蓮華文である。蓮弁２弁１単位の組み合わせに、１弁または３弁で間弁が入る部分が認められる。蓮子は１＋２個以上、外区に珠文が４個以上巡る。瓦当裏面上部に丸瓦を接合し、周りに粘土を充填する。周縁もその際に造られたとみられる。凸面・丸瓦側面は縦ケズリ、凹面は布目圧痕が残る。胎土はやや粗く、径１～２㎜の砂粒が少量入る。黒色で焼成はやや軟質である。西賀茂瓦窯のＮＳ107と同笵である。３～５は単弁八葉蓮華文である。弁端が尖り、撥状に広がる間弁の弁端も尖っている。中房中央が高く、圏線が巡る。界線の外側に珠文が16個配置されている。４の周縁には木目と目の細かい布の圧痕が確認できる。瓦当側面は横ケズリ、瓦当裏面は布目圧痕とユビナデで、４・５の中央は拳で抑えられたように強く窪んでいる。胎土はやや粗で、径１～２㎜の砂粒が多く含まれ、色調は黒色、焼成は軟質である。すべて同じ笵であり、瓦当文様の状態から４→３→５の順で造られたとみられる。４の中房に「栗」のような左右反転文字の銘が入っているが、３の中房は磨滅していて不明である。現在のところ、出土例は未確認であるが、栗栖野瓦窯産の可能性が高い。６は複弁蓮華文である。蓮弁は互いに接しており、子葉は盛り上がっている。外区に幅約１㎝の突帯があり、その上には珠文が５個以上配置されている。瓦当裏面は上下方向のユビナデ、瓦当側面から周縁にかけてはナデを施す。胎土はほとんど砂粒を含まない。灰色を呈し、焼成は硬く締まっている。同じ文様は内裏で、同笵は

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代前期～中期	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、緑釉瓦、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、凝灰岩		軒丸瓦５点、軒平瓦11点、鬼瓦１点、平瓦３点、凝灰岩１点	10箱	２箱
平安時代後期	軒丸瓦		軒丸瓦１点	０箱	０箱
江戸時代前期	土師器、施釉陶器、肥前陶器、肥前磁器染付、焼締陶器、砥石、鉄製品(釘)、丸・平瓦			１箱	０箱
江戸時代中期	土師器、肥前磁器染付、施釉陶器、銅製品(煙管吸口)			１箱	０箱
江戸時代後期以降	土師器、施釉陶器、肥前磁器、丸・平瓦			０箱	１箱
合　計		18箱	22点（３箱）	12箱	３箱

朝堂院から出土しているが、いずれも中期とされる。しかし、胎土や造り方などから６については後期のものであると考えられ、笵の使いまわしが行われたと解釈している。

軒平瓦（図８・９）　瓦当文様は８種類あり、平安時代前期が３点（２種類、図８－７～９）、平安時代中期が21点（６種類、図８－10～14、図９－15～17）ある。10・11・13の文様を持つ瓦は数点出土しているが、同笵であることから、10のタイプは１点、11・13のタイプは各２点ずつを掲載した。

７は均整唐草文である。中心飾りはＣ字が対向したもので、Ｃ文字の上が２重になり、唐草が３反転する岸部瓦窯のＮＳ205Ａと同文様になるとみられる。主葉は強く巻き込み、支葉は数枚に分かれて延びる。界線の外側に珠文が10個以上並び、多くが界線と接している。瓦当上部と顎部は横ケズリ、凹面は布目圧痕、凸面は縄目タタキで、曲線顎である。胎土は径２㎜以下の砂粒を多量に含むが、密である。色調は黄灰色、焼成は良く硬い。西賀茂醍醐の森瓦窯に同笵がある。凸面に瓦当から約８㎝の幅で、横方向に朱色塗料が残存する。８・９は均整唐草文である。中心飾りは対向するＣ字文で、唐草は２単位で４反転している。主葉は強く巻き込み、支葉は太くあまり延びない。界線の周りに、珠文が均等に並ぶ。瓦当上部と顎部は横ケズリ、凹面は布目圧痕、凸面は縄目タタキ、曲線顎である。胎土は径２㎜以下の砂粒を多く含み、緻密である。色調は灰色を呈する。焼成は硬く焼き締まる。凸面に朱が横方向に付着している。西賀茂角社西群瓦窯のＮＳ209と同文様で、８・９は同笵である。10は均整唐草文で、中心飾りは対向するＣ字の間に十字を配置する文様である。唐草は緩やかに３反転し、主葉は巻き込まない。瓦当面全体に木目が残存するが、周縁はなでているとみられ木目が認められない。曲線顎で、瓦当上面と顎部を横ケズリ、凹面を布目圧痕、凸面を縦ケズリする。

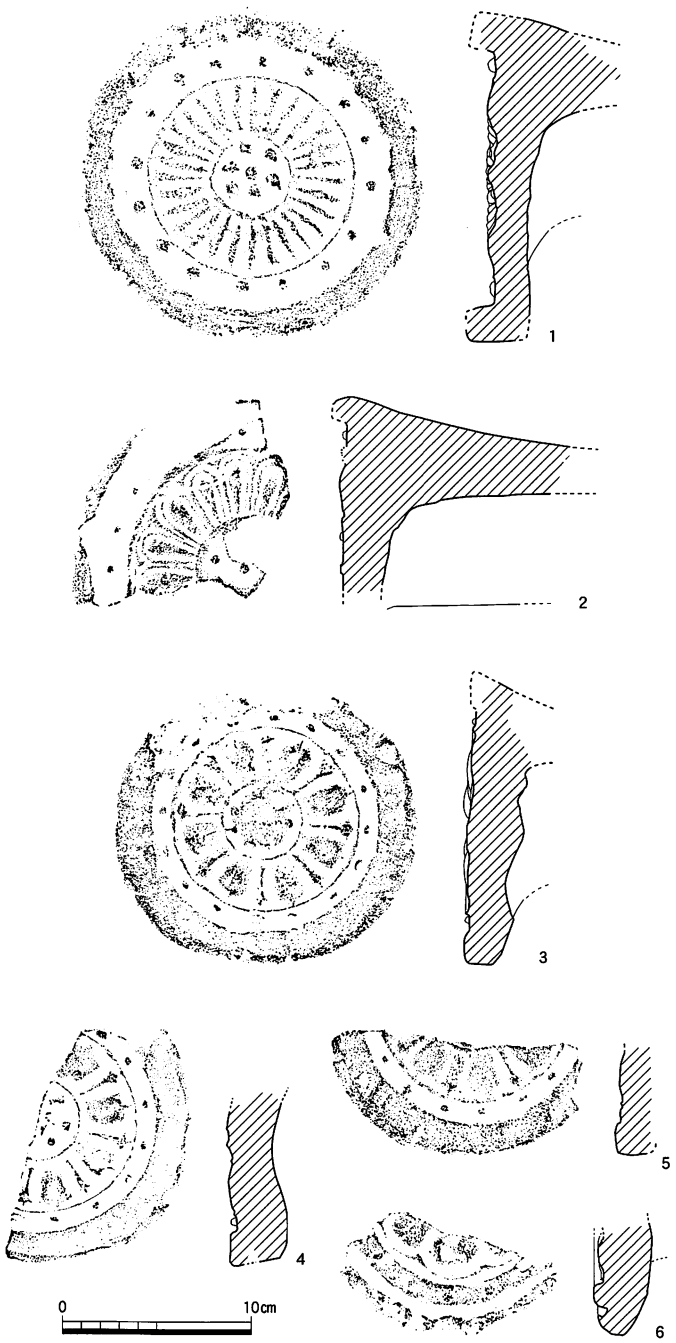


図７　軒丸瓦拓影・実測図（１：４）

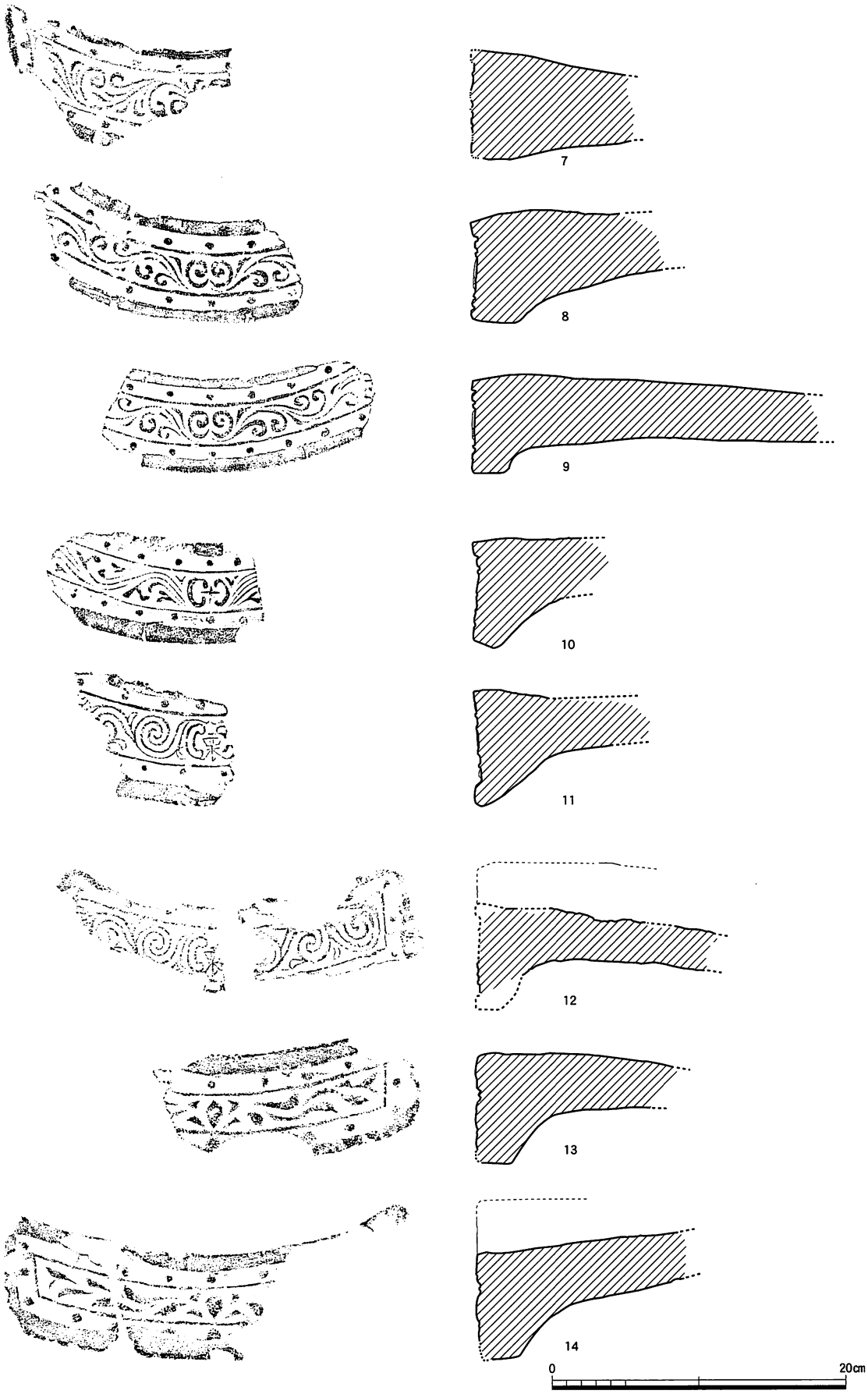


図８　軒平瓦拓影・実測図（１：４）

胎土は砂粒がほとんど入らず、密である。灰白色を呈し、硬く締まっている。中心飾りの十字の先端が尖っていないが、栗栖野３号窯周辺灰原出土のものが同笵になると考えられる。同笵瓦は、その他に大極殿や内裏などからも出土している。11・12は中心飾りに「栗」の左右反転文字を持つ均整唐草文である。対向する複線のＣ字文上部から、複線の唐草が派生して３反転する。主葉の巻き込みは強く、支葉は所々に複線で配置される。外区に珠文が巡る。顎部は横ケズリ、凹面は布目圧痕、顎部裏面から凸部にかけて縦ケズリ（11）や横ケズリ（12）が施されている。顎部側面から平瓦側面は縦ケズリである。胎土はやや粗雑で、径２㎜以下の砂粒を多く含む。色調は11が灰色、12が黒色で一部黄橙色を呈する。12は焼き締まっているが、11と掲載していない資料はやや軟質である。11・12は同笵で、内裏出土に同笵とみられるものがある。栗栖野瓦窯産である。13・14は中心飾りに花文を持つ唐草文である。花文の中心は紡錘形を呈する。唐草は延びた状態で上下に派生し、それぞれが離れている。界線の周りに珠文を配置するが、周縁に接するものもある。瓦当面上部と顎部を横ケズリ、凹面を布目圧痕、凸面は縦ケズリを施す。胎土は径２㎜以下の砂粒を多く含み、やや粗である。灰白色で、焼きは軟質である。小野瓦窯産である。平安宮内裏などに同笵瓦がある。15は３反転する唐草文である。主葉と支葉は複線で描かれる。界線の周囲に点状の小さな珠文が配置されている。顎部は欠損しているが、曲線顎とみられる。瓦当上面は横ケズリ、凹面は布目圧痕、凸面と側面は縦ケズリで、焼成は堅緻である。胎土は径２㎜以下の砂粒を多く含み、やや粗である。河上瓦窯産で、同文様が釈迦谷廃寺で採集されている。16は中心飾りがリボン状になる唐草文である。唐草は中心飾り上部から派生し、界線に当たって下降する。主葉・支葉の先はほとんど巻かない。中心飾り斜め右下に三角形状の文様があり、外区には小さい珠文が巡る。瓦当右端は笵が浅くなっており、界線・珠文・周縁の区別がつかない。瓦当上部・顎部は横ケズリ、凹部は布目圧痕、凸部は縦ケズリである。凹部の布目とケズリの境目には、横方向のナデとみられる窪みが確認できた。池田瓦窯産で、同文様に大日廃寺出土のものがある。17は唐草文を太い界線で囲み、大きな珠文を配している。唐草は緩やかな波状を呈し、主葉は先端が丸くなって曲がっている。瓦当上部と顎部は横ケズリ、凹面は布目圧痕、顎部裏面は縦ケズリで曲線顎となっている。同笵は大極殿や豊楽院などにあるが、瓦窯は不明である。

鬼瓦（図９）　18は右耳付近の破片である。顔の周辺には強く巻き込んだ唐草文を配し、珠文と周縁を巡らす。側面は縦ケズリ、裏面はユビナデやユビオサエの痕跡が認められる。灰黄色で、焼締まっており、胎土は径１㎜の砂粒を多く含むが密である。豊楽殿北西隅出土や西賀茂瓦窯出土のものと同文様である。

丸瓦　大別すると、幅が13.0㎝程度のものと17.5㎝程度のものにわかれる。調整は凹面が布目圧痕、凸面が縄目タタキのち縦ケズリを施すものが大部分を占めた。僅かではあるが、凹面が布目圧痕で凸面は横ケズリ、凹面が糸切り痕と短冊状圧痕で凸面は縄目タタキ、凹面が布目圧痕と糸切り痕で凸面は縄目タタキと縦ケズリというような組み合わせをもつ丸瓦が出土している。胎土は密で、焼きは堅緻なものが多い。割れて法量が判明しないため、図は掲載していない。

平瓦（図９）　土坑26の中から大量に出土しているが、長さと幅が判明したものは掲載した１点

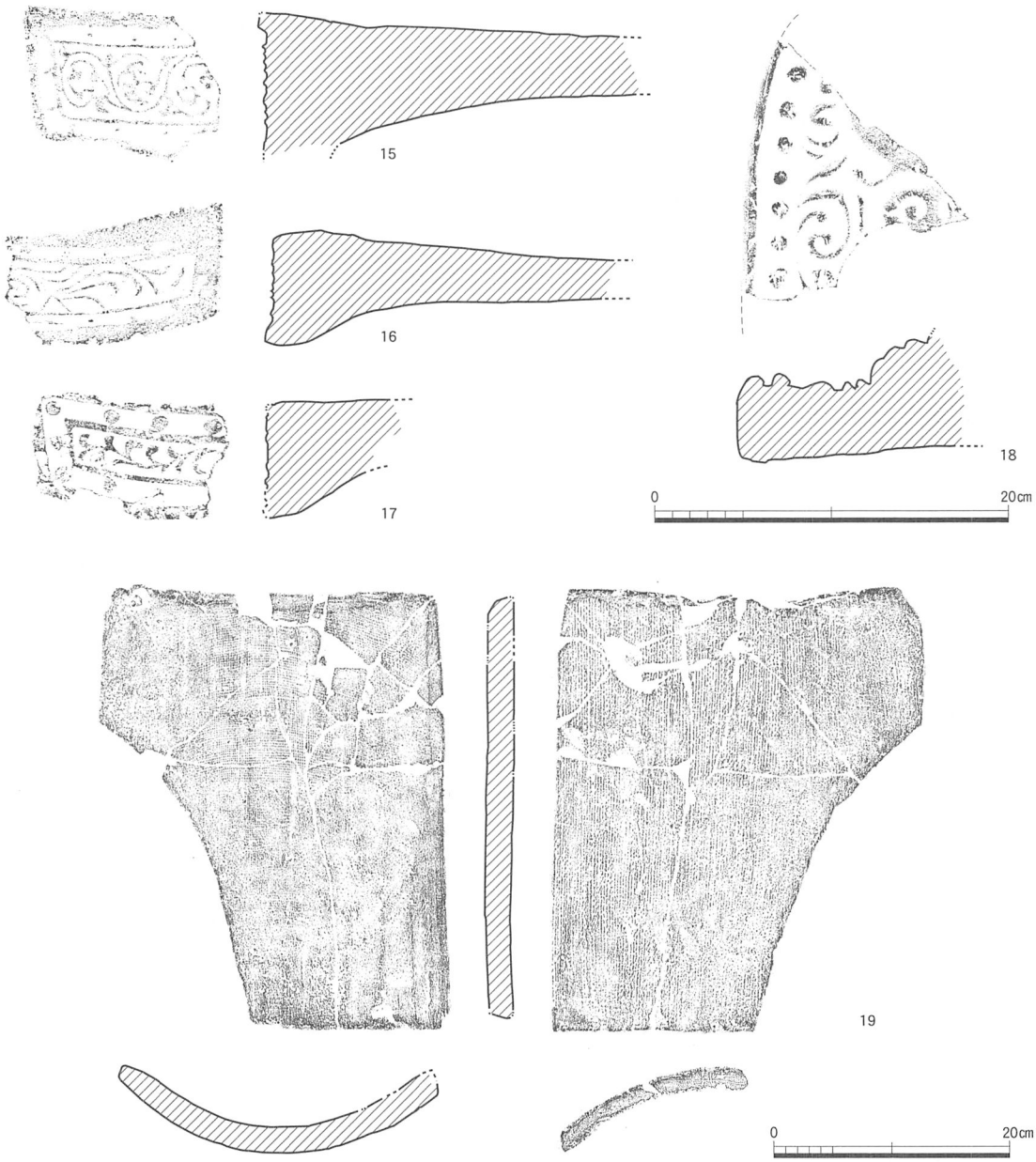


図９　軒平瓦、鬼瓦、平瓦拓影・実測図（１：４、19は１：６）

のみである。厚さ２～３㎝が主流であることから、他の瓦も掲載した平瓦と同じくらいの法量をもつと考えられる。凹面が布目圧痕で凸面が縄目タタキの瓦が最も多かった。その他には、凹凸面に斜め糸切り痕が明瞭に残るもの、凹面は布目圧痕で凸面が縄目タタキと縦ケズリ、凹面は布目圧痕で凸面は糸切り痕、凹面は布目圧痕と糸切り痕で凸面が糸切り痕、凹面は布目圧痕と短冊状圧痕で凸面は糸切り痕、凹面は布目圧痕で凸面は糸切り痕と縄目タタキという調整をもつものがあった。胎土・色調・焼成は様々なものがある。

19は凹面が布目圧痕、凸面が縄目タタキ、側面がケズリ調整されている。凹面に短冊状の押圧痕が認められる。長さ35.1㎝、幅26.8㎝、高さ7.3㎝、最大厚2.8㎝で、色調は黒色で一部灰白色を呈する。胎土は径１㎜の砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。端面中程に、２本の浅い平行沈線とそれを横切る横線が認められるが、ヘラ描きという確証は得られていない。

刻印（図10）　採集した瓦には、２点１種類の刻印を確認することができた。刻印は、直径が６～７㎝の円形で、竹管状工具によって押圧されている。20・21共に平瓦の端面で確認した。

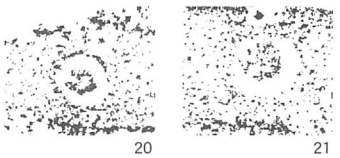


図10　刻印拓影（１：２）

加工痕のある凝灰岩（図11）　サンプルとして取上げを行った中に、面を持つ凝灰岩（22）が含まれていた。面として確認できた部分は２面である。面は幅15㎝、高さ8.5㎝、奥行5㎝分が残存していた。風化しているため、加工の単位などは不明瞭である。

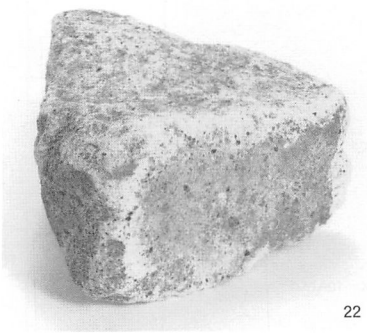


図11　凝灰岩

4．まとめ

当初検出が見込まれていた宣政門基壇だけではなく、朝堂院関連遺構も検出することができなかった。調査地東隣接地では宣政門基壇の凝灰岩列や抜取穴が、南側の道路でも凝灰岩列が検出されており（図12）、宣政門西縁推定ラインは調査地と東側の宅地との境界にあたっていたことから、ほぼコンクリート塀の真下に位置するとみられた。そのため、最終確認として、調査区東の一部を塀付近まで拡張し、1994年調査の遺構検出標高よりも深く掘り下げた。しかし、宣政門基壇に関する遺構はまったく検出できなかった。

周辺で検出されている遺構を再検討したところ（図12、表３）、宣政門は推定位置より全体に東に少しずれていた可能性が考えられた。1994年調査（図12・表３－２）の宣政門基壇東縁の凝灰岩列は階段と考えられていることから、この遺構は基壇より東に出ていたとみられているが、この凝灰岩列のすぐ西で検出された基壇跡とみられる抜取穴と、1979～1980年に検出された凝灰岩列（図12・表３－１）が一直線上に並び、それが宣政門東縁推定ラインより約１ｍ東に位置している。また、1994年調査の基壇西縁凝灰岩抜取穴（図12・表３－２）と南道路の基壇西縁凝灰岩列（図12・表３－１）の延長線も東に約１ｍの位置にあり、同様に推定ライン上から外れている。その他に1994年の西縁凝灰岩抜取穴（図12・表３－２）の南端が西に曲がることから、階段があったことが考えられるが、階段の西縁は当初の推定ライン上にのることとなり、調査地東側の宅地内に入る。何れにしろ、今回の調査地内では、宣政門基壇西縁および西階段の検出の可能性が非常に薄いことがわかった。

江戸時代の遺構からは、江戸時代に大規模な土取りが行われていたことが明らかとなった。聚楽土と呼ばれる黄褐色粘質土を取り尽くしてはいないが、土坑は江戸時代遺構面とみられる部分から約1.5ｍの深さまで掘削されていた。調査区北西で検出した土坑26は、その土取り後の土地整理の際に集められた瓦を投棄したものであることが判明した。平安時代の瓦が層をなしていたことからも、調査区周辺での瓦の埋没・散乱状況が相当なものであったことが窺い知れた。また、土取り土坑が規則正しく並び、井戸や柱穴などを検出したことから、江戸時代は宅地であったと

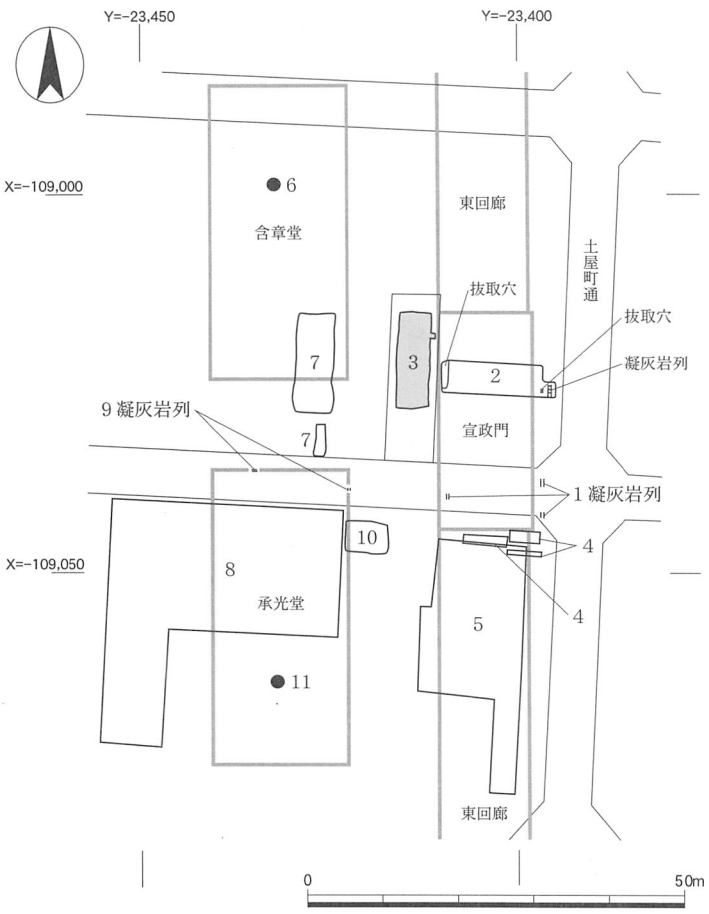


図12　調査地周辺の調査（1：1,000）

考えられる。承応3年（1654）以降の絵図によれば、調査地一帯は武家屋敷や京都所司代下屋敷であり、検出した遺構の多くはその関連遺構とみられる。

出土遺物では、平安時代の土器類の出土量は僅かであったが、瓦は大量に出土し、軒丸・軒平瓦はそれぞれ数種類ずつ出土している。瓦の出土量の多さから、宣政門や含章堂など調査地周辺にあったとされる建造物に葺かれていたものとみられる。出土瓦に二次的に火を受けた痕跡は認められず、焼けた壁土や炭化物なども混じっていなかったことから、たびたび火災にあった朝堂院の中でも、この周辺の建物は被災しなかったと考えられる。また、緑釉瓦片は数点出土しているだけであり、この周辺の建物で緑釉瓦が葺かれていた建物はなかったとみられる。

出土瓦の内容をより深く検討することで、平安宮に葺かれた瓦の様相をより明らかにできると考えられる。また、江戸時代の遺構の性格についても、京都所司代との関係から明らかにしていく必要があろう。

参考文献

『大谷中・高等学校構内遺跡発掘調査報告書』　大谷高等学校・法住寺殿跡遺跡調査会　1984年
『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』　大山崎町教育委員会　2005年
『木村捷三郎収集瓦図録』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成４年度』　京都市文化観光局　1993年
『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局　1986年
『慶長　昭和　京都地図集成1611～1940』　柏書房　1994年
財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』　角川書店　1994年
『坂東善平収蔵品目録』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1980年
『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年
『平安京跡研究調査報告　第４輯』　財團法人古代學協會　1978年
平安博物館編『平安京古瓦図録』　雄山閣　1977年

表３　周辺調査一覧表

番号	推定建造物	調査年	調査機関	方法	概　　要	引用文献
1	宣政門	1979～1980	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	基壇東縁・西縁の凝灰岩列を検出、東西幅（石列外縁）12.5m	1-1、1-3
2	宣政門	1994	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	基壇東階段とみられる凝灰岩列および抜取穴、基壇西縁の凝灰岩抜取穴、東西抜取穴幅（溝外縁）12.05m、古墳時代の溝？	1-1、2
3	宣政門	2008	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	平安時代遺構未検出、平安時代前・中期の瓦出土	本報告
4	東回廊	1974	平安博物館	発掘	平安時代の遺構未検出	3
5	東回廊	1982	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	平安時代遺構未検出	1、4
6	含章堂	1983	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	平安時代の遺物包含層	1-1、5
7	含章堂	1987	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	平安時代の瓦溜め、溝状窪み、小穴を検出	1、6
8	承光堂	1976	平安博物館	立会	平安時代の包含層または瓦溜めを検出	3
9	承光堂	1979～1980	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	基壇北縁・東縁の凝灰岩列を検出	1-1、1-3
10	承光堂	1980	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	平安時代の遺物包含層	1-1、1-2
11	承光堂	1988	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	平安時代の落ち込みを検出	1-1、7

引用文献

1　『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年
　1　辻　純一「３－Ⅰ朝堂院跡」
　2　平田　泰「付章14　朝堂院跡」
　3　高橋　潔「付章32　朝堂院・太政官・中務省跡」
2　長戸満男「Ⅱ平安宮朝堂院宣政門」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成６年度』　京都市文化観光局　1995年
3　松井忠春「平安宮推定朝堂院東廻廊跡発掘調査の概要　附　朝堂院承光堂跡の立会調査」『古代文化』11-28　財団法人古代學協會　1976年
4　本　弥八郎・長宗繁一「Ⅱ朝堂院跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年
5　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年
6　梅川光隆「Ⅲ平安宮朝堂院」『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988年
7　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』　京都市文化観光局　1989年

Ⅱ　八幡古墳群

1．調査経過

調査地は、京都市左京区岩倉幡枝町に所在する。託児所兼個人住宅建設に伴う事前調査である。

幡枝の小盆地の北側、幡枝八幡宮（針神社）の鎮座する丘陵南側斜面に八幡古墳群は所在する。京都市遺跡地図では、丘陵南裾部の標高105mの等高線付近に１号墳が、110～120mの等高線上に２号墳が、八幡神社の南側120mの等高線付近に３号墳がある。２号墳は、南側開口の横穴式石室をもち、半壊する。人頭大から長径60㎝程の川原石を積んだ側壁が露出している。本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録[1)]によれば、２号墳は直径13m、３号墳は直径10mの円墳とされる。

今回の調査地は、１号墳に推定される場所の北東に隣接する地点である。１号墳は現状では確認できないため、墳丘の痕跡や周溝などを確認するための調査となった。

調査対象地の現況は、北側が竹林で他は盛土が行われている。東に接する道路との境界に高さ1.5mのネットフェンスがあるが、ほぼ埋まった状態になっており、また北側の丘陵裾部からも約１m高くなっている。調査地の標高は、110.7mである。

調査区は南北16m、東西３mで設定し、2008年５月２日に調査資材を搬入し、５月７日から重

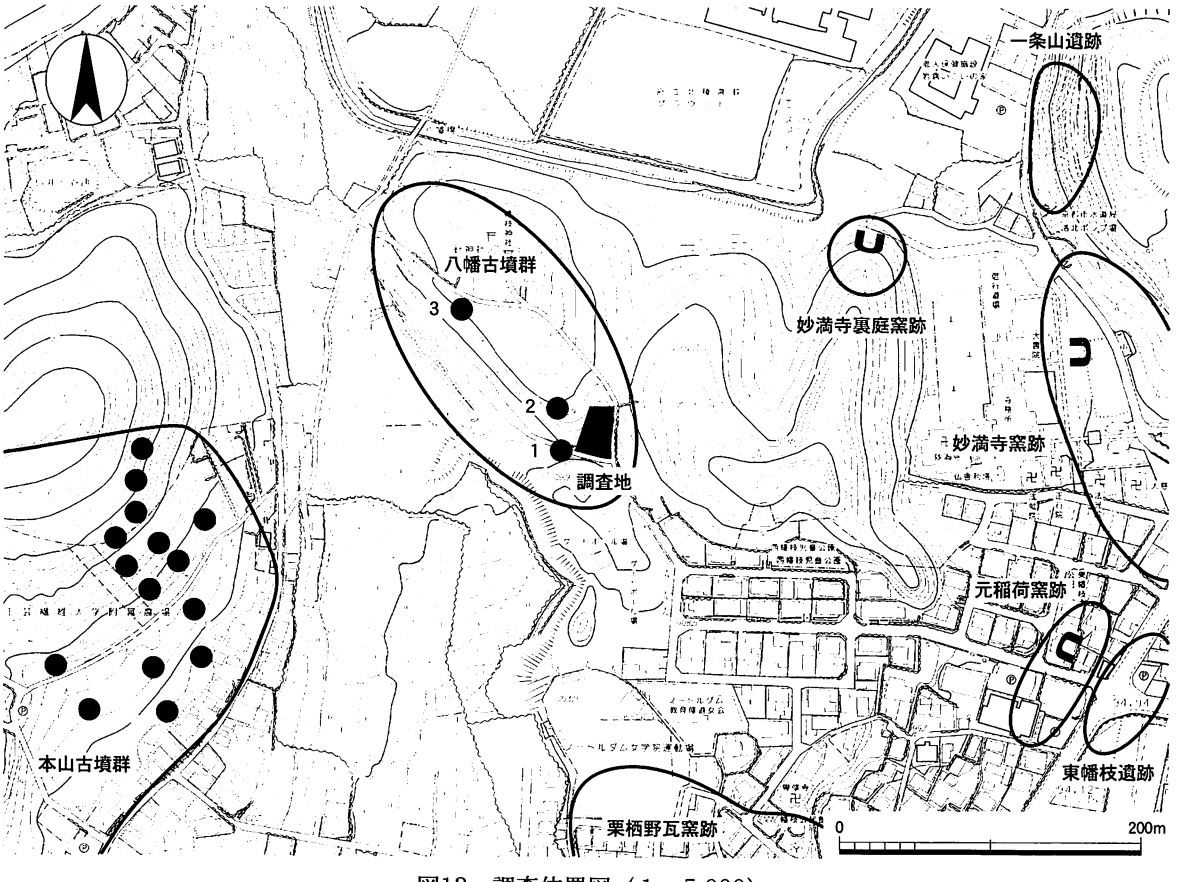


図13　調査位置図（１：5,000）

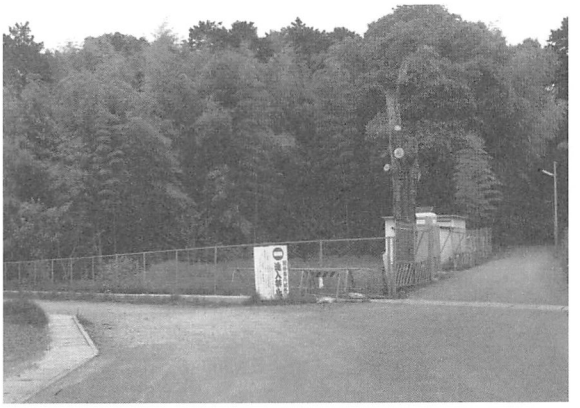


図14　調査前全景（南東から）

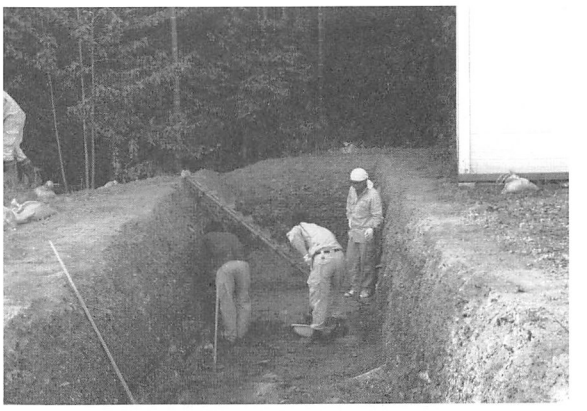


図15　調査風景（南から）

機により盛土の掘削を開始した。しかし、盛土の状態が脆く、壁面が崩壊し危険が生じたため、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下、京都市文化財保護課とする）の指導を受け掘削を中止した。同月９日実測・写真の記録を作成し、５月14日までに調査資材を撤去して、現場作業を終了した。また、補足調査として、12月25・26日に八幡古墳群の地形測量と２号墳石室の測量調査を実施した。

２．遺構・遺物（図17・18）

調査トレンチ北端で、表土下2.9mの標高107.8mで地山とみられる明赤褐色粘質土を確認するが、南側では、表土下3.4m、標高107.3mでもコンクリート・アスファルト・建築廃材を含む盛土であった。また、遺物も出土していない。

３．ま と め

今回の調査区内では、古墳の痕跡を確認することはできなかった。また、調査区北側の丘陵裾になるとみられるトレンチ北端で、地山層を確認したに留まる。

八幡古墳群の立地する丘陵は、調査地北側から南に開く谷地形があり、当調査地も谷

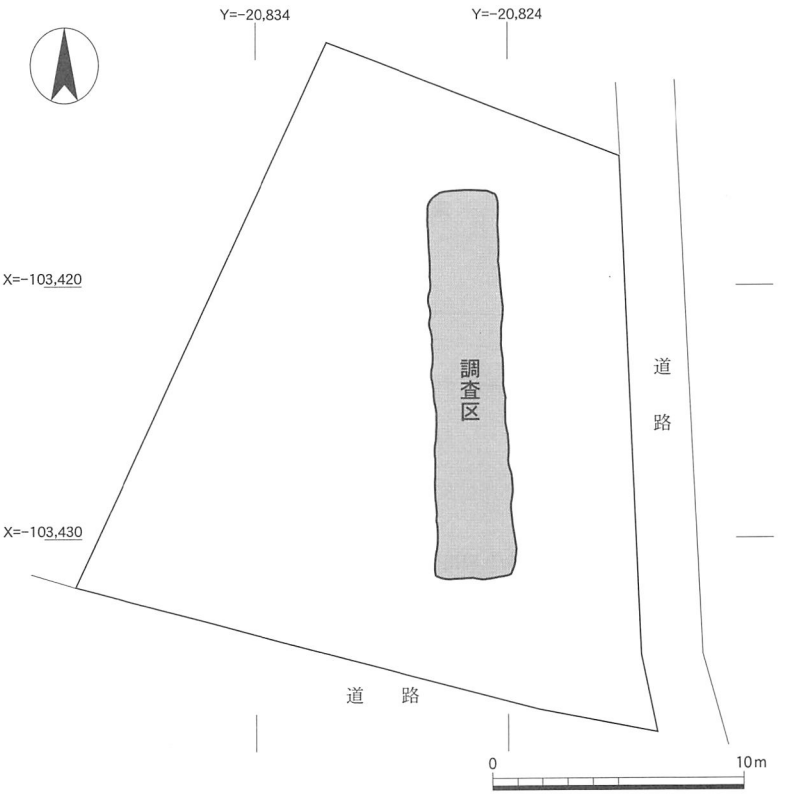
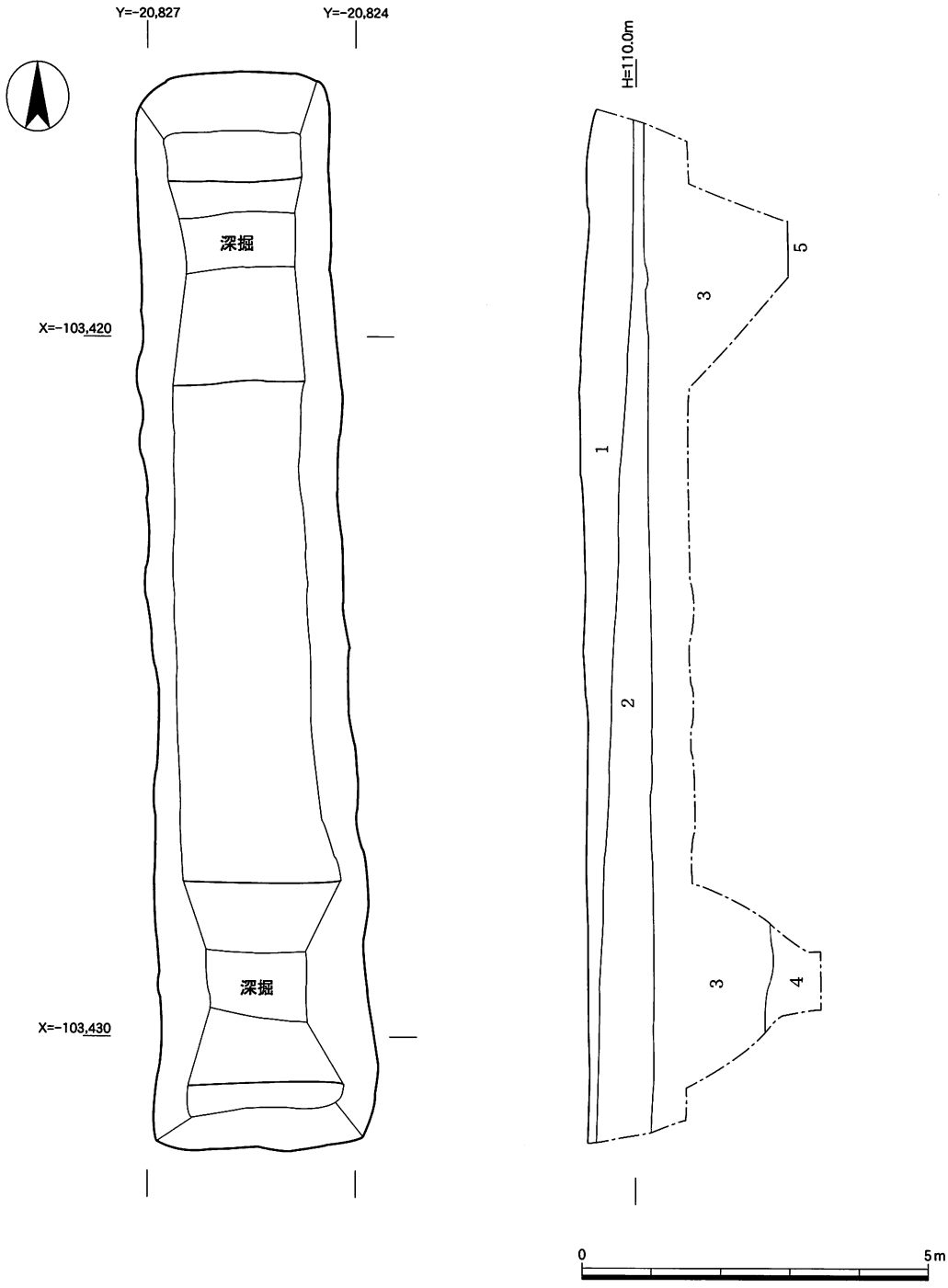


図16　調査区配置図（１：300）



1　盛土Ⅰ 7.5YR6/2 灰褐色泥砂（φ10～45㎜）
2　盛土Ⅱ にぶい黄褐色泥砂（砕石を帯状に含む）
3　盛土Ⅲ 7.5Y4/3 暗オリーブ褐色泥砂（φ20～40㎜）
4　盛土Ⅳ 5BG3/1 暗青灰色色粘質土（コンクリート・アスファルトガラ・木材多量に含む）
5　5YR5/8 明赤褐色粘質土（基盤層）

図17　調査区実測図（1：100）

地形の中に入るものとみられる。

幡枝地区は2000年頃から区画整理事業が実施された。当調査地周辺は、区画整理以前に残土置き場・資材置き場などとして利用されていたようであり、八幡１号墳は、当地の区画整理開始以前に壊滅していたものと考えられる。

区画整理の施工により幡枝地区は、著しく市街化が進んでおり、八幡古墳群の立地する丘陵も今後開発されていく可能性が考えられた。そのため、古墳の位置と現状を正確に把握し、本件調査区との関係を明確にする目的で、補足調査として地形測量を実施した。その結果、２号墳は、標高112m付近にあり、直径約13mの円墳。３号墳は、標高119m付近にあり、直径約15mの円墳と推定される。

註

1）「京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録」同志社大学文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ　1971年

図18　調査区全景（北から）

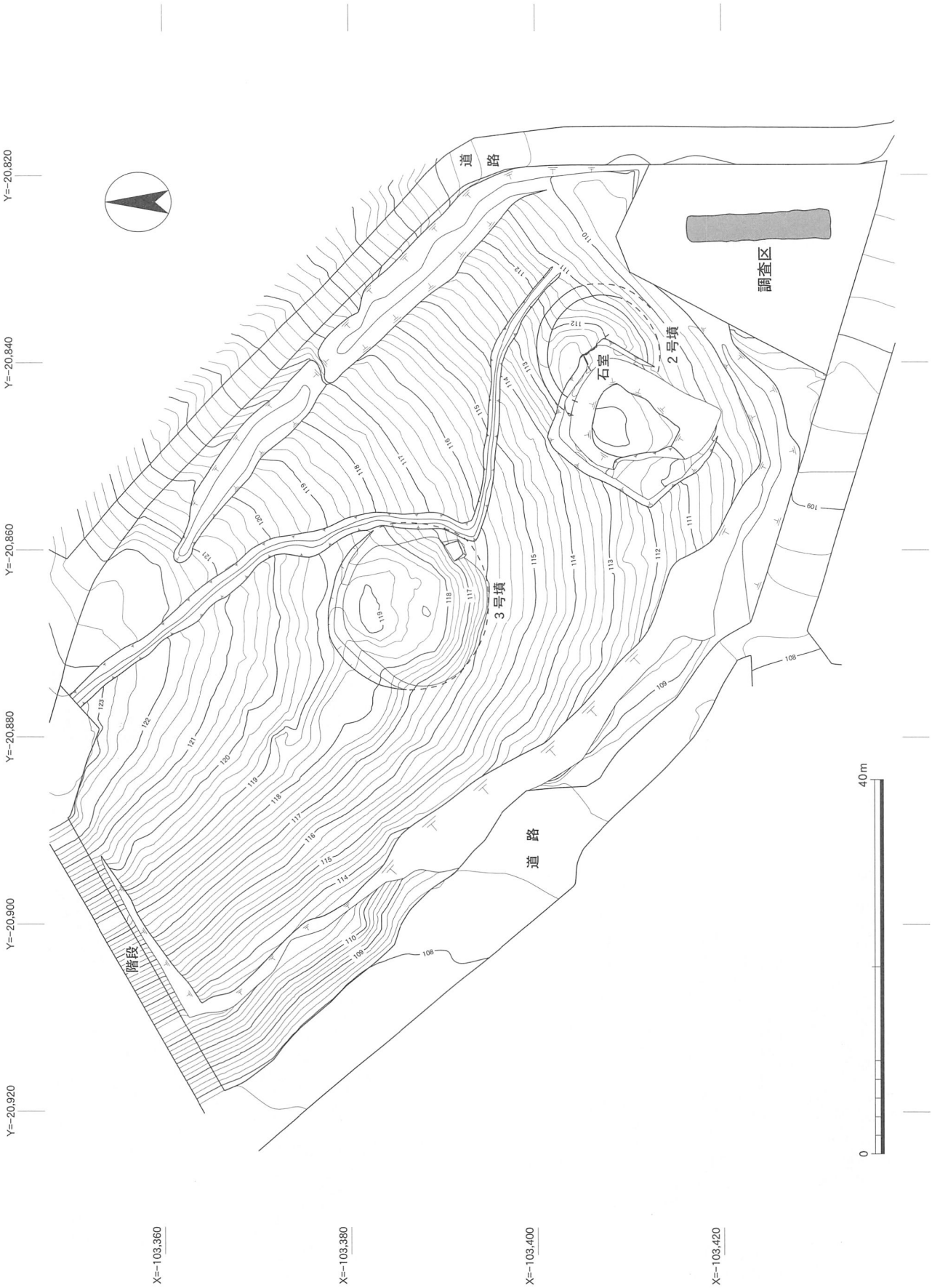
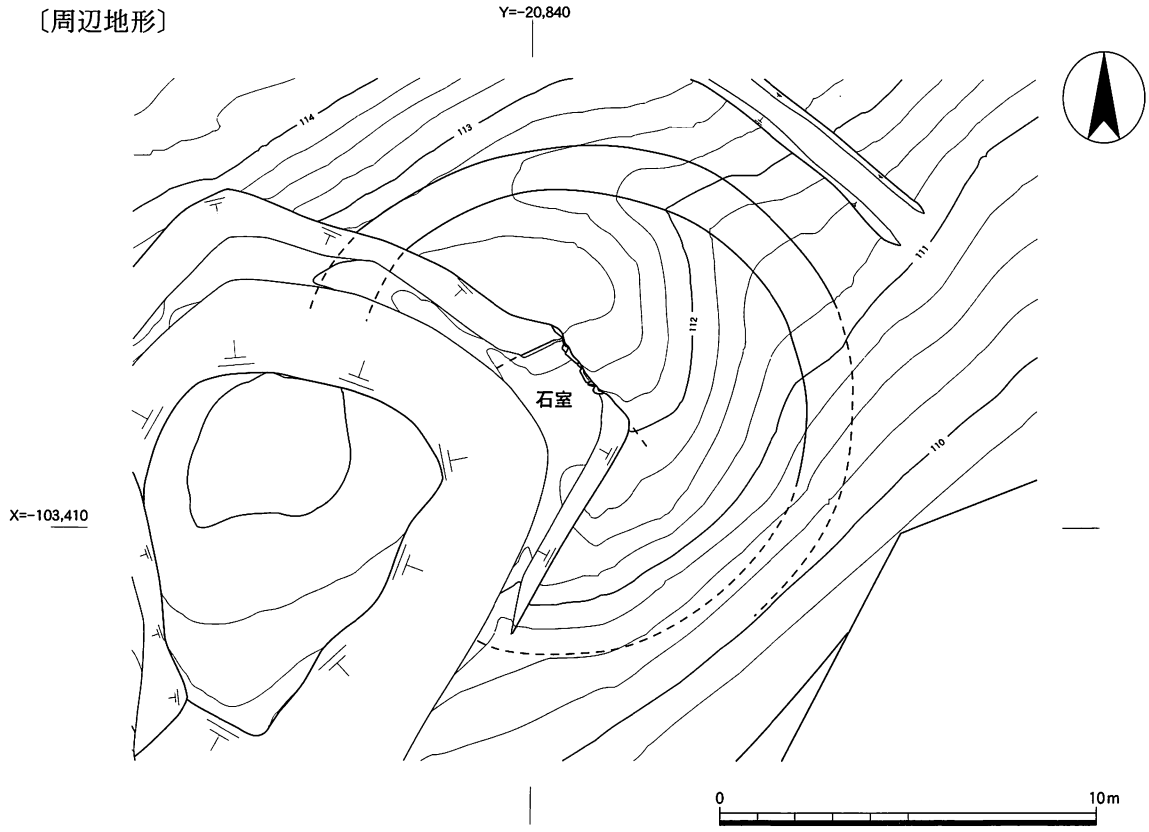
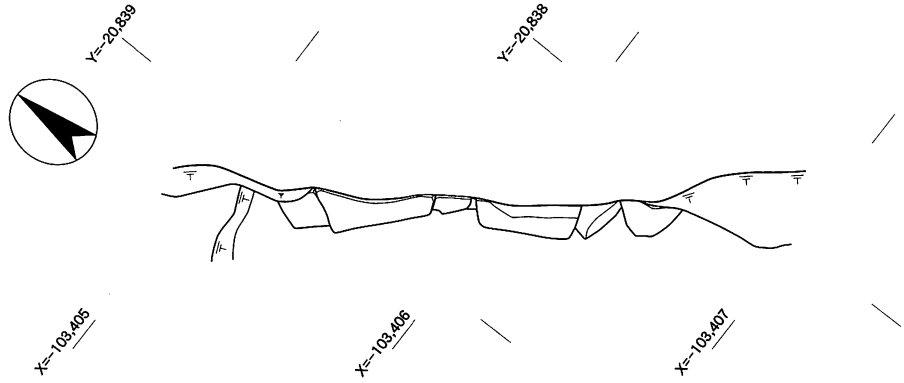


図19　周辺地形測量図（1：600）

〔周辺地形〕



〔石室側壁平面〕



〔石室側壁立面〕

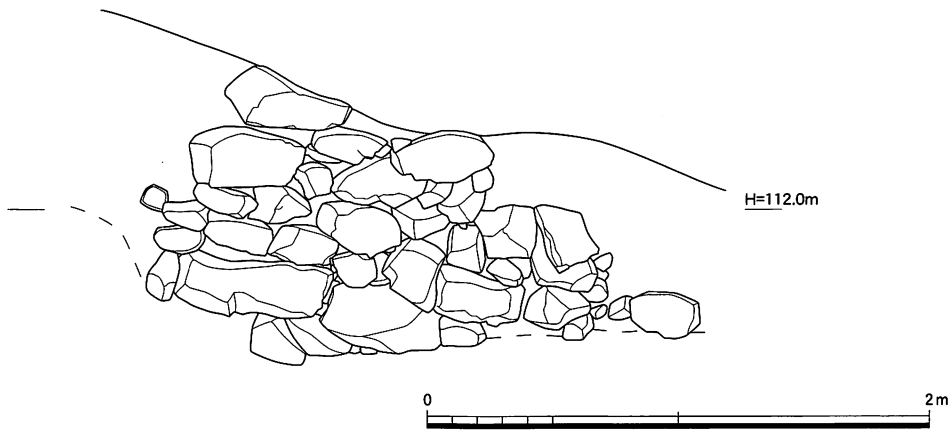


図20　2号墳実測図（1：200、1：30）

Ⅲ　北白川廃寺

1．調査経過

（1）調査経過

今回の調査は、診療所の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都市左京区北白川堂ノ前町36番地に所在し、1934年に東方基壇（金堂）跡、1975年に塔跡が発見された北白川廃寺の寺域南限推定地に位置することから、北白川廃寺に関連する遺構の検出が期待された。

調査区は、調査地の西寄りに、南北約11m、東西約7.5m、面積約83㎡の方形に設定した。調査は、2008年２月１日から開始した。表土下0.6～１mの近現代盛土と耕土を機械力により除去した後、４面に分けて調査した。各面で図面・写真などの記録を録り、最後に断ち割って下層の確認を行なったが、北白川廃寺の時期に相当する遺構は、確認できなかった。その後埋戻しを行い、３月７日にはすべての作業を終了した。なお、調査中は、適時、京都市文化財保護課の検査・指導を受けた。

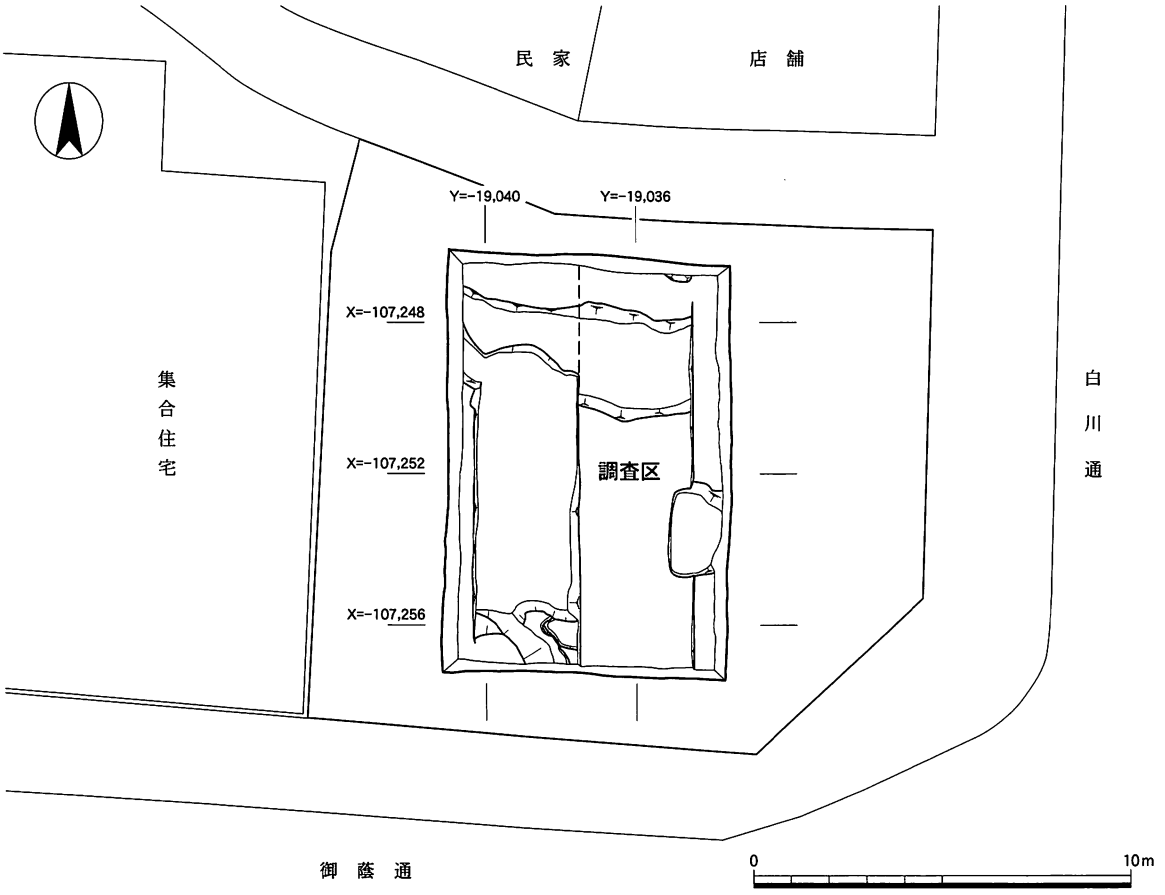


図21　調査区配置図（１：200）

図22　調査前全景（南から）

図23　調査風景（北西から）

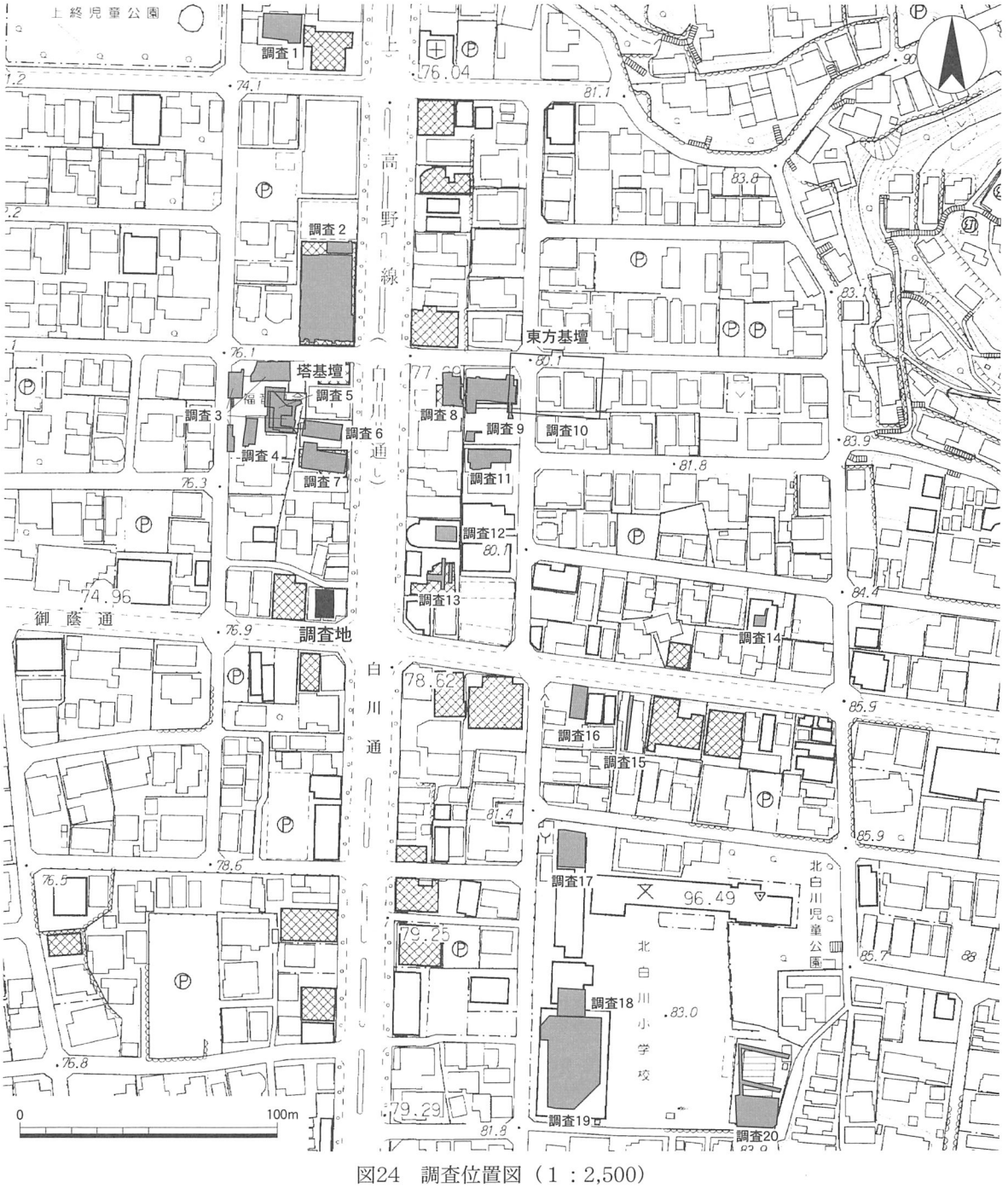


図24　調査位置図（1：2,500）

表４　周辺調査一覧表

番号	所　在　地	期　　間	面積㎡	調　　査　　内　　容	文　　献
1	左京区北白川東瀬ノ内町43	1981.08.05～1981.08.23	200㎡	縄文時代の包含層、奈良時代の柱穴・溝・土坑、平安時代の溝、室町時代の溝・柱穴	『北白川廃寺跡発掘調査概要』昭和56年度　文観局・埋文研 1982年
2	左京区北白川山田町１・他	1990.12.03～1991.04.09	730㎡	縄文時代の竪穴住居・集石・土坑、飛鳥時代の掘立柱建物、奈良～平安時代の東西築垣・溝・土坑・掘立柱建物	『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1994年
3	左京区北白川東瀬ノ内町50-1	1995.05.10～1995.09.20	413㎡	縄文時代の包含層、飛鳥時代の溝、白鳳時代～平安時代の土坑、塔基壇（瓦積から石積へ改修）	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成７年度　市民局　1996年
4	左京区北白川東瀬ノ内町４	1974.10.01～1974.10.20	53㎡	塔跡の南西部	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
5	左京区北白川東瀬ノ内町４	1975.6.28～1975.07.16	150㎡	塔跡基壇（１辺約14m）	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
6	左京区北白川東瀬ノ内町４	1975.03.25～1975.05.11	90㎡	塔跡基壇の南東隅	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
7	左京区北白川大堂町４	1991.07.01～1991.08.05	175㎡	奈良時代～平安時代の瓦溜・溝・土坑・柱穴	『平成３年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1997年
8	左京区北白川大堂町56	1990.07.16～1990.08.17	106㎡	縄文時代の包含層、白鳳時代の小鍛冶遺構、白鳳～平安時代の基壇状遺構・溝	『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』平成２年度　文観局 1991年
9	左京区北白川大堂町55、55-1	1980.06.03～1980.07.06	200㎡	奈良時代前期（白鳳）の基壇（金堂と西面回廊）、溝、掘立柱建物	『北白川廃寺跡発掘調査概報』昭和55年度　センター・埋文研　1981年
10	左京区北白川大堂町	1934.11		金堂基壇・規模は、東西119尺（約36m）、南北75尺５寸（約23m）の瓦積基壇	『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府 1939年
11	左京区北白川大堂町55-1･2	2005.11.09～2005.12.08	108㎡	飛鳥・奈良時代の西面・南面回廊跡・内溝・東西溝・瓦溜、平安時代の落込・溝	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成17年度　市民局　2006年
12	左京区北白川大堂町61-1	1987.11.18～1987.11.24	48㎡	弥生時代の土坑、平安時代の溝・柵	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　1988年
13	左京区北白川大堂町62	1999.10.14	43㎡	白鳳期の溝、近世の溝	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成11年度　市民局　2000年
14	左京区北白川上別当町18・大堂町47-3	1986.06.04～1986.06.05	50㎡	白鳳期の溝、平安時代の溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度　文観局・埋文研　1987年
15	左京区北白川上別当町29.25	1996.08.02	21㎡	焼土を含む土坑	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成８年度　文観局　1997年
16	左京区北白川上別当町26-1	2006.06.19～2006.07.06	73㎡	飛鳥時代の湿地状堆積（飛鳥時代に整地、底は未確認）、近代？ピット	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度　市民局　2007年
17	左京区北白川上別当町10北白川小学校	1982.03.01～1982.04.17	150㎡	縄文時代の包含層・河川、７世紀前半の竪穴住居・柱穴・掘立柱建物、近世の溝、柱穴	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』埋文研　1983年
18	左京区北白川上別当町70北白川小学校	1984.10.08～1984.10.20	100㎡	飛鳥時代の竪穴住居・平地住居の柱穴、落込・溝	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1987年
19	左京区北白川上別当町70北白川小学校	1994.09.22～1994.12.28	700㎡	飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・柱列・土坑・柱穴・ピット、平安中期の溝、中世～近世の溝、土坑など	『平成６年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1996年
20	左京区北白川上別当町70北白川小学校	1994.11.21～1994.12.16	260㎡	古墳時代の溝・包含層、飛鳥・奈良時代の土坑・柱穴、平安中期～鎌倉時代の溝、室町後半の濠、近世の暗渠など	『平成６年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1996年

調査主体：埋文研 → 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、センター → 京都市埋蔵文化財調査センター、文観局 → 京都市文化観光局、市民局 → 京都市文化市民局、調査団 → 北白川廃寺発掘調査団

図24 調査位置図と表４ 周辺調査一覧表の番号は、同一。また「北白川廃寺」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度に掲載の図13と表３を元に追加・調整した。

（2）位置と環境（図24、表４）

調査地は、京都盆地の北東部、比叡山から東山へ連なる尾根から派生する瓜生山の南西麓に位置する。東の山中からは、白川が流れ出て南へ下り、扇状地を形成し、東から西へ下がる地形となっている。約400m南には、白川沿いに近江の坂本に抜ける古道「山中越」が走る。北には北白川廃寺に瓦を供給したと考えられている北白川瓦窯跡がある。西には縄文時代の上終町遺跡がある。南には縄文時代から奈良時代前期の小倉別当町遺跡がある。南東には池田町古墳群がある。

北白川廃寺の発見は、1934年（調査10）、当地の北東約120mにおいて、京都市実施の土地区画整理工事中に偶然発見され、京都府により緊急調査が行われた。調査で検出された遺構は、瓦積基壇（東方基壇・推定金堂）であり、地名を冠して「北白川廃寺」と名付けられた。また、1974・75年（調査４～６）には、この基壇から西へ約80mの地点で調査が行われ、一辺が約14m方形の基壇（推定西塔）が検出された。さらに1995年（調査３）に、再度調査が行われ、基壇が瓦積から石積へと改修されていることなどが確認された。

上記以外の主な調査は、調査９で、東方基壇西端部とその西側で西面回廊跡を検出した。調査８では、回廊跡西側で南北溝を検出した。塔跡北東約20mの調査２では、東西溝と塔を囲むと考えられる柵を検出した。調査11では、西面回廊の延長部と南面回廊、内溝などを検出した。

既往の調査から北白川廃寺の造営時期は７世紀後半から８世紀初頭、廃絶時期は平安時代中期と考えられている。

小倉別当町遺跡では、調査17～20で飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、北白川廃寺の南約200mには同時期の集落が存在したことが判明した。

２．遺　　溝

（1）基本層序（図27）

調査地の現地表面は東から西へ緩やかに傾斜している。地表面の標高は77.5～78.0mである。基本層序は、厚さ0.2m前後の近現代盛土、厚さ0.4m前後の耕土、安土桃山時代から江戸時代の包含層である厚さ0.35～0.45mのオリーブ褐色や黄褐色を主体とする泥砂（第１～９層）、室町時

表５　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
鎌倉時代後半	谷状遺構56	第４面
室町時代前半	溝54	第３面
室町時代後半	耕作溝、柱穴など	第２面
江戸時代	土坑、柱穴、溝など	第１面。少数、まとまりはない

代後半までの包含層である厚さ0.45～0.6mの暗オリーブ褐色泥砂（第24～31層）、室町時代前半の包含層である厚さ約0.05mの黄褐色泥砂（第38層）、谷状遺構56の肩部を形成する厚さ0.4mのオリーブ褐色泥砂など（第55～57層）、褐色砂礫を主体とする自然堆積層（第58～69層）の順で堆積している。

調査では、耕土層直下を第１面、第８・９層直下を第２面、第31層直下を第３面、第55・56層直上を第４面とした。第１面は江戸時代、第２面は室町時代後半、第３面は室町時代前半、第４面は鎌倉時代後半の遺構が主体をなしている。

（２）遺　　構（図25・26、図版３）

第１面では、土坑・溝・柱穴を検出したが、数は少なく、まとまりはない。第２面では、少数の柱穴や土坑と東に向かってやや南寄りに振れる東西方向の耕作溝を多数検出した。第３面では、調査区北部で溝54を検出した。第４面では、調査区西半部を断ち割った際に、東西方向に広がる谷状遺構56を検出した。以下に、主要遺構について詳述する。

溝54　第３面の調査区北部で検出した。東西の長さは約７ｍあり、調査区外に延びる。幅は2.5～3.0m、深さは約0.7mである。埋土はオリーブ褐色を呈する泥砂に黄褐色系の砂が混じるものを主体とする。砂の混入具合から、流水があったとみられる。造られた時期は室町時代前半と考えられるが、埋土から出土した遺物が室町時代後半であることや、第３面上層が安土桃山時代の層であることから、室町時代後半に廃絶したと考えられる。

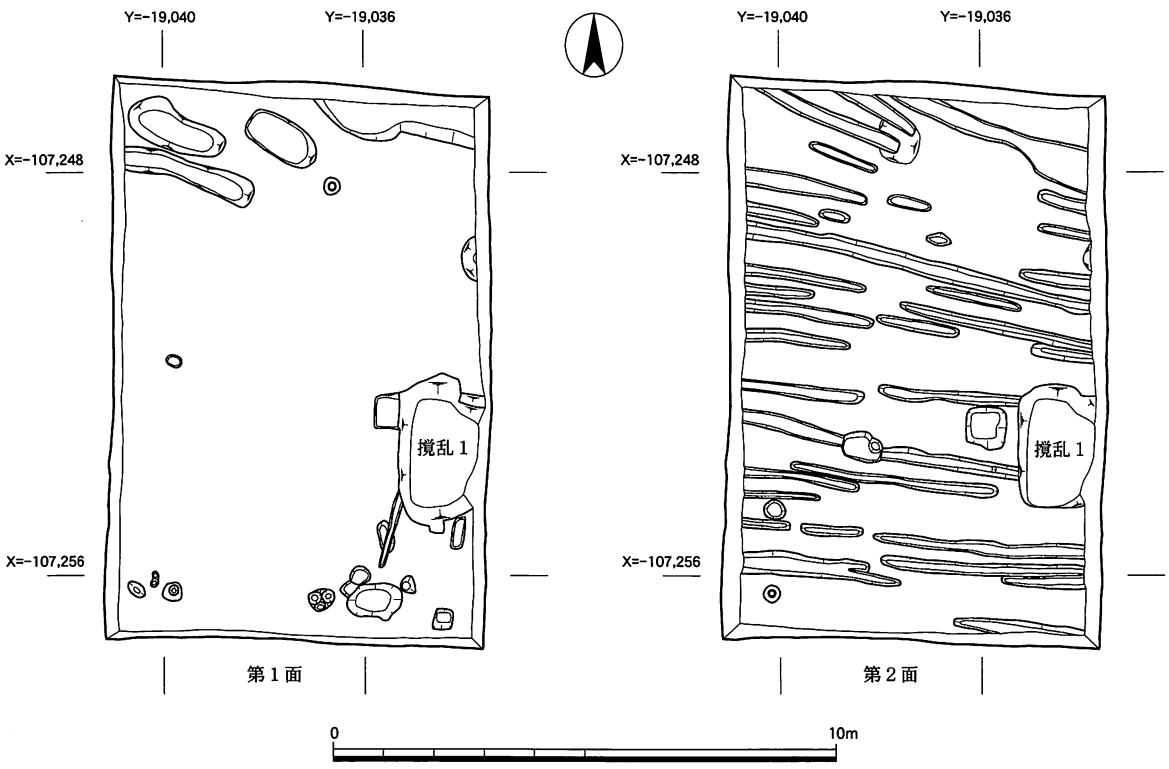


図25　第１・２面平面図（１：200）

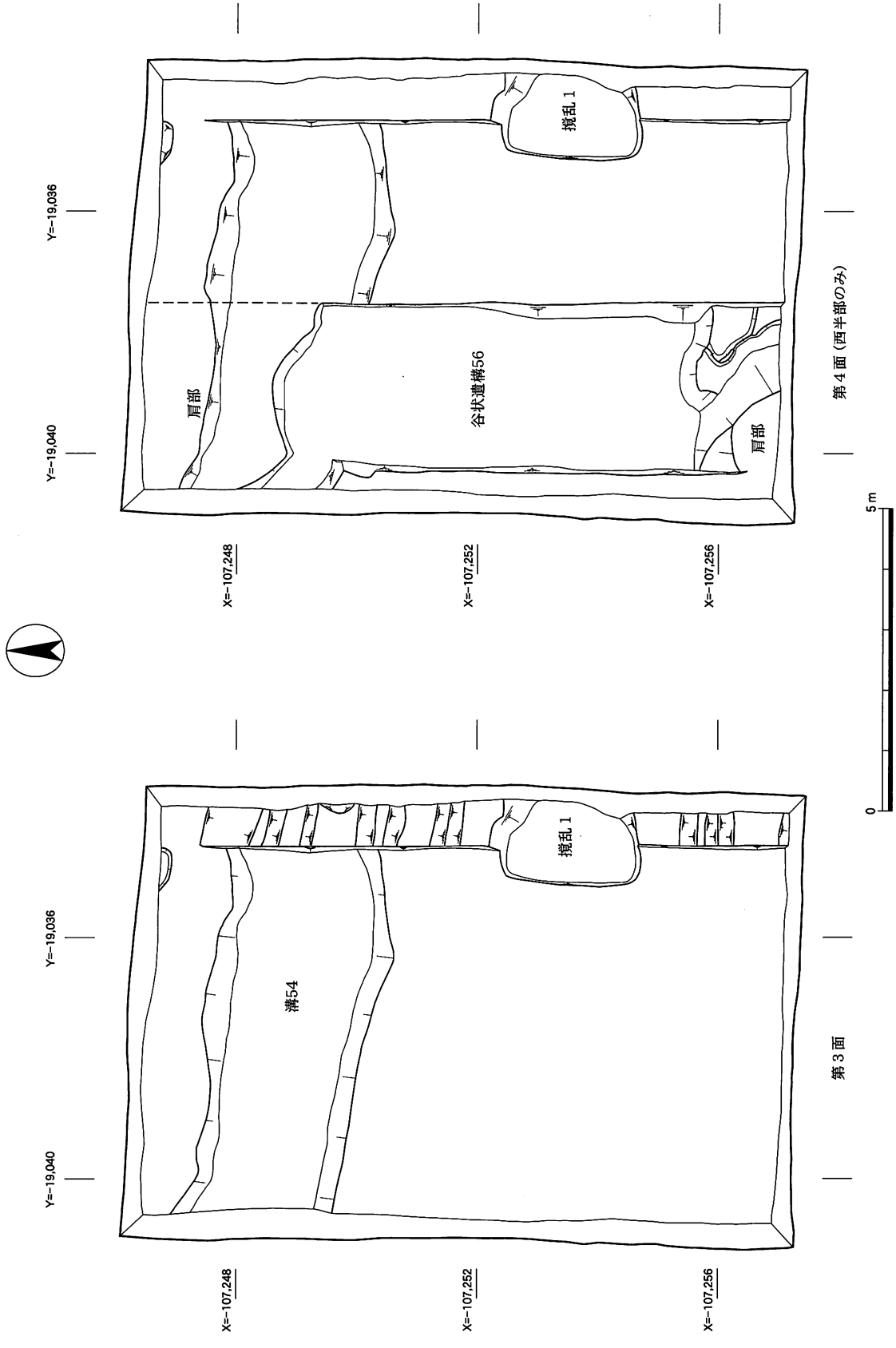
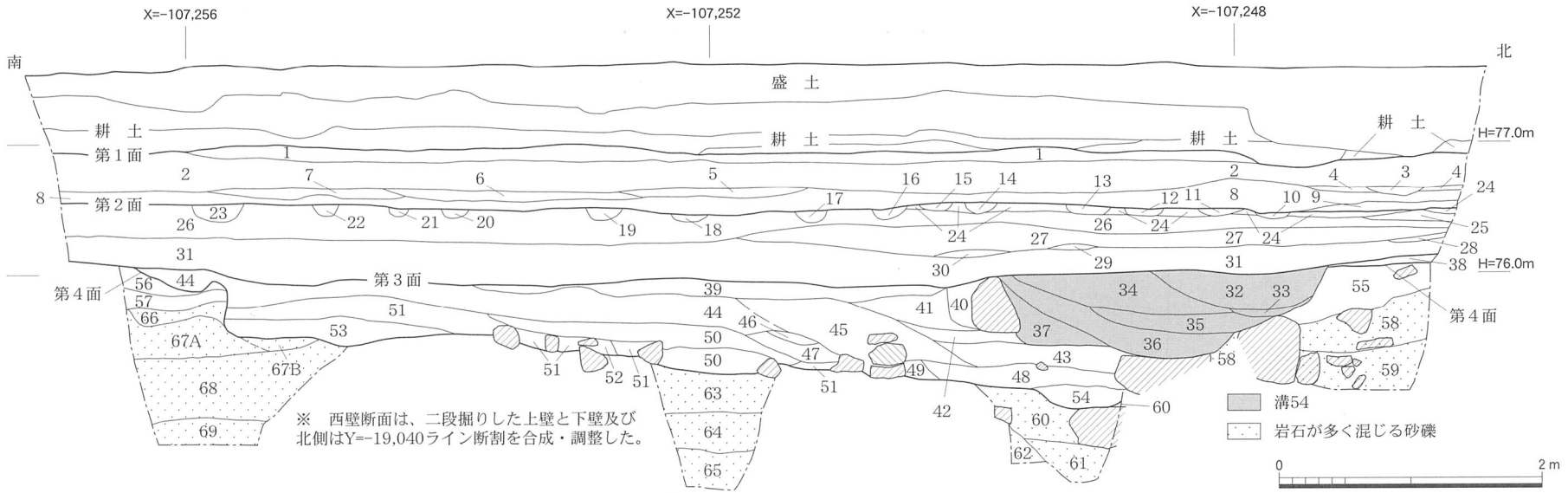


図26　第3・4面平面図（1：100）



1 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混砂礫少量
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 混砂礫少量 やや粘質
3 2.5Y6/3 にぶい黄色砂
4 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 混ブロック粗砂
5 2.5Y5/3 黄褐色泥砂
混斑状5.5Y6/3 にぶい黄褐色施礫砂
6 2.5Y5/4 黄褐色泥砂
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混斑状2.5Y7/3 浅黄色砂
8 2.5Y6/2 灰黄色泥砂 混粗砂中量
9 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 混粗砂中量 粘質
10 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
混ブロック2.5Y7/6 明黄褐色泥砂
11 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
12 2.5Y4/2~4/3 暗灰黄～オリーブ褐色泥砂
13 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
14 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
15 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
16 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
17 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
18 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
19 2.5YR4/3 褐色泥砂
20 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
21 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
22 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
23 10YR5/2 灰黄褐色泥砂
（耕作溝）

24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 やや粘質
25 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 粘質
26 2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂 やや粘質
27 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 やや粘質
28 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混粗砂中量
29 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混ブロック2.5Y7/6 明黄褐色砂
30 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混粗砂中量
31 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
混ブロック2.5Y4/3 オリーブ褐色砂
32 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 混ブロック2.5Y4/4 オリーブ褐色砂
33 2.5Y5/4 黄褐色砂 混2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂
34 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 混斑状2.5Y5/4 黄褐色砂
35 2.5Y6/4 にぶい黄色泥砂
36 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混ブロック2.5Y6/4 にぶい黄色砂
37 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混ブロック2.5Y5/3 黄褐色砂
（溝54）
38 2.5Y5/4 黄褐色泥砂
39 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 混少礫少量
40 2.5Y5/4 黄褐色砂 混ブッロク2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂
41 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 混小礫
42 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
43 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 混斑状2.5Y6/6 明黄褐色砂
44 10YR4/3にぶい黄褐泥砂 混ブロック10YR6/4 にぶい黄橙色砂
45 10YR4/3にぶい黄褐泥砂 混ブロック10YR6/4 にぶい黄橙色砂
46 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 混小礫少量
47 10YR4/4 褐色泥砂
48 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 混小礫中量
（谷状遺構56）

49 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 混小礫少量
50 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
混層状2.5Y4/4 オリーブ褐色砂
51 10YR4/4 褐色泥砂 混層状10YR6/4 黄褐色砂
52 10YR3/3 暗褐色泥砂
53 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂
混ブロック2.5Y5/4 黄褐色泥砂
（谷状遺構56）
54 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 混中礫少量
（谷状遺構）
55 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 混瓦片
56 10YR4/4 褐色泥砂礫 混斑状10YR3/3 暗褐色泥砂
57 10YR3/2 黒褐色泥砂 混斑状10YR4/4 暗褐色砂礫
（肩部56）
58 10YR4/4 褐色砂礫 混大礫多量
59 7.5YR4/4 褐色砂礫 混大礫多量
60 10YR4/4 褐色砂礫 混大礫多量
61 7.5YR2/1 黒褐色砂礫
混斑状7.5YR5/4にぶい褐色砂礫・混中礫多量
62 10YR5/6 黄褐色砂礫 混中礫
63 10YR4/6 褐色砂礫 混中礫多量
64 7.5YR4/6 褐色砂礫 混中礫多量
65 10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫 混中礫多量
66 10YR5/6 黄褐色砂礫 混中礫多量
67A 10YR5/4 黄褐色泥砂・砂質
混ブロック2.5Y2/3 暗オリーブ褐色泥砂
67B 2.5Y5/4 黄褐色泥砂・砂質
68 10YR4/6 褐色砂礫 混中～大礫多量
69 10Y8/2 灰白色粗砂
（土石流の土層）

図27 西壁断面図（1：50）

谷状遺構56　第４面で検出した。南北幅は約10m、深さは0.5～１mである。遺構の底は、東から西に向って深くなる。東西方向に広がるとみられるが、調査を行っていないので、全容は不明である。遺構の南肩には、厚さ約0.15mの褐色泥砂礫（第56層）および黒褐色泥砂（第57層）が堆積している。遺構の北肩は溝54に壊されてたが、調査区北端で0.2～0.4mのオリーブ褐色泥砂（第55層）を確認し、この層が北肩部を形成していたことがわかった。堆積状況などから、これら肩部は盛土されたものと考えられる。肩部を造っている層から小片であるが、平安時代から鎌倉時代後半の遺物が出土している。埋土は、にぶい黄褐色泥砂ににぶい黄橙色砂が混じる土を主体とし、室町時代前半の遺物が出土している。遺構は鎌倉時代後半に成立し、溝54が造られる室町時代前半頃までには埋没したと考えられる。

また、西壁沿いで下層の断割調査を実施した。その結果、大小の礫が多量に混じる砂礫層（第58～69層）を検出し、奈良時代と見られる須恵器が１点出土した。

３．遺　　物（表６）

遺物は、古代から近世にかけてのものが、整理箱に11箱出土した。中世に位置付けられるものが多くを占めており、古代のものは少量小片である。種類の内訳は、土器と瓦がほぼ6：４の割合である。

（１）土器類（図28、表７、図版４）

古代の土器類は、中世と考える第39～54層から多く出土しており、土師器、須恵器が多数を占め、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器は少数ながら見られる。古代の遺物は、磨滅したものが多く、断定できないが、須恵器には、奈良時代と見られるものが含まれている。

中世では、土師器と瓦器が多くを占めており、施釉陶器と焼締陶器が少量見られる。

近世では、土師器類が比較的多く、陶磁器類は少量である。以下では、出土した土器、陶磁器

表６　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
奈良時代～平安時代	土師器、須恵器、黒色土器灰釉陶器、緑釉陶器、輸入白磁、瓦		土師器２点、刻印丸瓦１点、平瓦２点、輸入白磁４点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、褐釉陶器、輸入白磁・青磁・青白磁、焼締陶器		土師器７点、輸入白磁２点		
桃山時代～江戸時代	土師器、施釉陶器、磁器、染付磁器、瓦		土師器２点		
合　計		13箱	19点（１箱）	１箱	11箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より２箱多くなっている。

類のうち、図示したものについて記述する。土器の年代については、「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究[1)]」に準拠した。なお、出土地点は表７に記述した。

１～11は土師器皿である。１・２は、体部は内湾して立ち上がる。口縁端部は、１では端面がやや外傾する。２は端面の断面が方形状を呈する。Ⅴ期中～新に属する。３は底部が欠損するが残存部から、いわゆる「ヘソ皿」になるとみられる。体部は開きが強く、外反する。４は器壁がやや薄く、体部上半から口縁部にかけて、やや外反するが、端部は直線的に収める。口縁端部にはススが付着することから、灯明皿とみられる。５は器壁が薄く、体部はやや内湾するが、大きく開く。体部上端から口縁部にかけてわずかに外反気味であるが、端部は内側へ小さく丸く収まる。３～５は谷地形の埋土（第39～54層）から出土した。Ⅷ期古～中に属する。６はいわゆる「ヘソ皿」であるが、３と比較すると、器高がやや低く、新相を示す。７は体部が立ち上がり部から強く外反し、口縁部近くの器壁が最も厚くなり、口縁は端部にかけて薄くなり小さく丸く収まる。８は底部から体部が大きく開き、器高がやや低く、皿形化している。Ⅸ期新～Ⅹ期古に属す

表７　掲載土器一覧表

番号	器　種	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・施釉	胎土色調	遺構・層	残存	備　考
1	土師器	皿	(9.6)	(1.5)		内面ナデ、外面２段のナデ	にぶい黄橙色	谷状遺構56南肩	2/12	
2	土師器	皿	(14.0)	1.6		内面ナデ、外面２段のナデ	灰白色	谷状遺構56南肩	1/12	
3	土師器	皿	(6.8)	1.9		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白から浅黄橙色	谷状遺構56埋土	2/12	
4	土師器	皿	(8.4)	(1.5)		内面ナデ、外面上半がナデで段をなす	にぶい黄橙色	谷状遺構56埋土	2/12	口縁端部に黒斑が付着
5	土師器	皿	(11.4)	(2.9)		内面ナデ、外面口縁部ナデ、体部オサエ	灰白色	谷状遺構56埋土	1/12	
6	土師器	皿	(7.0)	1.6		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白色	溝54	2/12	
7	土師器	皿	(9.2)	(1.6)		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白から浅黄橙色	溝54	2/12	
8	土師器	皿	(16.0)	(2.2)		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白色	溝54	1/12	
9	土師器	皿	(8.6)	1.6		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白から浅黄橙色	第24～28層	3/12	口縁端部に黒斑が付着
10	土師器	皿	(9.2)	(1.9)		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白色	第１～４層	3/12	
11	土師器	皿	(9.4)	(1.9)		内面ナデ、外面上半がナデ	灰白	第１～４層	2/12	口縁端部に黒斑が付着
12	輸入白磁	椀	(17.0)			内面から外面上半を施釉	灰白	谷状遺構56埋土の下層	1/12	釉色は灰白
13	輸入白磁	椀			(6.8)	内面と外面を施釉、高台は露胎	灰白	谷状遺構56埋土の下層	4/12	釉色は灰白
14	輸入白磁	椀	(17.0)			内面から外面上半を施釉	灰白	溝54	1/12	釉色は灰白から灰
15	輸入白磁	椀か			(6.2)	内面は施釉、高台は露胎	灰白	溝54	3/12	釉色は灰白
16	輸入白磁	皿	(9.4)	(2.7)		内面と外面上半を施釉、口縁端部は無釉	灰白	谷状遺構56埋土の下層	1/12	釉色は灰白
17	輸入白磁	皿	(9.8)	1.8		内面と外面を施釉、口縁端部は無釉	明緑灰	第５～９層	2/12	釉色は灰白

※　（　）は復元数値

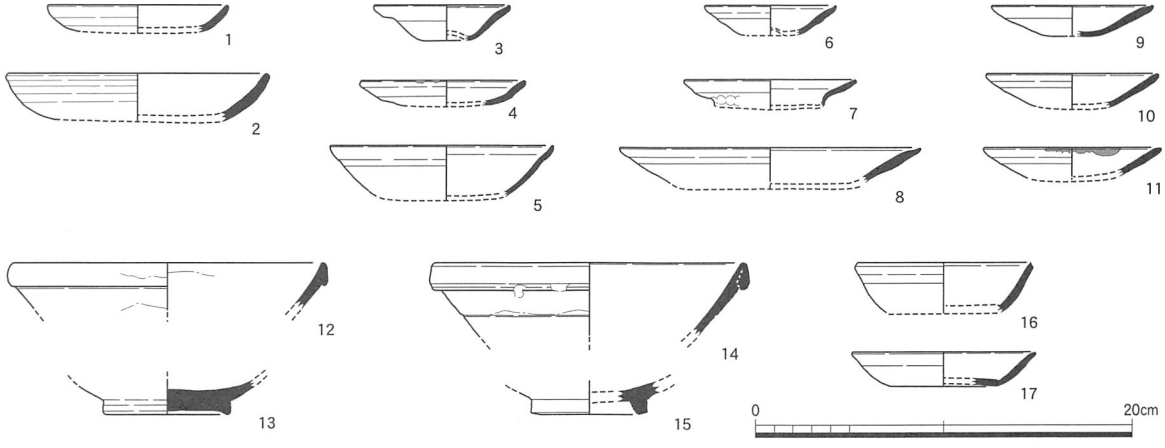


図28　土器実測図（1：4）

る。9は体部が、直線的に開く。口縁端部は上に向け、少し厚くなり収まる。X期中～新に属する。10・11は形状は9に類似するが、器壁がやや厚くなる。X期新～XI期古に属する。12～17は輸入白磁である。12は特に口縁部外面の釉ダレが目立つ。12・14は口縁部外面に段を有する椀、13・15は削り出し高台であり、15がやや高く削り出している。16・17は口縁端部の釉が削り取られた、いわゆる「ロハゲ」の皿である。12～15はV期に類品が多く出土する。16・17はVII期に属する。

（2）瓦類（図29、図版4）

瓦類は、ほとんどが古代のもので、第39～54層から多く出土した。平瓦、丸瓦が大半を占める。これらのなかには、奈良時代と推測できるものが少量みられる。その他に瓦当面を欠く軒丸瓦が1点、近世の瓦が数点ある。

18は平瓦である。凸面が縄タタキ、それをナデ消している。凹面は布目であり、布の継目が残る。19は平瓦である。凸面が格子タタキであり、凹面が布目、側面際に分割突帯が認められる。桶巻き作りである。20は丸瓦である。凹面は布目であり、凸面はナデ消しである。凹面の側面側に陽刻の文字が押印されている。「官」であろう。「官」の異笵であるが、西賀茂鎮守庵瓦窯跡[2)]から出土している。

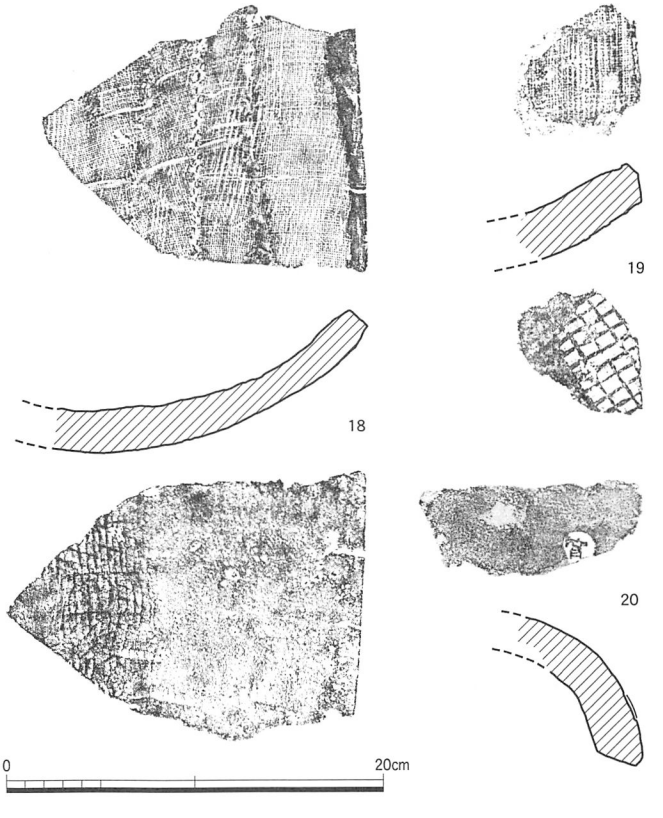
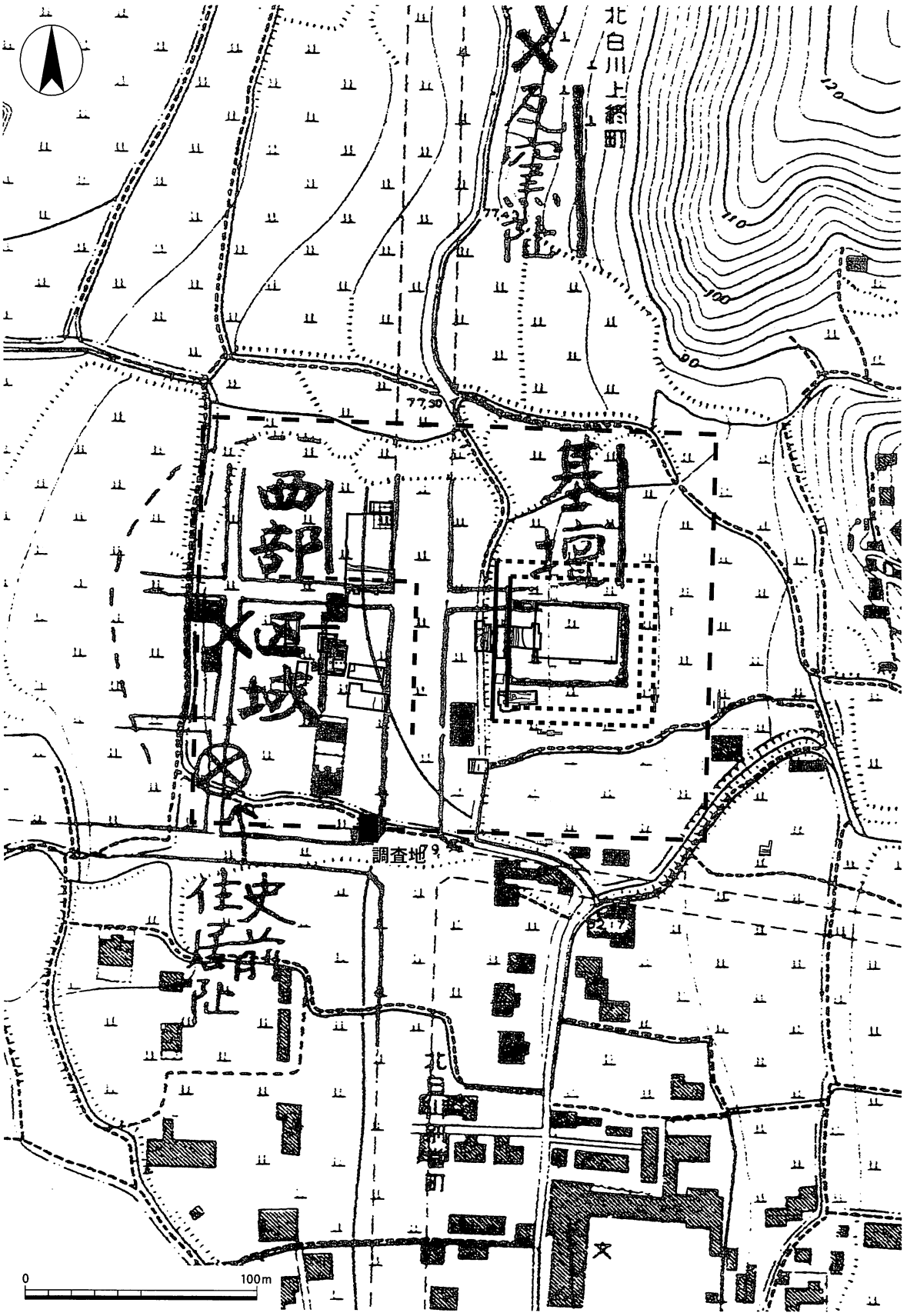


図29　瓦拓影・実測図（1：4）



※この図は網　伸也「北白川廃寺の伽藍復元」『杉山信三先生米寿記念論集　平安京歴史研究』1993年と2005年調査の現地説明会資料を参考に、梅原末治「北白川廃寺」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府1939年に掲載の図版１を調整した。

図30　北白川廃寺伽藍の推定復元図（１：2,500）

4．まとめ

調査地は北白川廃寺の寺域南限推定地であるが、今回の調査では北白川廃寺に関連する遺構を確認することはできなかった。しかし、谷状遺構56の埋土から、平安時代以前の瓦を含む古代の遺物が出土したことは、北白川廃寺関連の遺構が調査地近隣にあったことを示していると考えられる。

第５層下の大小の礫が多量に混じる砂礫層は、遺物を少量包含するが、土石流による自然堆積土層と考えている。撹乱１底の同砂礫層や断割調査において、平安時代以前のものとみられる須恵器が数点出土したことから、土石流の発生は平安時代以前と考えられる。

谷状遺構56は、南北両肩の盛土が鎌倉時代後半頃に形成されたと考えられる。埋没は、室町時代前半と考えられる。

溝54は、室町時代前半の15世紀代に形成され、流水があったと考えられ、16世紀までには、埋没したと考えられる。

その後は、いわゆる「白川砂」が混入する整地土が重なり、調査地は耕作地とし近代に至る。

註

1） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第３号』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

2） 京都市文化観光局文化財保護課「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1971』 鳥羽離宮跡調査研究所　1972年

Ⅳ　史跡・名勝嵐山

1．調査経過

調査地は、京都市右京区嵯峨鳥居本化野町に所在し、平安時代から葬送の地として知られた化野に相当する。調査地北側には、時間の経過とともに埋没や散乱した石仏や五輪塔を集めて、境内地に祀った化野念仏寺（華西山東漸院念仏寺）がある。周辺の調査事例では、平安時代後期から江戸時代にわたる墓が検出されており、その内容は火葬墓や土坑墓など多岐にわたっている。

1993～1994年の立会調査[1]で多くの墓を確認しており、一帯でそのような遺構検出の可能性が高かったため、個人住宅新築に伴い、発掘調査を実施することとなった。多数の墓を検出した前回の調査は、下水道工事に伴う線状の限定的なものであったため、墓域の面的な広がりなどの詳細が明らかにできなかった。しかし、今回の調査は広い面積を平面的に調査することになったため、

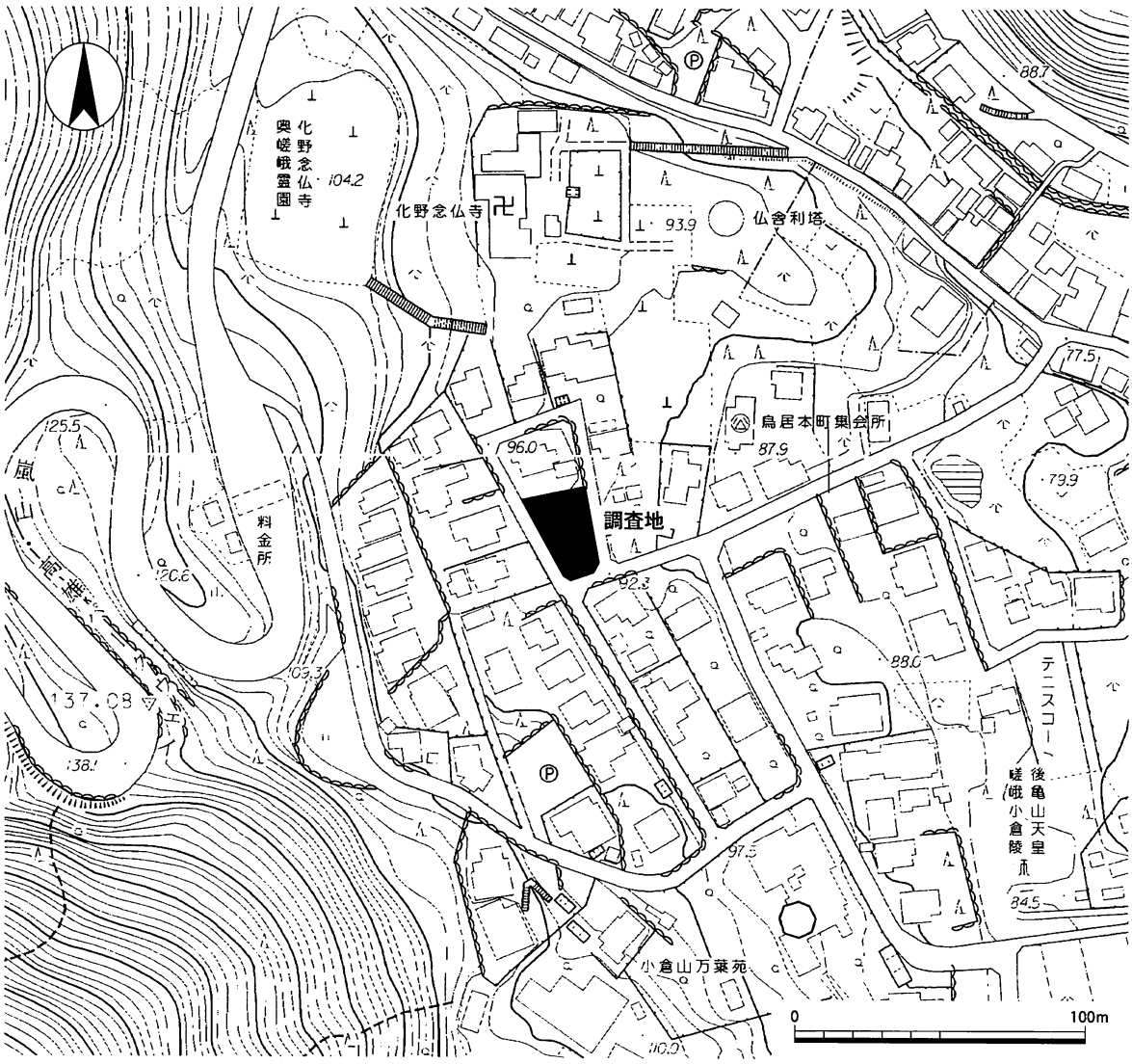


図31　調査位置図（1：2,500）

図32　調査前全景（南から）

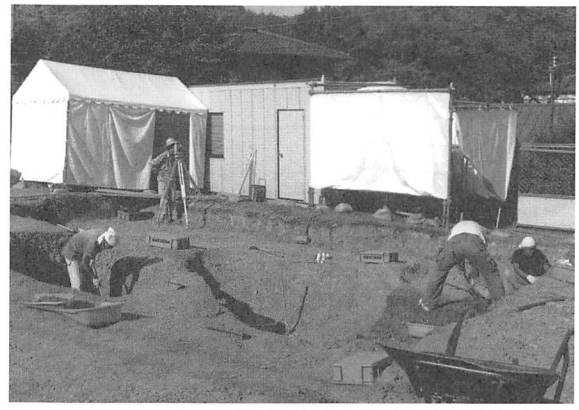


図33　調査風景（南西から）

葬送の地の様相をより明らかにできる成果が想定できた。

調査は、2008年９月８日から付帯工事を行い、翌９日から重機掘削を開始した。当初、現代盛土の下には明褐色粘質土混粗砂礫層が分厚く堆積しており、遺物が包含されていなかったことから、地山相当層として掘り下げを行わなかった。最終的に下層遺構の確認を行うため、礫層直下の明褐色微砂層まで断ち割って、遺構の検出に努めた。しかしながら、全く遺構を検出することができなかった。なお、調査区は東西約9.7m、南北約8.8mを設定し、調査面積は約85.4㎡となった。

２．遺　　構（図35・36、図版５）

基本層序（図36）は、表土下約0.2mまで灰黄褐色砂質土の現表土（第１層）があり、その下に約0.2～0.5m厚の現代盛土または整地層（第５～８層）、約0.9m厚の明褐色粘質土混粗砂礫（第９層）、約0.1m厚の明褐色粘質土混明黄褐色粘質土（第11層）、約0.5m厚の褐色粘質土混粗砂礫（第13層）があり、さらに基盤層の明褐色微砂（第14層）と黄褐色粘土混礫（第15層）が堆積している。第14層は上部の明黄褐色微砂と下部の黄褐色粘質土にわかれる部分もあるが、下部の黄褐色粘質土が部分的であり、非常に薄い層であったことから図中に表記していない。当初、第９層を基盤層と考えていたが、断割を入れた結果、第13層と第14層の間に部分的に薄く堆積していた暗褐色粘質土から土師器皿片が出土した。そのため、第９～13層は、土師器皿片の時期である鎌倉時代初頭以降に堆積した土砂であったことが判明した。この褐色系の粘質土と粗砂礫層が互層になっており、少なくとも２回にわたって大規模に堆積したものとみられる。調査した敷地は北西が最

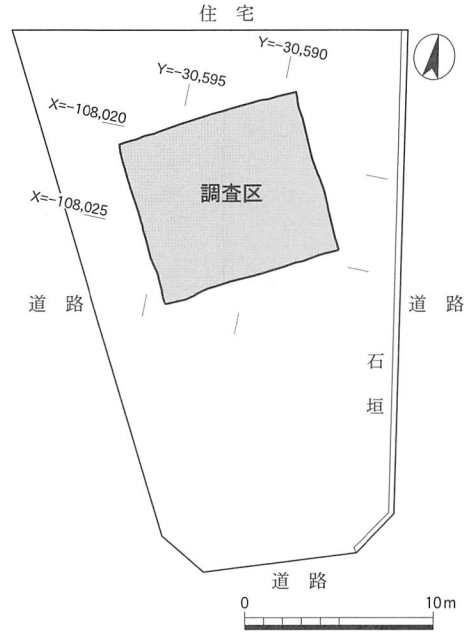
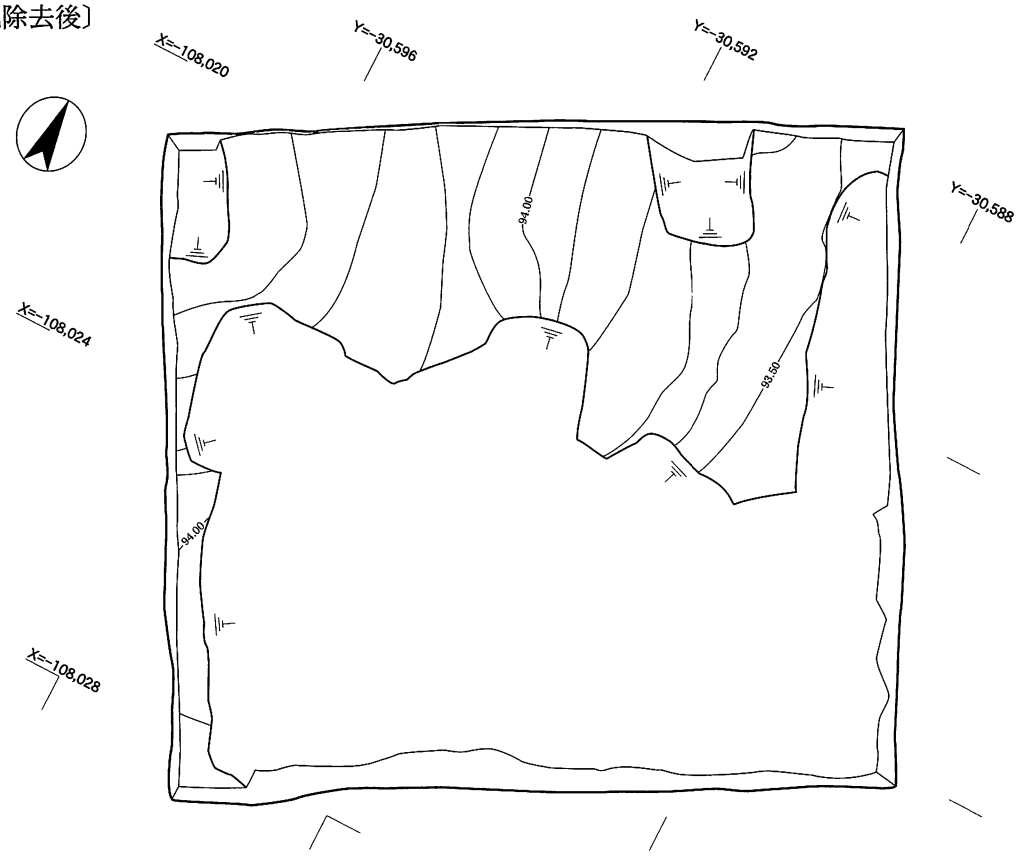


図34　調査区配置図（１：400）

〔撹乱除去後〕



〔北壁・西壁断割後〕

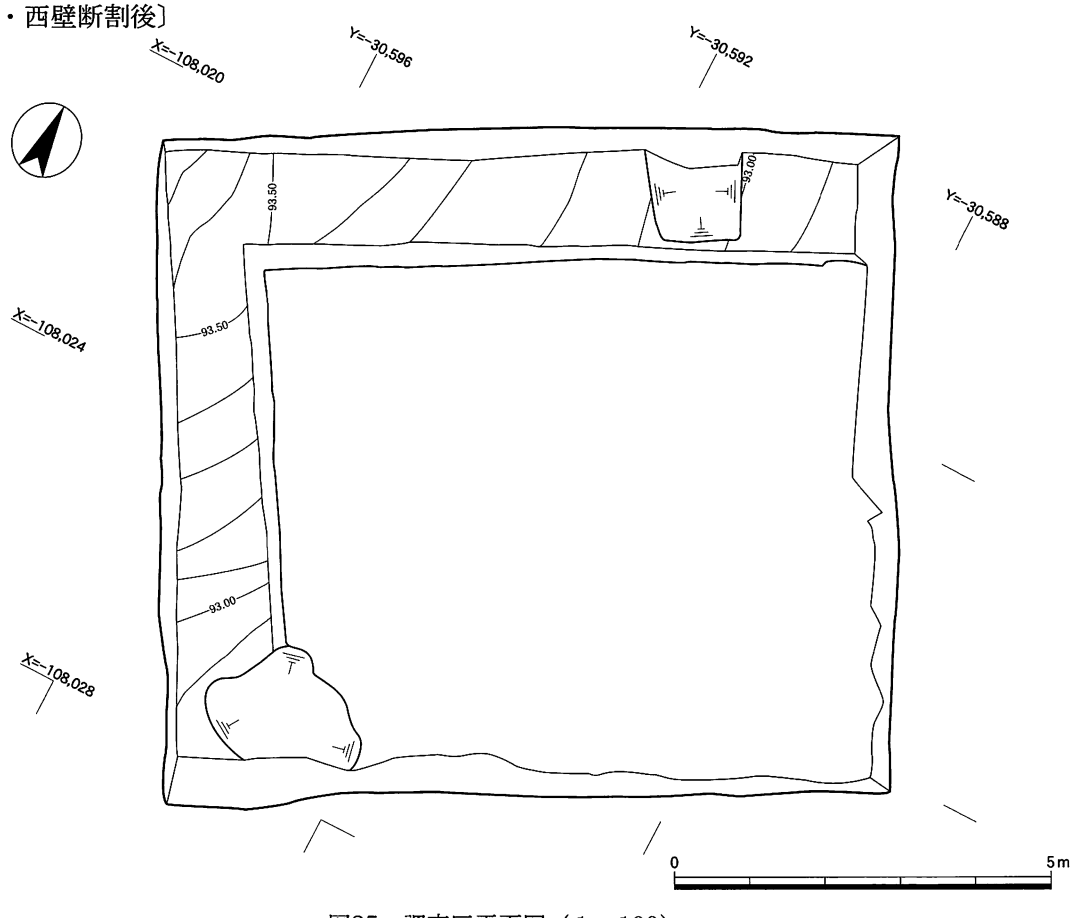


図35　調査区平面図（1：100）

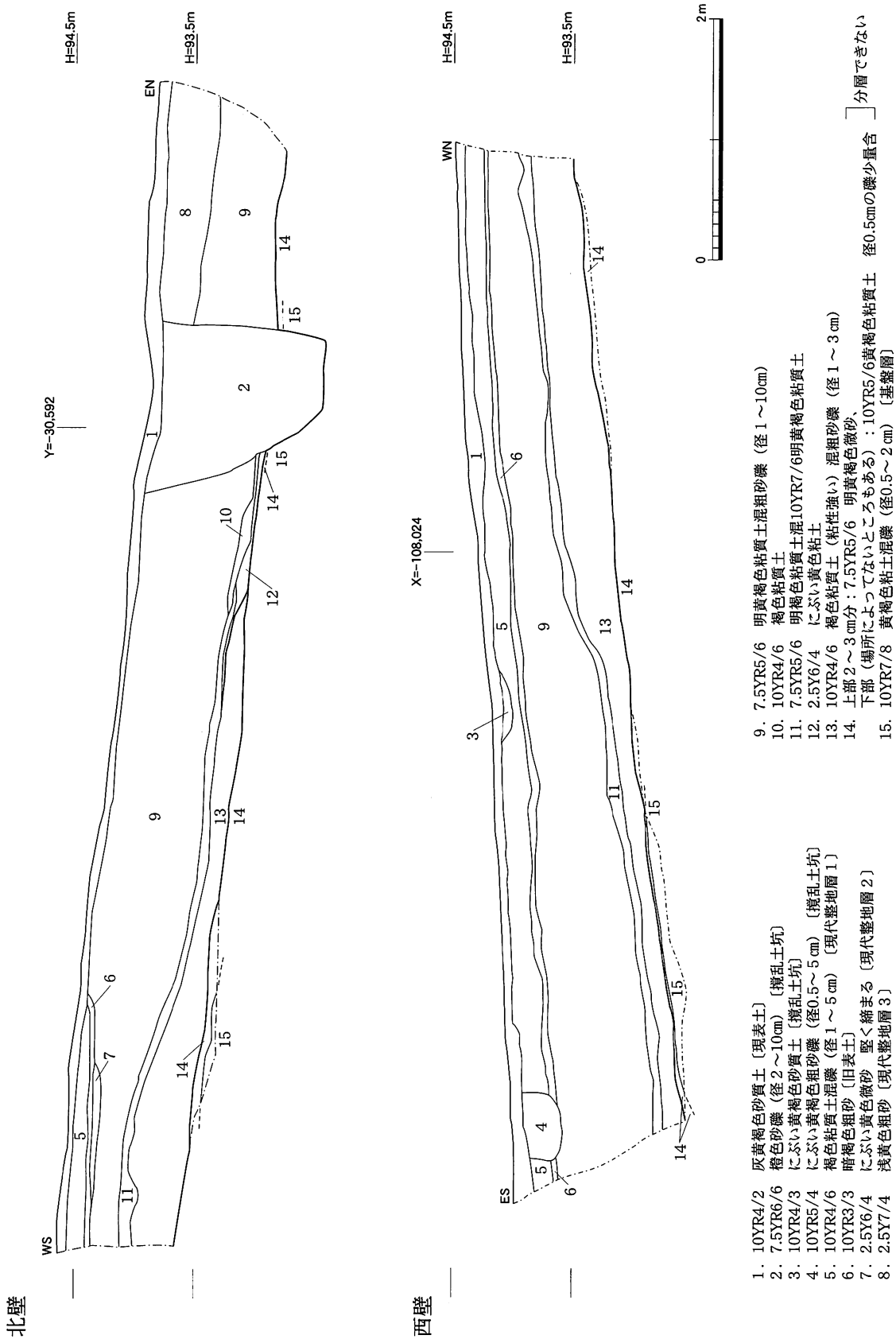


図36　調査区壁面断面図（１：50）

表８　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	報告書掲載遺物	報告書未掲載遺物
鎌倉時代初頭	土師器皿			
鎌倉時代初頭以降	壁土（焼けて橙色化）			
室町時代～安土桃山時代	平瓦			
江戸時代	肥前磁器染付片			
明治時代	銭貨（一銭銅貨）			
合　計		１箱	０点（０箱）	１箱

も高く、南東に向かって低くなる地形であった。

調査区には、伐採した植栽を裁断して埋めた撹乱土坑を数箇所で検出しただけで、近現代よりも古い時期の遺構は全く検出することができなかった。

３．遺　　物（表８）

出土した遺物は、断割や重機掘削、遺構検出中に伴うもので、いずれも遺構に伴うものではない。鎌倉時代初頭の土師器皿や鎌倉時代初頭以降の焼けた壁土は、断ち割った際に礫層（第13層）とその下層（第14層）の間から出土した。その他に、現代層（第１～７層）から、室町時代から安土桃山時代の平瓦と、江戸時代の肥前磁器染付片、明治時代の一銭銅貨が出土している。一銭銅貨は錆びているため製造年は不明である。

４．ま と め

今回の調査では、遺構は全く検出することができなかった。1993～1994年の立会調査では多くの墓を検出し、葬送の地としての化野の一端が垣間見られる成果が上がっていただけに、その理由の検証が必要となった。このことを考えるにあたって、周辺で行われた過去の調査についてまとめておく。

周辺の調査は、1993～1994年に行われた下水道工事に伴う広域立会調査、2003・2004年の京都市文化財保護課による試掘調査の３回が行われている。前述の通り、化野が平安時代から続く墓所であったことや、墓の埋葬形態が明らかになったのは、1993年から約１箇年行われた立会調査によるところが大きい（図37・表９－３）。検出された遺構は、平安時代末の火葬墓、室町時代中期の甕棺墓、室町時代後期の火葬墓、江戸時代前期の土坑墓、その他時期不明の墓などである。平安時代末の火葬墓は、厚さ約15㎝、40～50㎝の石の長軸を立てて石室を造った中に、金銅製の蓋をした蔵骨器を埋納したものであった。金銅製の蓋は、梵字と蓮華座を線刻した後、鍍金をし

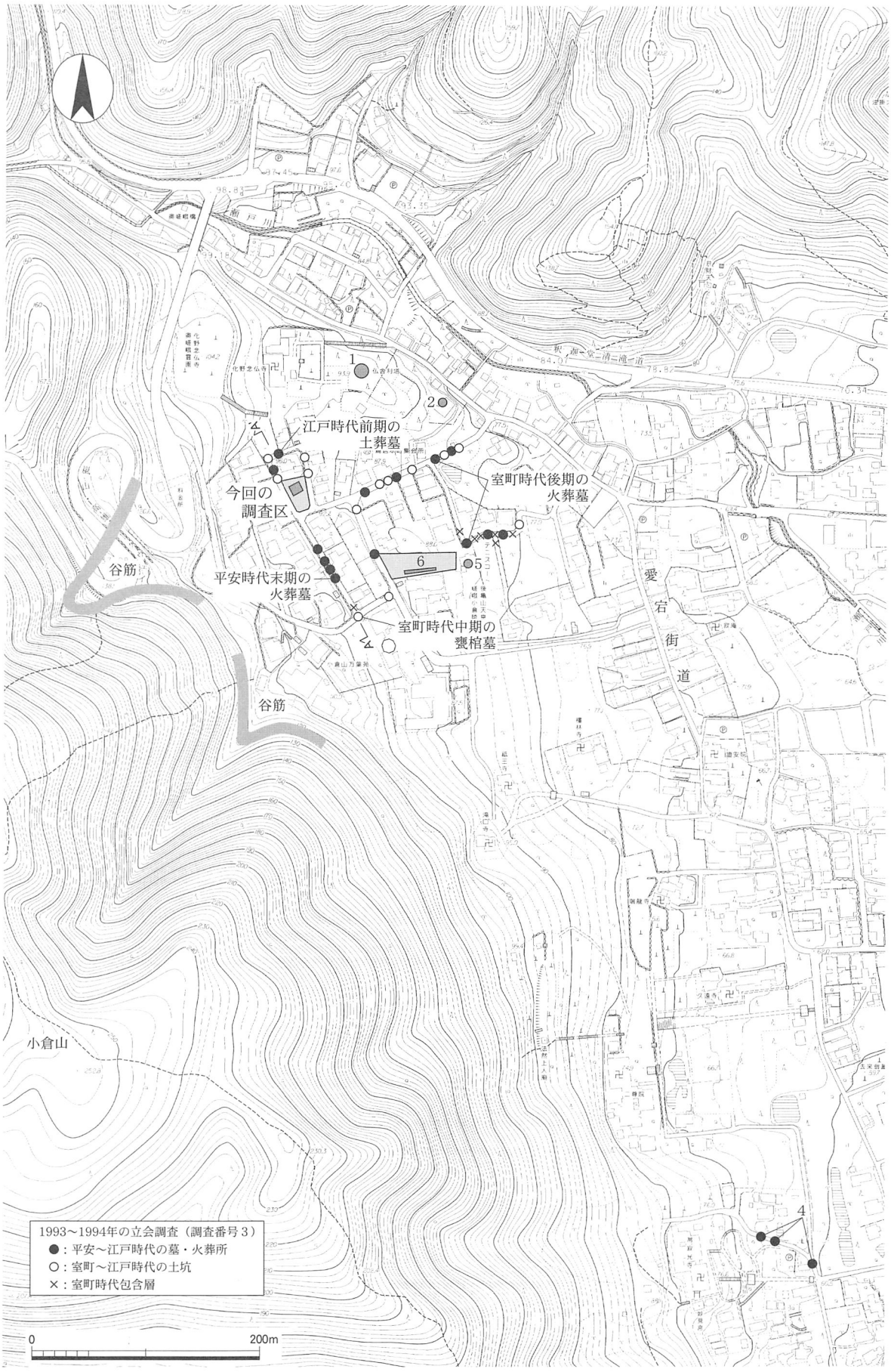


図37　既往の調査位置図（１：5,000）

表９　周辺調査一覧表

番号	調査（発見）年月	調査機関（発見者）	方法	調査面積	遺構到達深	遺構	遺　物	備　考
1	1968年11月	化野念仏寺	採集	—	約２m	—	五輪塔、人骨、蔵骨器（四耳壷）	仏舎利塔建立工事、鎌倉時代前半以降
2	1971年	個人	採集	—	—	—	信楽焼壷	開発工事中
3	1993年１月～1994年３月	京都市埋蔵文化財研究所	立会	3,100m	0.1～1.6m	墓、土坑	土師器、輸入陶器、陶磁器、焼締陶器、漆器、布片、瓦、五輪塔、板碑、刀子、銭貨、金銅製蓋、人骨、火葬骨	平末：小石室を伴う火葬墓、室中：甕棺墓（土葬）、室後：火葬墓、不明：火葬墓、江戸：火葬墓・土葬墓・土坑、火葬所らしき遺構あり
4	1995年６月～1996年１月	京都市埋蔵文化財研究所	立会	600m	—	墓	緑釉陶器片、平瓦、焼締陶器擂鉢、焼塩壷	常寂光寺東側隣接地、平安：小石室を伴う火葬墓、江戸：土葬墓
5	2003年９月	京都市文化市民局	試掘	18㎡	—	—	—	緩やかな傾斜地を削って宅地造成
6	2004年６月	京都市文化市民局	試掘	27㎡	約1.6m	石積状遺構	石仏、五輪塔（空風・火・水輪）	斜面地、中世か？

たものである。蔵骨器は褐釉陶器四耳壷で中に火葬された骨と炭が納められていた。また、室町時代の甕棺墓は、備前焼大甕が転用され、甕の口を塞ぐように加工した石が載せられていた。中から、人骨と輸入銭貨、刀子、乾漆製品が出土している。江戸時代前期の墓からは、土葬された人骨と肥前磁器椀、銭貨が副葬品として出土している。時期不明の火葬墓や火葬所とみられる遺構、包含層中からは室町時代の石造物が多数出土している。平安時代末頃までは火葬墓、室町時代までには火葬墓と土葬墓、それ以降もその２形態埋葬が続いたと考えられている。2003年の調査[2]（図37・表９－５）では、遺構・遺物ともに発見されず、西から東へ緩やかに傾斜する土地が削られたためと考えられている。しかし、翌2004年に2003年調査地の東隣地を調査[3]（図37・表９－６）した際には、石仏や五輪塔の部材が東西方向に並べられたような状態で検出され、斜面地にも遺構が存在することが明らかにされた。

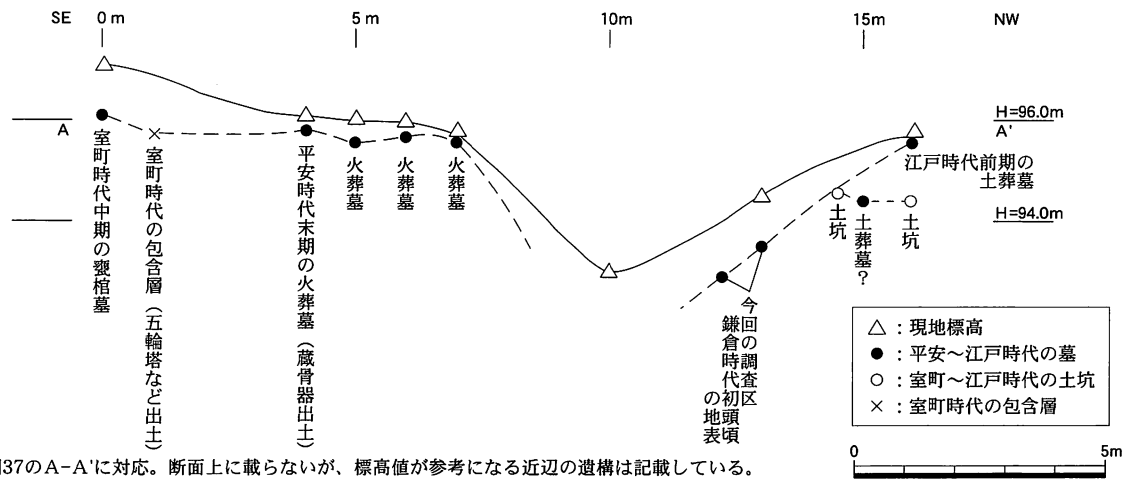
その他に、採集資料ではあるが、出土地点が判明しているものとして、化野念仏寺所蔵の四耳壷と五輪塔[4]（図37・表９－１）、個人蔵の信楽壷[5]（図37・表９－２）があり、何れも火葬墓に伴うものと考えられている。また、化野の墓域範囲を示すものとして、常寂光寺門前付近の下水道工事に伴う立会調査[6]（図37・表９－４）で検出した石室や土坑がある。石室からは平安時代前期の緑釉陶器や土師器、土坑からは江戸時代の擂鉢、焼塩壷などが出土している。人骨が出土していないことから確実に墓とは言えないが、調査者は土坑内に自然石を積み上げたり、据えている形態や構造、規模などが前回の立会調査検出遺構に類似するとして、墓の可能性が高いとし、江戸時代のものについても雑器を副葬品とすることなどから同様に墓としている。これらが墓であるならば、化野一帯が平安時代前期には確実に墓所となったということが言え、墓域が常寂光寺付近まで広がるという。

「化野」の範囲については、前調査者の小檜山氏によって考察がされている。北限は念仏寺北側の谷、南限は常寂光寺の南側の谷、東限は地形から推測して標高58mに立地する嵯峨天皇の皇女であった有智子内親王墓を含む愛宕道辺りとし、西限は化野念仏寺西側の標高120m、二尊院西側の標高100mまでの標高で等高線の変換がみられることから、これより上方の急斜面は造墓には適

していないと考えられている。[7)]

まず、初めに調査地で遺構を検出できなかったことを考える一助として、調査地周辺の地形をあげることができる。調査地は全体的に北西から南東に向かって傾斜しており、調査地南に面する道路に向かって低くなっている。この道路は、調査地とその南の宅地との間に谷筋のように通っており、北東にある愛宕街道まで急傾斜で下がっている。周辺住民の話によると、調査地南西で家を建てる際に、水が湧いて止まらなかったといい、この道路が谷筋または埋没河川になっていたことがわかる。また、調査地西側にある山の東斜面が大きく抉れていることから、この山が崩れたことがあるとみられた。この土砂が調査区全体を厚く覆っていた礫層の正体と考えられ、山が崩れる以前に遺構が造られていたとしても、山崩れの際に土砂に押し流された可能性も考えられる。

次に、今回検出した土師器皿片が出土した標高と、既往の調査で検出された遺構の標高差がある。立会調査で墓を検出した調査地北側の道路や宅地は、現在でも傾斜の頂点にあたっている。同様に、平安時代末期の蓋付き蔵骨壷が出土した地点も調査地南にある傾斜の頂点上に位置し、何れも傾斜が始まる部分の高い位置で検出されている。これらをわかりやすくするために、現在の地表面と、調査で検出した遺構および遺構面の標高を図示した（図38）。図示した地点は、調査地付近の地形が明瞭にわかる調査地南西側の道路である。この道路は南東から北西方向に通っており、小倉山北東斜面にほぼ平行し、立会調査で墓を多く検出している。図の中での現状は、南東が最も高く、平安末期の火葬墓が検出された付近が平坦で、調査地南側にある道路が最も低く、江戸時代前期の土葬墓付近が前述の墓とほぼ同じ標高になっている。ほとんどの遺構の検出標高は、現地表面の約0.5m下までに位置しているが、現地表面同様の地形でありながら江戸の墓から調査地にかけての勾配はきつく、道路下に至っては更に深くなるとみられる。この図から、今回の調査地は、谷筋に向かう斜面の一部であったことがわかり、急傾斜であったために墓が造られなかった可能性が高いといえる。立会調査でも、調査地の東から南にかけての傾斜が強くなり、谷筋になる部分では遺構が発見されていない。大正11年に作成された都市計画図の等高線図を使



※図37のA-A'に対応。断面上に載らないが、標高値が参考になる近辺の遺構は記載している。

図38　現地表と遺構検出標高（1：150）

用して作られた墓域推定図（註５の図92）をみると、等高線の張り出し部分に墓が造られ、窪んでいる部分つまり谷筋では墓が検出されていないことがわかる。長らく平坦地であった部分では、平安時代から室町時代を通して墓が造営されている。2004年の調査については、傾斜地ではあるが谷筋ではない。寧ろ、谷筋へ至る縁辺部とみられ、それとの境界として使用しなくなった石造物を転用して縁石状に並べたものとも考えられる。すぐ横の2003年調査地で遺構が検出されなかったのは、この境目から谷筋に向かって傾斜する途中であったためではないかと考えている。また、立会調査で検出された室町時代の石造品が集中して出土している標高80.5～81.5m付近は、山裾から平坦地が張り出していたことを確認しており、こういった造りやすく壊れにくい場所に造墓が集中したものと考えられる。平安時代末期の蔵骨器や室町時代中期の甕棺の副葬品などを検討するかぎり、財力がなければ手に入らないものを埋葬に使用している墓の立地は、安定した場所を選定しているといえ、この様な造墓に適した場所は、早い段階から上流階級によって占有されていたとみられる。一方、化野では風葬が常時行われ、規則的に墓が営まれていなかったと考えられていたことから、地形の制約も受けていないとみられていた。風葬は規則的に営まれた墓とは別の場所つまり標高が低い所で行われていたか、墓の空閑地や谷筋などで地形に関係なく行われていたのではないかと考えられる。江戸時代頃には、貞享３年（1686）に刊行された『雍州府志』の古跡門下九[8]に「嵯峨土人ノ墓所也」と書かれているように、各種の葬制が執り行われてきたことを背景として、里人の墓地となったとみられる。

その他に、調査区北西に造られた土葬墓とみられる遺構や土坑は時期不明の遺構であるが、江戸時代に造られた土葬墓よりも明らかに低い位置にある。前者が後者より古いものと考えるならば、江戸時代に至るまでに大量の土砂によって墓が埋まったと考えられる。今回の調査で、山崩れが原因とみられる礫層の堆積は少なくとも２回分を確認しており、何れかの堆積層が対応するとみられる。断ち割った際に、鎌倉時代初頭の土師器皿が出土しているが、出土した層が客土とは考えられないことから、周辺で検出されている墓などに伴うものであった可能性が高い。今回の土師器皿の出土層は一時期表土であったとみられ、雨などによって上方から流れてきたと考えられる。斜面地であり、尚かつ山が迫っている地形から、山崩れや小規模な崩落による遺物や遺構の流出は頻繁に起こっていたとみられる。

最後に、遺構の立地する地形から、遺構検出の有無を考え、墓は急峻な場所には造られなかったか、造られていたとしても土砂によって流出や深く埋没したと想定することができた。今回の調査地が、化野の中でも標高が高い位置にある傾斜地であったことから、土砂によって押し流されたと考えられる石造物や副葬品などの遺物も出土していないが、傾斜地においても遺構や遺物が埋もれている場合も考えられる。また、山崩れによる地形変化は避けることができない上に、埋れば旧地形は不鮮明となり、立地の考察が困難になる。このような必然的条件下での地形復元は、化野の墓域範囲や葬送観念などを考える上で非常に重要な作業である。今後、更に調査が行われ、成果が上がることを期待したい。

註

1） 小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

2） 「調査No.45」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』　京都市文化市民局　2004年

3） 堀　大輔「史跡名勝嵐山　No.95」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成16年度』　京都市文化市民局　2005年

4） 乗安和二三「化野念仏寺境内出土の蔵骨壷」『古代文化』９-28　財團法人古代學協會　1976年

5） 『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

6） 小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年

7） 小檜山一良「化野出土の金銅製蓋付き陶製蔵骨器をめぐって」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年

8） 新修京都叢書刊行会『新修京都叢書』第７巻　臨川書店　1967年

Ⅴ　大原域遺跡確認調査

1．調査経過

今回の調査は、京都市左京区大原地区における圃場整備事業に伴う確認調査である。この圃場整備に先立つ2005年の分布調査[1]で、平安時代の遺物が採集され、より詳しく遺跡の状況を把握する必要があると考えられた。そこで、圃場整備の前に、京都市文化財保護課の指導により、国庫補助事業として確認調査を行うこととなった。今回の確認調査では、2005年調査時に、ややまとまって遺物が採集された北部地区の草生町内と南部地区の野村町内の２箇所を調査対象地区とした。2008年２月に北部地区に４箇所の調査区を設定、約98㎡を調査した。また、2008年７月には南部地区に３箇所の調査区を設定し、約84㎡を調査した。それぞれを、草生町地区、野村町地区として成果を報告する。

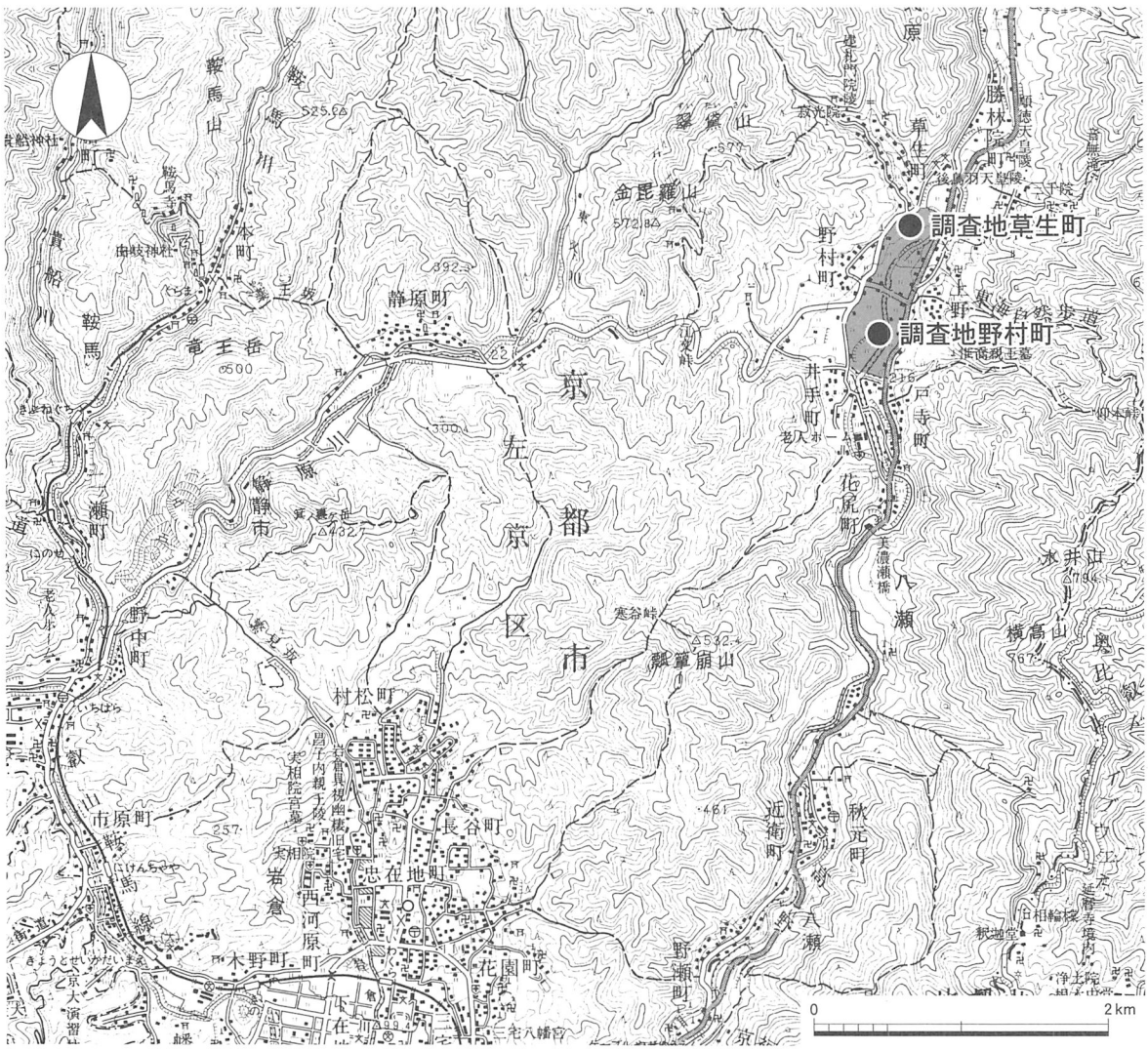


図39　調査位置図（１：50,000）

2．位置と環境（図40）

調査地は、京都盆地の北東の京都市左京区大原に位置する。大原は、北側と西側を北山山系の山々、東側を比叡山と比良山系の山々に挟まれ、北から南に流れる高野川沿いに開けた南北に細長い山間盆地である。南東方向の比叡山には、平安時代に最澄によって建立された天台宗延暦寺があり、その影響下、高野川左岸には三千院として知られる円融院、勝林院、来迎院など延暦寺の別院が建立された。右岸の、高野川支流の草生（くさお）川上流には、聖徳太子創建との寺伝があり、建礼門院徳子の隠棲の地として知られる寂光院がある。

寂光院の南西、野村町の西方には翠黛山（すいたいさん）と金比羅山がある。「京都市の地名[2)]」によれば、金比羅山は古くは江文山といい、山そのものが神体と考えられた。後世、山麓にその里社として江文神社が創建され、現在に至っている。また、江文神社とは別に創建時期は明らかでないが、12世紀初頭までには金比羅山の山腹に江文寺があり、寺には四天王像が安置され不断供養法を修めたとある。この高野川沿いの大原路は、近江・若狭から京都へ至る主要な道路であった。古くから京都へ物資を運ぶ街道として機能し、江戸時代には、若狭小浜からの魚が多く運ばれ「魚街道」と称されていた。また、大原の里は、薪・柴・炭だけでなく、京都近郊農村として各種産物を供給していた。京都の街中に産物を売り歩く大原女はよく知られている。

このような地理・歴史環境にあるなかで、周知の遺跡が少なく、考古学的調査はわずかであった。2000年度の寂光院本堂再建工事に伴う発掘調査[3)]では、平安時代末期以前、平安時代末期から鎌倉時代、桃山時代から江戸時代初期と、３時期にわたる遺構を確認している。2005年には、圃場整備に先立ち、京都市文化市民局埋蔵文化財調査センター（現文化財保護課）の指導により、遺跡確認のための分布調査が行われた[4)]。そして、平安時代中期から江戸時代にわたる遺物を採集することができた。考古学的知見の乏しかった大原南部にも少なくとも平安時代中期から江戸時代の遺跡の存在が推定できることとなった。

3．大原草生町地区

（1）調査経過

調査地は、高野川右岸で、寂光院のある草生町に位置する（図40）。寂光院から南東に約700mの地点である。町の中を草生川が流れ、町の南で高野川に合流している。

調査区を設定した箇所の現状は、一筆の田となっており、耕作土層を除去した状態であった。2008年２月に文化財保護課の指導の下、幅２mで南北32mの１区と、幅２mで東西方向13mの２区をＴ字形に設定し、下段の田圃に、縦1.5m、横１mの３区と同規模の４区の確認調査区を設定した。まず、２月14日に重機により盛土や旧耕土部分を除去し、遺構検出作業を行った。そして、全景写真撮影・実測作業・断割調査を行い、地山確認・平板測量・断面実測作業などを行った。

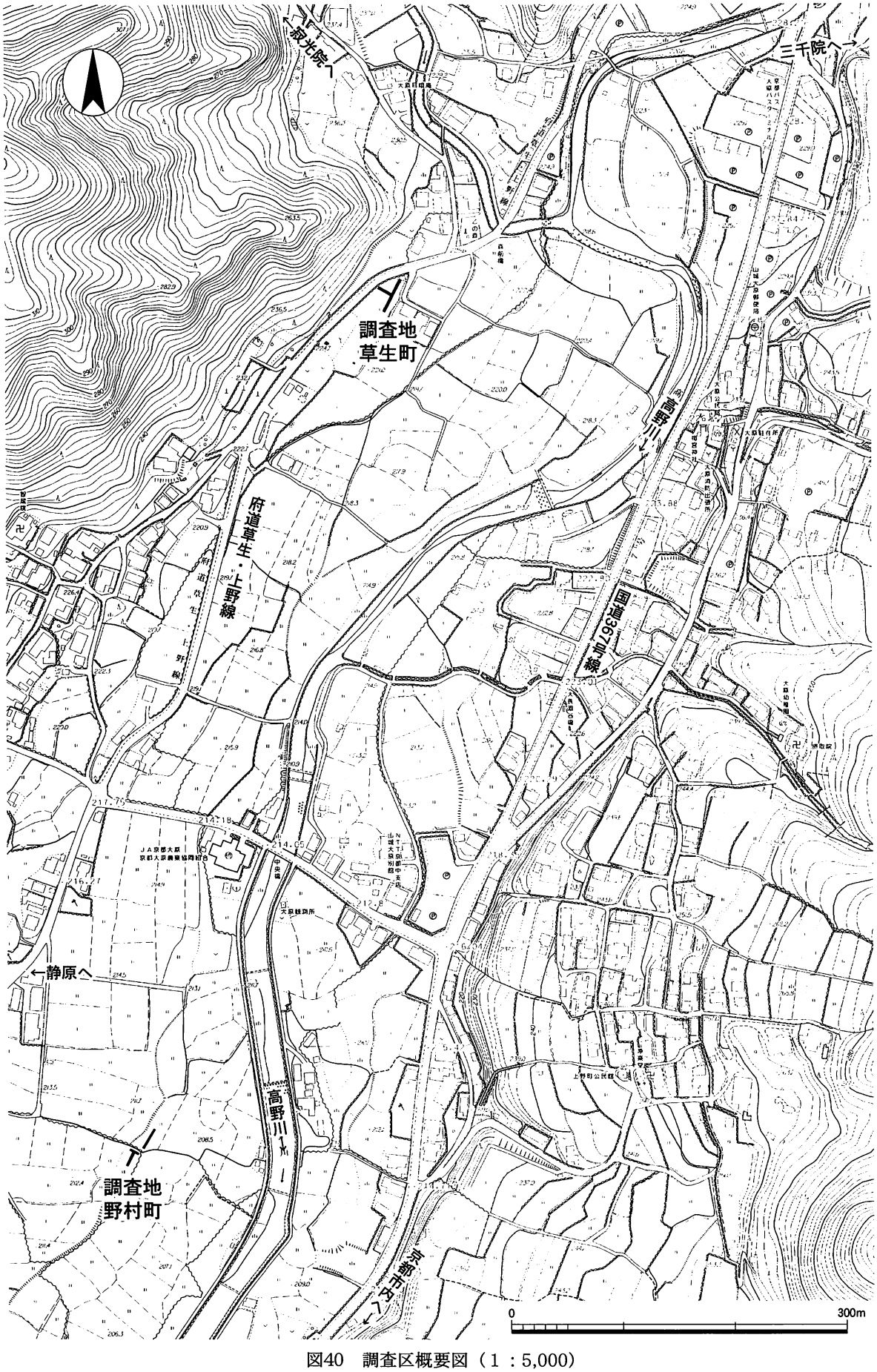


図40　調査区概要図（1：5,000）

図41　調査前全景（北東から）

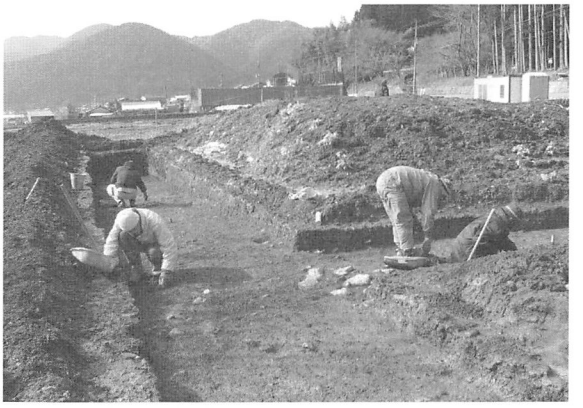


図42　調査風景（北東から）

２月26日に調査資材などを撤去し調査を終了した。この間に文化財保護課の指導を４回受けた。

調査の結果、田圃を造成した盛土層から平安時代から江戸時代の遺物が出土した。

（２）遺　　構（図44～47、図版６）

基本層序（図44・46・47）

１・２区の現況標高は、約222.8mでほぼ水平である。１区の基本層序（図44）は、北半では地表下0.1mの旧耕作土下はにぶい黄褐色砂泥（第18層）の地山となる。南半では、地表下0.1～0.7mで南側に低くなる棚田を構成する上層となり、地表下１m以下は灰黄褐色砂泥（第16層）の地山となる。２区の基本層序（図44）は、地表下0.1mで旧耕作土の褐灰色砂泥（第２層）を検出した。下層は床土（第３層）で、この直下は暗褐色砂泥（第10層）や褐色砂泥（第13層）などの地山となる。

南側の３区（図46）は、地表が標高222.15mと低くなり、地表下0.1mの旧耕作土の下層にφ１～15㎝の礫が混じる黒褐色砂泥（第３層）を検出し、地表下0.2m以下ではφ１～20㎝礫混じりの褐色泥砂や暗褐色粗砂（第６・７層）の地山となる。４区（図47）は、地表の標高は221.1mとさらに低くなり、地表下0.2mまでは第１・２層の旧耕作土で、地表下0.4m以下はφ１～15㎝礫が混じる褐色砂泥の地山（第５・６層）となる。

１区（図44・45）

明確な遺構は検出できなかったが、断面などから旧耕作土４層分と２つの畦を検出した。これらの時期は出土遺物が少なく不明確であるが、江戸時代頃には成立していたものと考えられる。少量の出土遺物から、古くは平安時代～鎌倉時代頃までさかのぼる可能性もある。各耕作土上面の標高は、北から第１層の標高約222.8m、第３層の標高約222.6m、第６層の標高約222.5m、

表10　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代以降	畦１・畦２（１区）、耕作土整地層（３区）	

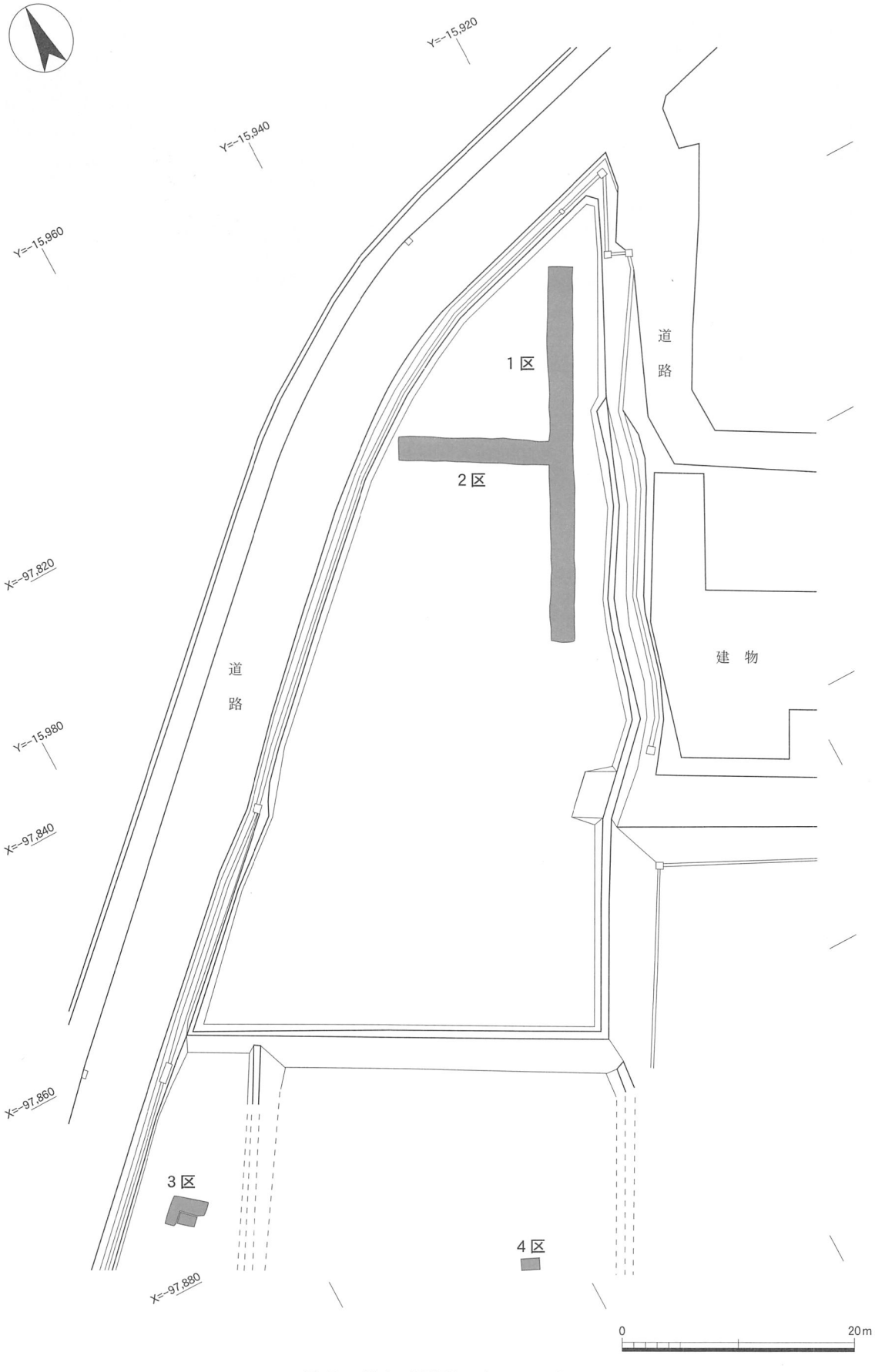
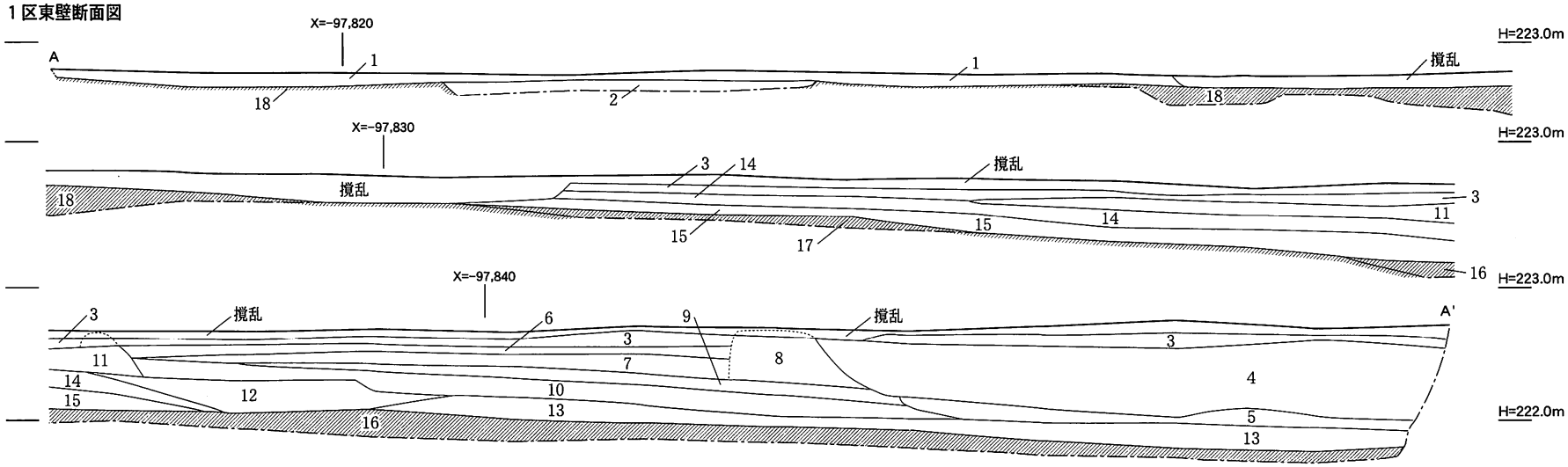


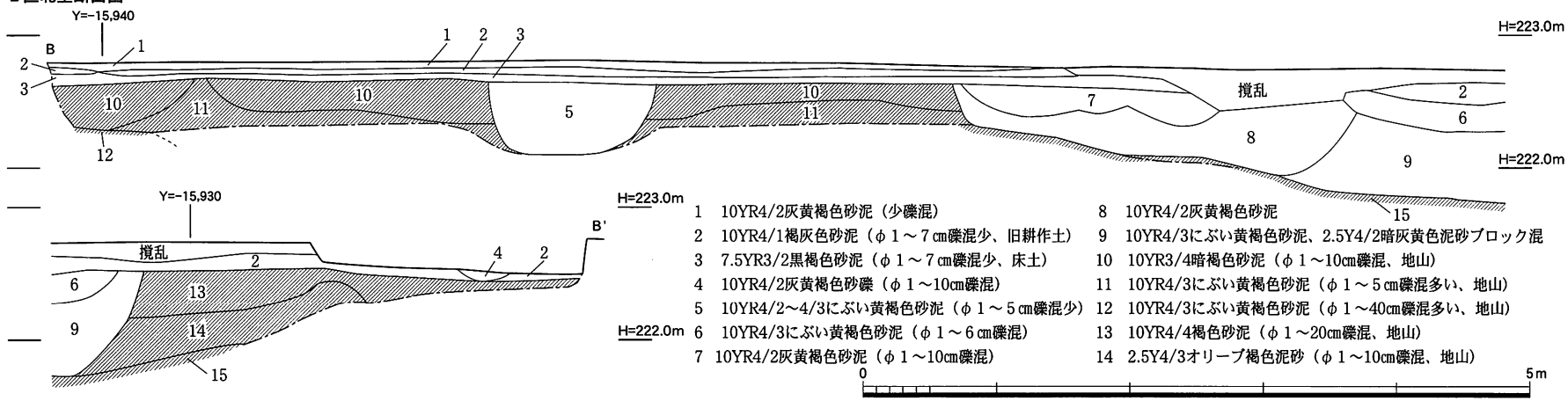
図43　調査区配置図（1：500）

1区東壁断面図



1 2.5Y3/2黒褐色砂泥（旧耕作土）
2 10YR4/2～5/2灰黄褐色泥砂
3 2.5Y4/1黄灰色砂泥（φ1～5㎝礫混少、旧耕作土）
4 7.5YR3/4暗褐色砂泥（炭・φ1～10㎝礫混）
5 2.5Y4/1黄灰色粘質砂泥（旧耕作土）
6 2.5Y4/1黄灰色砂泥（旧耕作土）
7 2.5Y4/1黄灰色砂泥（φ1～10㎝礫混少）
8 2.5Y4/1黄灰色砂泥（畦2）
9 10YR4/1褐灰色砂泥（φ1～5㎝礫混）
10 10YR4/2～5/2灰黄褐色砂泥（φ1～6㎝礫混）
11 10YR4/1褐灰色砂泥（φ1～4㎝礫混少、畦1の基礎部分）
12 2.5Y4/1黄灰色砂泥（やや粘質）
13 10YR4/3にぶい黄褐色（粘質、φ1～7㎝礫混少）
14 10YR4/4褐色砂泥（φ1～4㎝礫混少）
15 2.5Y4/2暗灰色砂泥（やや粘質）
16 10YR4/2灰黄褐色砂泥（粘質、φ1～5㎝礫混少、地山）
17 10YR4/4褐色砂泥（φ1～20㎝礫混、地山）
18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（粗砂混、φ1～30㎝礫混、地山）

2区北壁断面図



1 10YR4/2灰黄褐色砂泥（少礫混）
2 10YR4/1褐灰色砂泥（φ1～7㎝礫混少、旧耕作土）
3 7.5YR3/2黒褐色砂泥（φ1～7㎝礫混少、床土）
4 10YR4/2灰黄褐色砂礫（φ1～10㎝礫混）
5 10YR4/2～4/3にぶい黄褐色砂泥（φ1～5㎝礫混少）
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（φ1～6㎝礫混）
7 10YR4/2灰黄褐色砂泥（φ1～10㎝礫混）
8 10YR4/2灰黄褐色砂泥
9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色泥砂ブロック混
10 10YR3/4暗褐色砂泥（φ1～10㎝礫混、地山）
11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（φ1～5㎝礫混多い、地山）
12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（φ1～40㎝礫混多い、地山）
13 10YR4/4褐色砂泥（φ1～20㎝礫混、地山）
14 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂（φ1～10㎝礫混、地山）

0 5m

図44 1・2区断面図（1：50）

第５層の標高約222.3mとなり、標高差から棚田であったと考えられる。第３層と第６層のそれぞれの南側には、畦を形成していたとみられる第11層と第８層があった。何れも後世の整地によって、上部を削平されたと考えられる。また、第１層に対応する畦は撹乱されていたため、検出できなかった。造成順序は、第６層の耕作土に盛土を行い、第３層の田を拡張した。のちに第５層の耕作土に盛土を行って第３層の田をさらに拡張し、その後第１層から第３層の耕作土に盛土して、今回造成される前の田（図39の網掛け部分）を造ったと考えられる。

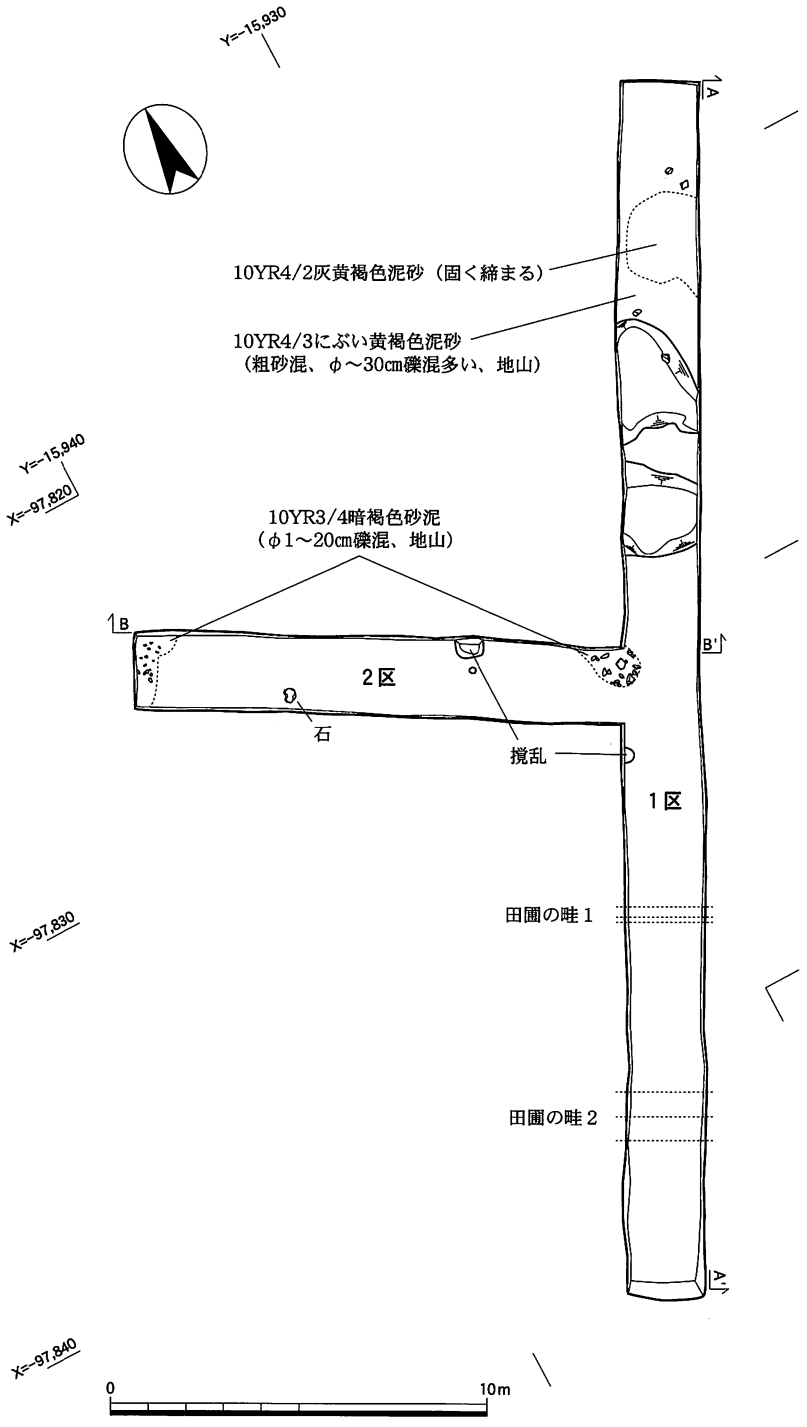


図45　１・２区平面図（１：200）

２区（図44・45）

第３層の床土直下では、調査区両端で人頭大の礫を多量に含む地山（第10・13層）を確認しただけで、明確な遺構は検出できなかった。断割を行ったところ、この地山を肩とする土坑や落ち込みを検出したが、遺物は全く出土しなかった。土坑埋土はにぶい黄褐色砂泥（第５層）である。落ち込み埋土は灰黄褐色砂泥など（第６～９層）で、田圃を造成した客土とも考えられるが、土石流などの堆積層の可能性も考えられる。

３区（図46）

１・２区南側の田に設定した調査区で、現耕土面は１・２区より約0.6m低い。標高222.2mの旧耕作土下では、土坑状遺構（第２・３層）を検出した。第３層からの遺物出土量が多かったため、文化財保護課の指導のもと、北

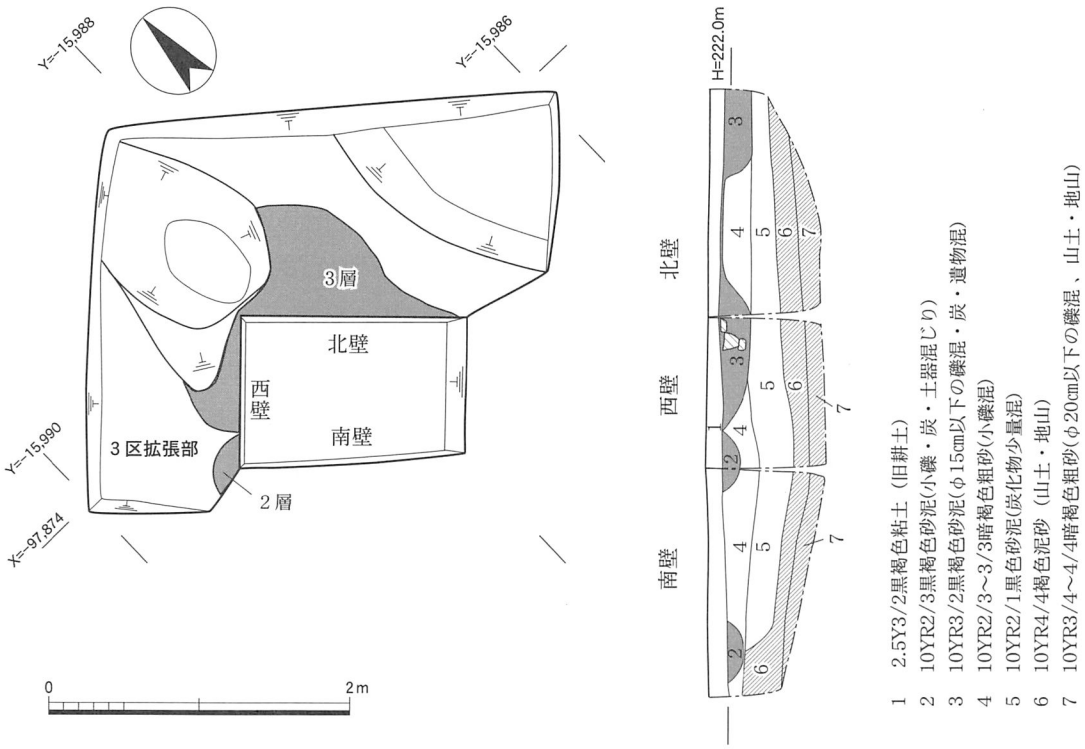


図46　３区実測図（１：50）

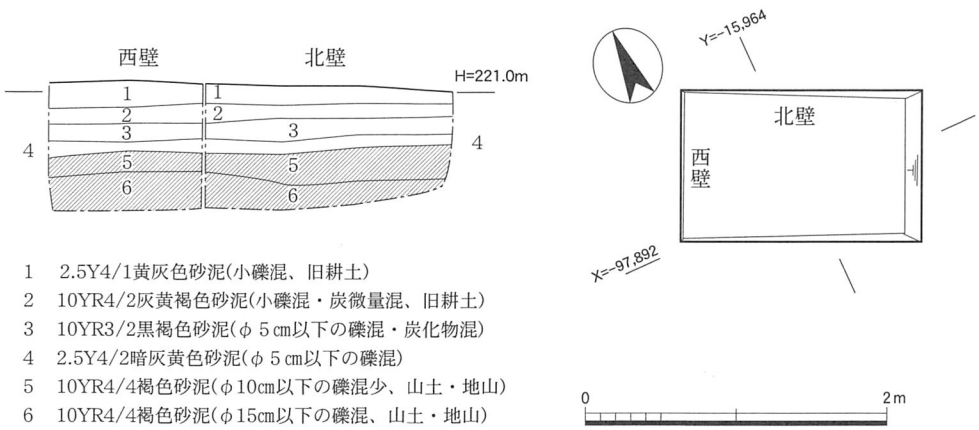


図47　４区実測図（１：50）

側と西側へ拡張した。その結果、撹乱が多く残存状況は悪かったが、第２・３層は拡張区にも薄く広がり、調査区西端で検出していた土坑状遺構と繋がることを確認した。田圃を造成するために凹凸を整地したときに埋め立てた土層と考える。出土遺物は平安時代後期～鎌倉時代の土師器皿が多い。よって、田圃の造成時期は鎌倉時代までさかのぼる可能性がある。

４区（図47）

１・２区の南側の田の中に、調査区を設定した。３区のほぼ東側に位置し、３区より1.1m低い標高221.1mに旧耕作土が残存していた。旧耕土（第１・２層）から土師器小片が出土したが、時期は不明である。各土層はほぼ水平に堆積し、地表下0.44m以下は径15cmまでの礫が混じる褐色砂泥（第５・６層）の地山となる。

（3）遺　　物（図48、表11、図版８）

出土遺物は整理箱に１箱出土した。大部分は、表採や検出中に出土したものなどで、遺構・包含層から出土した遺物は少ない。検出中の出土遺物には、平安時代の灰釉陶器椀や須恵器、鎌倉時代の白磁椀、瓦器椀、室町時代の土師器皿・焼締陶器擂鉢、江戸時代の土師器皿などがある。

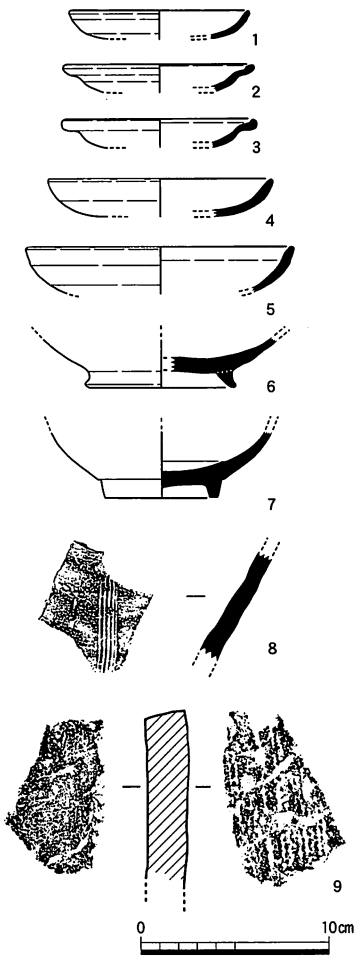


図48　遺物拓影・実測図（１：４）

１区の第４層は、棚田を埋め立てたときの盛土であるが、平安時代の灰釉陶器片、鎌倉時代の白磁椀、江戸時代の土師器皿などが出土している。第11層は畦１の構築土と考えられるが、平安時代の須恵器や鎌倉時代の白磁椀が出土した。また、その下層の第12層から須恵器甕片が出土した。第16層以下からは、遺物は出土していない。２区では、堆積土層から遺物は出土しなかった。３区の第３層から、平安時代後期～鎌倉時代の土師器皿、瓦器などが出土した。検出中の遺物には、多くの土師器皿、鎌倉時代の白磁皿が含まれていた。４区からは、土師器小片が出土したのみである。

３・４区の試掘トレンチ周辺からは10世紀の土師器皿や須恵器片が出土している。

出土遺物

土師器皿（１）　復元口径9.6cm、残存高2.0cm。３区土坑状遺構より出土。皿Ｎで、平安時代後期のものである。

土師器皿（２）　復元口径10.2cm、残存高2.0cm。３区土坑状遺構清掃中に出土。皿Ａで、平安時代後期のものである。

土師器皿（３）　復元口径10.4cm、残存高2.0cm。３・４区表採遺物。皿Ａで平安時代後期のものである。

土師器皿（４）　復元口径12.0cm、残存高2.0cm。３区土坑

表11　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦		土師器５点、須恵器１点、瓦１点		
鎌倉～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、白磁		白磁１点、焼締陶器１点		
江戸時代	土師器				
合　計		２箱	９点（１箱）	１箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

状遺構より出土。皿Ａで、一段ナデである。平安時代後期頃か。

土師器皿（５）　復元口径14.2㎝、残存高2.5㎝。皿Ａで、二段ナデされる。１区第４層の耕土造成土から出土した。平安時代後期のものである。

須恵器椀（６）　高台径8.0㎝。ロクロ成形で、底部のみ残存している。見込みにわずかだが、自然釉がつく。貼付高台で、平安時代のものである。

白磁椀（７）　高台径6.0㎝。内外面は灰オリーブ色の施釉され、高台は無釉である。１区第４層の耕土造成土から出土した。鎌倉時代と思われる。

擂鉢（８）　信楽産擂鉢で、内面に５本一組の溝が刻まれる。内面は使用痕があり磨滅している。胎土には３㎜大の長石粒が多く含まれる。１区盛土から出土した。室町時代。

瓦（９）　厚さ2.3㎝の平瓦で、凸面は縄タタキされ、凹面には布目痕がある。遺構検出中に出土した。平安時代。

（４）ま と め

今回の調査地は、周知の遺跡である寂光院境内から南東約700ｍに位置しており、寂光院関連の遺構の遺存する可能性があった。また、分布調査の結果や遺物採集状況からも、遺構の検出が予想された。しかし、調査の結果、居住関連の遺構は全く検出できなかった。

一方、棚田や畦とみられる生産遺構を検出することができた。１区では、それまでの棚田を１枚の大きな田圃に造成したとみられる跡を土層断面から確認している。畦２からは平安時代の須恵器や鎌倉時代の白磁椀が出土し、旧耕作土からは須恵器片が出土している。また、３区では、旧耕作土下に平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土した土坑状遺構の広がりを確認しており、これも田圃の地表を整地したときに埋め立てた土層と考えられる。

これらのことから、棚田が造られ、拡張されるごとに近隣の土を盛土し、そのときに遺物が混入したものと思われる。棚田の成立時期は不明確であるが、鎌倉時代頃までさかのぼる可能性がある。

調査地西側を南北方向に通る旧街道の西側は、現在は杉林となっている。林地内には10数段の段々畑状の傾斜地がみられ、各段差には30～60㎝以上の自然石を使用した石垣が組まれている。調査を行った低い土地を生産地として利用していることから、調査地より標高の高い、旧街道より西側の山際の傾斜地、または上流の寂光院側に人々は生活していたものと考えられ、そのような場所に当時の遺構の存在が推定される。その時期は、出土遺物から平安時代後期まで遡ると考えられるので、今後、さらに詳しい周辺の調査が望まれる。

4．大原野村町地区

（1）調査経過

調査地は、高野川右岸の大原野村町内で、前回の草生町調査地より約800m南に位置する。草生町と同様に遺構の有無を確認することとなり、埋蔵文化財確認調査を行うこととなった。調査は、2008年７月に現地打ち合わせを行い、2005年４月の分布調査で遺物が検出された地点に、文化財保護課立会の下で調査区を３箇所設定した。いずれの調査区も幅は２ｍで、１区は南北方向に13ｍ、２区は東西方向に９ｍ、３区は南北方向に20mである。７月９日に重機によって現耕作土層を厚さ0.2～0.5m除去した。その後、旧耕作土部分を除去し、遺構検出作業を行い、全景写真の撮影や実測、断割調査に並行して、平板測量や断面実測作業などを行った。７月24日には、調査資材などを撤去し調査を終了した。この間に文化財保護課の指導を３回受けた。

その結果、１・２区は、土石流の堆積とその後の耕作土を検出した。土石流の砂礫の中から、平安時代の須恵器甕が出土した。３区では、砂礫層の上面で石列、砂礫層の下層から落ち込みを検出した。石列は北東から南西方向に続き、畦状を呈する。落ち込みは南に向かって下がっており、埋土の黒褐色シルト層からは、平安時代の土器や曲物などが出土した。

（2）遺　　構（図52・53、図版７）

基本層序（図52・53）

調査区を設定した田圃は、現状は二筆の田となっている。現在の地表面は、１・２区で標高約208.7m、断割調査も含めて深さ1.7mまで調査した。３区は標高約209.2mで、断割調査も含めて深さ2.1mまで調査した。

１・２区の基本層序（図52）は、現耕土である厚さ約0.4mの暗灰黄色砂泥層（第１・２層）、旧耕土である厚さ約0.2mの暗灰黄色砂泥層（第３～５層）、礫が混じり厚さ約0.3mを測る暗灰黄色砂泥層・黄褐色砂泥層・暗灰黄色砂泥層（第６～８層）となる。以下は厚さ0.3m以上ある暗灰黄色細砂・微砂・粗砂層（第９～11層）の流れ堆積層となる。

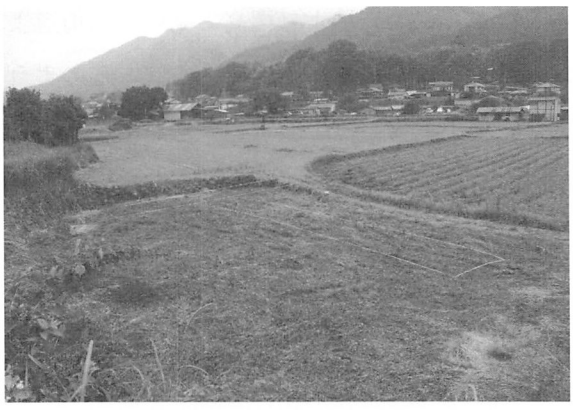


図49　調査前全景（西から）

図50　調査風景（北から）

３区の基本土層（図53）は、厚さ約0.3mの現耕土層、厚さ約0.6mの暗灰黄色泥土層（第１層）、厚さ約0.3mの暗オリーブ褐色泥土層（第２層）、厚さ約0.1～0.2mのオリーブ褐色泥土層（第３層）、厚さ約0.1mの暗灰黄色砂泥層（第４層）、厚さ約0.1mの黒褐色砂礫の流れ堆積層（第５層）となる。さらに厚さ約0.1mのオリーブ褐色泥土層（第６層）、厚さ約0.2mの暗灰黄色粘土層（第７層）があり、以下は暗灰黄色砂礫の流れ堆積層（第17層）となる。

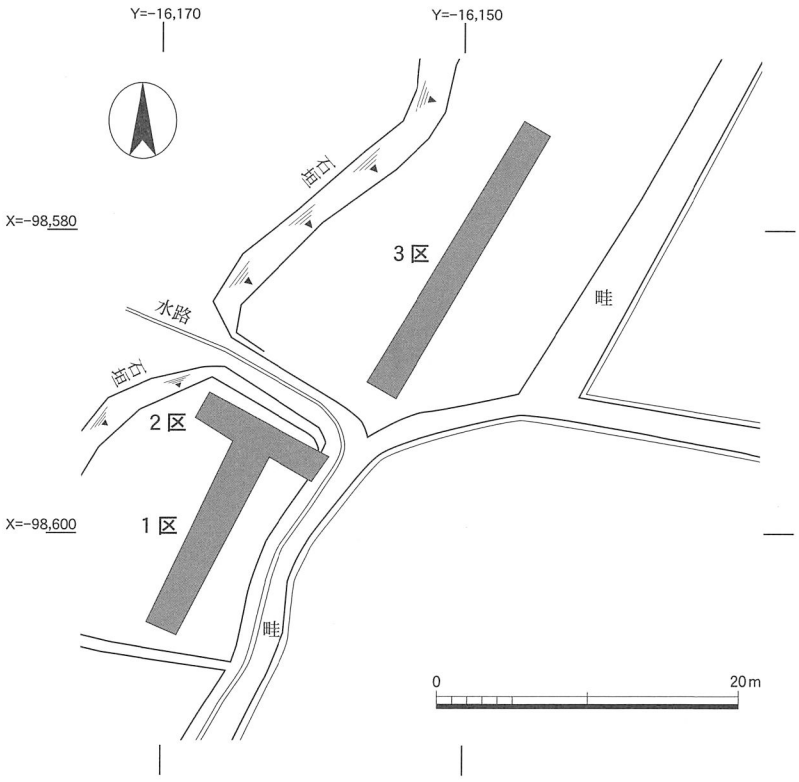


図51　調査区配置図（１：500）

１・２区（図52）

標高約207.4m以下は微砂・粗砂・砂礫の流れ堆積層となり、地表下約1.1mの標高約207.6mからは、拳大の礫を多量に含む層となる。特に、粗砂礫層と拳大の礫の多い砂礫層は、１・２区交点付近の南北９m、東西８mの範囲に集中する。拳大の礫が多い部分は縞状に堆積していた。砂礫層は、１区第14～17層、２区第15・38・42～44層であり、粗砂層・砂礫層には径0.1～0.4mの礫が多い。１区14・15層の砂礫層から、平安時代の須恵器甕の破片がまとまって出土した。

３区（図53）

表土からの層順はほぼ水平な堆積を示す。調査区北側では、地表下約1.5mで石列を検出した。石列は、長辺0.1～0.4mの石を北東から南西方向に集積したもので、幅0.6～0.8m、全長約６m以上を測り、調査区外に延長する。黄褐色粗砂（第16層）やオリーブ褐色泥土（第６層）、暗灰黄色シルト（第22層）、暗オリーブ褐色砂礫（第24層）上面で掘形を検出した。掘形埋土は、黄褐色シルト（第15層）や暗灰黄色粘土（第23層）である。掘形底面に雑ではあるが、石を密に据え

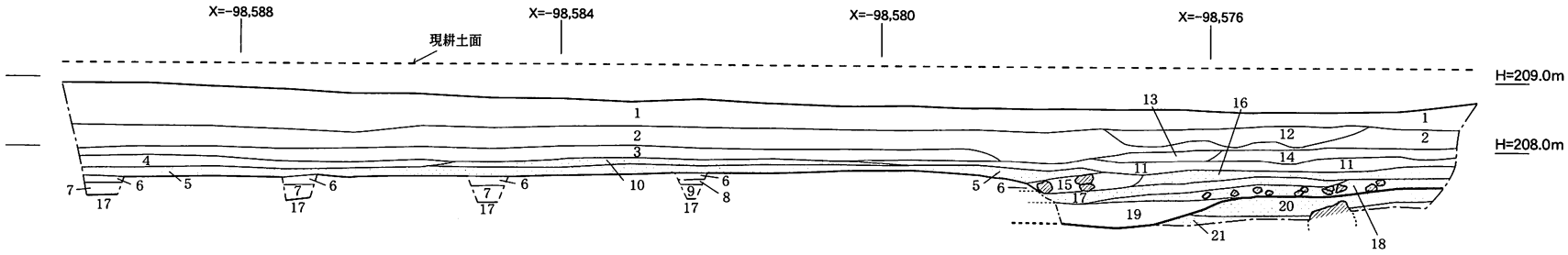
表12　遺構概要表

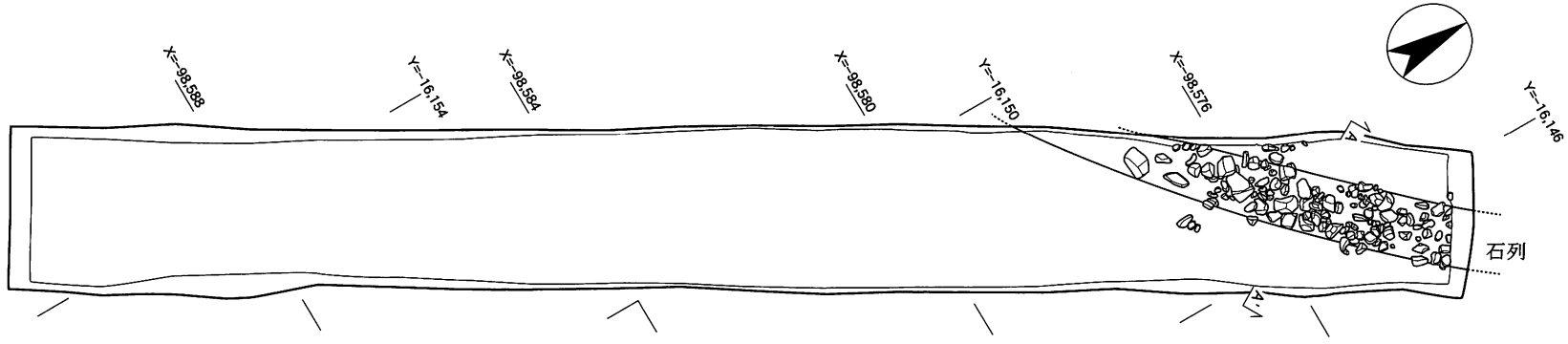
時　代	遺　構	備　考
平安時代	落ち込み（３区）	
平安時代以降	石列（３区）、土石流跡（１・２区）	

1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ4cm以下の礫混少量)
3 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ7cm以下の礫混)
4 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ10cm以下の礫混少量)
5 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色砂泥
6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ6cm以下の礫混少量)
7 2.5Y5/3黄褐色砂泥(φ15cm以下の礫混少量)
8 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ5cm以下の礫混少量)
9 2.5Y5/2暗灰黄色細砂（炭混微量）
10 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色微砂
11 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
12 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥（炭混微量）
13 2.5Y3/2黒褐色砂泥(φ9cm以下の礫混少量)
14 2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂(φ10cm以下の礫混)
15 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂(φ20cm以下の礫混)
16 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(φ15cm以下の礫混)
17 10YR4/2灰黄褐色粗砂
18 2.5Y5/2暗灰黄色細砂（炭混微量）
19 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
20 2.5Y5/3黄褐色砂泥(φ4cm以下の礫混少量)
21 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(φ5cm以下の礫混)
22 2.5Y5/2暗灰黄色微砂(炭混少量)
23 2.5Y5/2暗灰黄色微砂
24 2.5Y6/2灰黄色微砂(粘質・炭混少量)
25 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色砂泥(炭混微量)
26 2.5Y5/2暗灰黄色微砂(φ6cm以下の礫混)
27 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(畦盛土)
28 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(φ8cm以下の礫混)
29 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(φ13cm以下の礫混多量)
30 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色砂泥(φ18cm以下の礫混)
31 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(やや粘質)
32 2.5Y5/3黄褐色泥砂(φ17cm以下の礫混少量)
33 2.5Y4/2～5/2暗灰黄色砂泥(礫混)
34 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
35 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭混少量)
36 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫(φ13cm以下の礫混)
37 2.5Y4/2～5/2暗褐色砂泥(やや粘質)
38 2.5Y5/3黄褐色砂泥(φ15cm以下の礫混少量)
39 2.5Y5/2暗灰黄色微砂
40 2.5Y6/2灰黄色微砂
41 2.5Y4/2暗灰黄色微砂(φ14cm礫混少量)
42 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(φ8cm以下の礫混少量)
43 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂(φ4cm以下の礫混少量)
44 10YR4/2灰黄褐色砂泥(炭混少量)
45 2.5Y6/2灰黄色微砂
46 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
47 10YR4/3にぶい黄色粗砂礫(φ20cm以下)

図52　1・2区実測図（1：100）

西壁断面図





1 2.5Y4/2暗灰黄色泥土(炭・φ～2cm礫混少量)
2 2.5Y4/2～3/3暗オリーブ褐色泥土(炭・φ1～5cm礫混少量)
3 2.5Y4/2～4/3オリーブ褐色泥土(φ1～2cm礫混少量)
4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(炭・φ～3cm礫混少量)
5 2.5Y4/2～3/2黒褐色砂礫(φ1～3cm礫混多量)
6 2.5Y4/2～4/3オリーブ褐色泥土(φ1～3cm礫混少量)
7 2.5Y5/4～4/2暗灰黄色粘土
8 2.5Y4/2暗灰黄色粘土＋10YR5/6黄褐色砂泥
9 2.5Y3/1黒褐色粘土(炭混、7層と似る)
10 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫(φ2～5cm礫混多量)
11 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭・φ1～2cm礫混少量)
12 2.5Y4/2～4/3オリーブ褐色泥土(炭・φ1～5cm礫混少量)
13 2.5Y4/3～4/4オリーブ褐色砂泥(炭・φ0.3～3cm礫混少量)
14 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(φ～3cm礫混少量)
15 2.5Y5/3～4/3黄褐色シルト(混礫φ10～30cm多い、石列掘形埋土)
16 2.5Y5/3～5/6黄褐色粗砂(φ3～10cm礫混少量)
17 2.5Y5/2～4/2暗灰黄色細砂＋2.5Y4/1黄灰色粘土(炭混少量)
18 7.5YR4/4褐色粗砂(φ3～15cm礫混)
19 2.5Y3/1黒褐色シルト(炭・遺物混)
20 2.5Y5/4～5/6黄褐色粗砂(φ1～10cm礫混)
21 2.5Y5/3黄褐色砂礫(φ15cm～礫多量)
22 2.5Y4/2暗灰黄色シルト(炭・φ～3cm礫混)
23 2.5Y4/2～4/3暗灰黄色粘土(2.5Y4/2暗灰黄色細砂混、石列掘形埋土)
24 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫(φ～1cm礫混)
25 2.5Y5/2暗灰黄色細砂(流れ堆積)

石列断割断面図

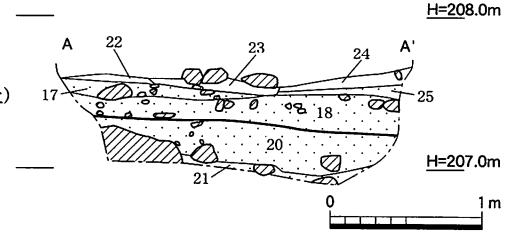


図53 3区実測図（1：50、1：100）

た部分と積み上げた部分を確認した。検出した石列は、耕土である第６層と同一面で成立していたとみられることや、第16層と第６層との境目に位置することから、これらを区切るための畦状遺構と考えられる。この畦状石列・耕作土の上面には、流れ堆積砂礫層（第５・10層）が見られるので、洪水で埋まったものと考えられる。その上面には泥土層（第１～３層）や旧耕作土が見られた。なお、第２層ははぼ水平で、旧耕作土とも考えられる。

断割調査で、地表下1.8m以下は流れ堆積の粗砂・砂礫層（第20・21層）となり、この粗砂層を肩とした南への落ち込みを検出した。深さ0.4m、幅2.5m以上ある。埋土である黒褐色シルト（第19層）からは、平安時代後期以降の土器類や曲物などの木製品が出土した。

（３）遺　　物（図54、表13、図版８）

遺物は整理箱に２箱出土した。平安時代中期から鎌倉・室町時代、江戸時代の遺物の小片が少量出土した。平安時代の土師器皿・須恵器椀・甕、灰釉陶器椀など、多くは１・２区の第14・15層から出土した。３区からの出土遺物は少なく、第３層から平安時代中期の土師器皿小片・白磁椀が出土し、石列から土師器・炭片、石列下層の第17・18層からは磨滅した土師器・須恵器、落ち込み（第19層）から平安時代の土師器皿・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。そのほかに、青磁・白磁椀、染付小椀などが出土した。

須恵器椀（１）　復元口径15.0㎝。残存高3.5㎝。１区第14・15層から出土した。灰色の胎土で、焼成は良好。平安時代のものである。

須恵器皿（２）　皿の底部のみで、高台径7.0㎝。削り出し高台で内外面はナデ調整されている。内面は磨滅した使用痕がある。１区第16・17層から出土した。平安時代のものである。

須恵器甕（３）　復元体部径31.0㎝、残存高38.9㎝の甕で、底部および口縁部や頸部は欠け、全体の約３分の１が残存する。外面には格子タタキがあり、内面には左上から右下方向へのナデ調整が見られる。外面底部には須恵器片が三重に付着しており、焼成時に融着したとみられる。ほとんど磨滅していない。１区第14・15層からまとまって出土した。土石流で上流から流されてきたものと思われる。平安時代後期頃のものと考える。

表13　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、白磁、木製品		須恵器３点、灰釉陶器１点、白磁１点、木製品１点		
鎌倉～室町時代	土師器、青磁				
江戸時代	染付				
合　計		３箱	６点（１箱）	２箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

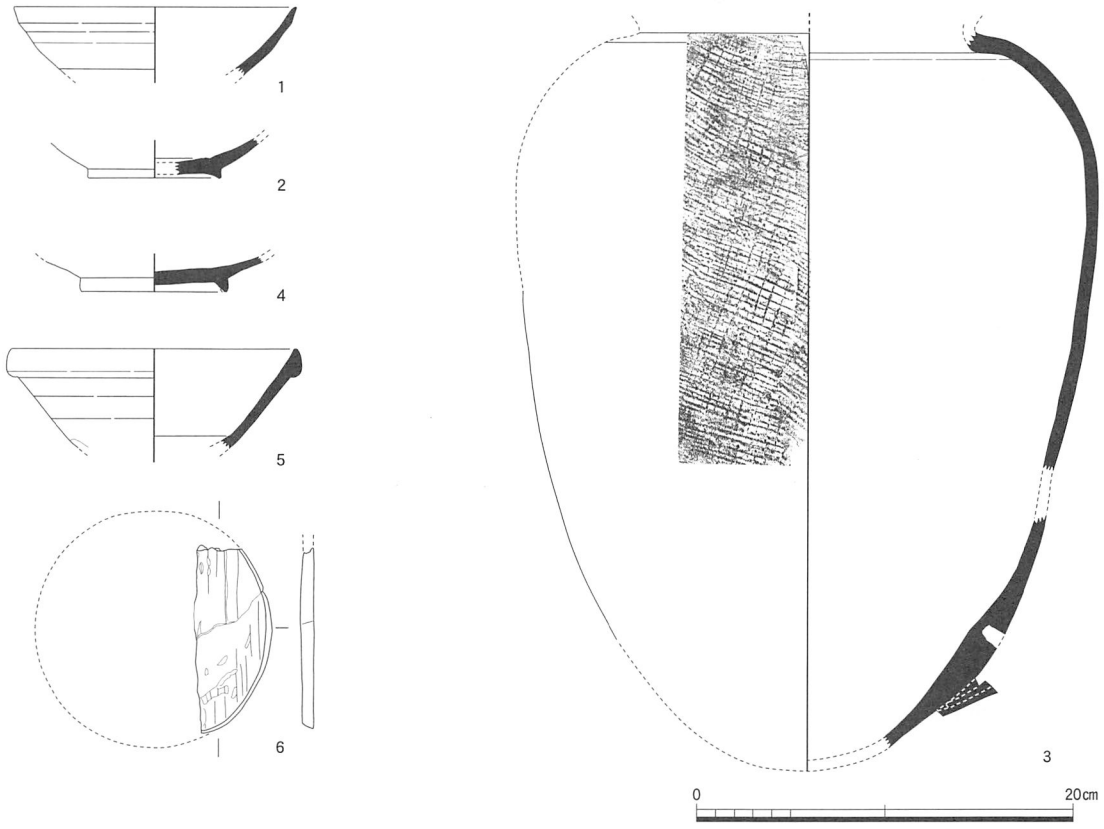


図54　遺物拓影・実測図（１：４）

灰釉陶器皿（４）　皿の底部のみで、高台径7.5㎝。貼付高台である。内面には灰オリーブ色の釉が施される。内面中央部は磨滅した使用痕がある。１区第16・17層から出土した。平安時代のものである。

白磁椀（５）　口径15.0㎝、残存高5.2㎝。口縁端部は玉縁状になり、胎土は灰白色、内外面には5Y7/1灰白色の釉が施されている。３区の第10・５層から出土した。平安時代後期である。

木製品（６）　復元径12.5㎝、厚さ0.7㎝の曲物の底面とみられる。端部は斜めに面取りされている。３区落ち込み（第19層）から出土した。

（４）ま と め

今回の調査地は、河岸段丘の底部に位置している。調査地の西方1.5㎞には金比羅山があり、その山腹には江文寺があった。創建時期は不明だが、平安時代後期には四天王像が安置されていたとある。また、その山麓には江文神社が鎮座していたとある[3)]。その麓約1.0㎞南東の高野川沿いに開けた部分が現在の野村町の住宅地で高野川右岸の河岸段丘の上部に位置し、周囲は農地となっている。当時も野村町周辺には、神社関係者などの住民が生活し、農業も行われていたものと考えられる。今回の調査は、前回の調査に引き続き、周知の遺跡ではないため、遺構の有無を確認することが目的であったが、調査の結果、居住関連の遺構は全く検出できなかった。

しかし、３区の落ち込みから、土器類・曲物・燃えさしの木片などが出土しており、当地近辺の上流には、生活に関連した平安時代中期以降の遺構の存在が推定される。

１・２区の砂礫層は土石流跡を示す堆積土層で、須恵器甕などが流されてきたと考えられる。２区北側には、２区と平行するコンクリート枠の小さな水路がある。降雨時の水量が多く、水路がコンクリートに改修される前には、その水流の土砂運搬能力は大変大きかったものと推定される。平安時代～中世の頃に、大雨で発生した土石流が須恵器甕などを巻き込んで、この集石部分で扇状地のように広がって堆積したものと考えられる。その後、第６～８層や床土である第２層が盛土されたのち整地され、現在の姿になったものと考えられる。当地の西方段丘の上面には、平安時代の遺跡の存在が推定される。

また、３区の石列は、当時の人たちが洪水の跡を整理して、シルト層を敷いてその上に石列で畦状のものを築き、南側に第６・７層の田圃を造った痕跡と考えられる。その田は洪水によって砂礫層で埋まり、その後、盛土をして現在の耕作土面を造成したものと考えられる。

これらのことから、当時の人たちは、金比羅山の東側の麓、調査地から約0.5km西方の河岸段丘の上面で生活していたと考えられる。そして、住居周辺や河岸段丘の底部で農業を営んでいたが、大雨時の鉄砲水などに襲われて、流されたものが、今回出土した遺物と考えられる。

一方、今回の圃場整備にあたっては、左京区岡崎成勝寺町・北区等持院北町ほかの工事排土が盛土のため搬入されたとのことであり、以後、当該地における表採資料などには注意を要することを付記しておく。

今回の確認調査の成果を基に、調査地より西側の河岸段丘上面での調査によって、より詳しく遺跡の状況を把握する必要があると考えられる。

註

１）「左京区大原の遺跡」『京都市内遺跡分布調査報告　平成17年度』 京都市文化市民局　2005年

２）「京都市の地名」『日本歴史地名大系』 平凡社　1979年

３）「寂光院跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

４）註１に同じ

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成20年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	近藤奈央・菅田　薫・布川豊治・尾藤徳行
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2009年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（へいあんきゅうちょうどういんあとじゅらくいせき）	京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1200番地（きょうとしかみぎょうくたけやまちどおりせんぼんひがしいるしゅぜいちょう）	26100	2 237	35度 01分 01秒	135度 44分 36秒	2008/7/22～ 8/11	54.5㎡	個人住宅建設
八幡古墳群（はちまんこふんぐん）	京都市左京区岩倉幡枝町地内（きょうとしさきょうくいわくらはたえだちょうちない）	26100	367	35度 04分 03秒	135度 46分 17秒	2008/5/7～ 5/9、 12/25・26	48㎡	託児所兼個人住宅建設
北白川廃寺（きたしらかわはいじ）	京都市左京区北白川堂ノ前町36番地（きょうとしさきょうくきたしらかわどうのまえちょう）	26100	397	35度 01分 58秒	135度 47分 28秒	2008/2/1～ 3/7	83㎡	診療所建設
史跡・名勝嵐山（しせき・めいしょうあらしやま）	京都市右京区嵯峨鳥居本化野町12番地34（きょうとしうきょうくさがとりいもとあだしのちょう）	26100	A809	35度 01分 32秒	135度 39分 53秒	2008/9/8～ 10/1	85.4㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 古墳時代		瓦	平安時代前期～後期の瓦が出土
八幡古墳群	古墳	古墳時代			
北白川廃寺	寺院跡	鎌倉時代後半～室町時代前半	谷状遺構、溝	土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦	鎌倉時代の谷状遺構、室町時代の溝を検出
史跡・名勝嵐山	史跡・名勝	鎌倉時代		土師器	鎌倉時代初頭の土師器が出土

報 告 書 抄 録

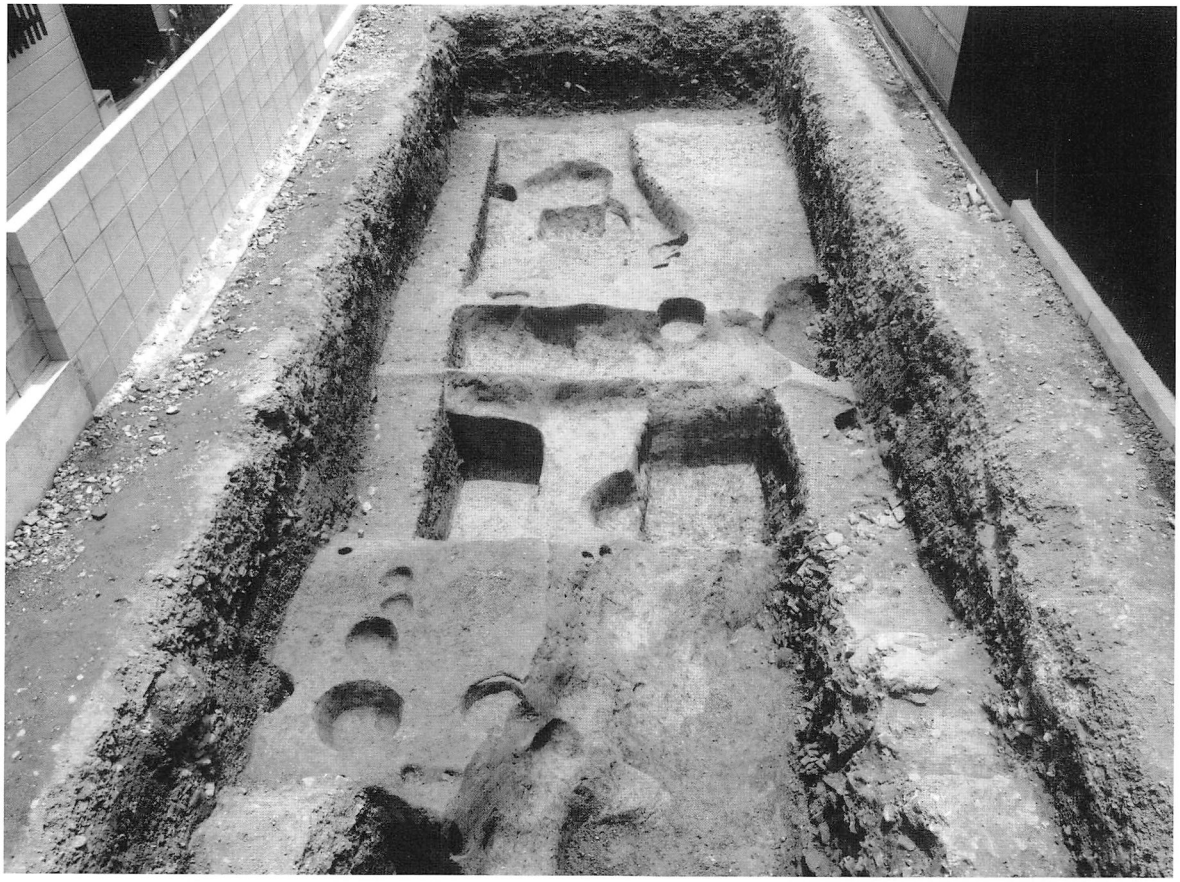
ふ り が な	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成20年度
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	近藤奈央・菅田　薫・布川豊治・尾藤徳行
編 集 機 関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発 行 機 関	京都市文化市民局
所　在　地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2009年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大原草生町地区（おおはらくさおちょうちく）	京都市左京区大原草生町地内（きょうとしさきょうくおおはらくさおちょうちない）	26100		35度07分04秒	135度49分30秒	2008/ 2 /12～ 2 /26	98㎡	圃場整備
大原野村町地区（おおはらのむらちょうちく）	京都市左京区大原野村町地内（きょうとしさきょうくおおはらのむらちょうちない）	26100		35度06分40秒	135度49分21秒	2008/ 7/ 7 ～ 7 /24	84㎡	圃場整備

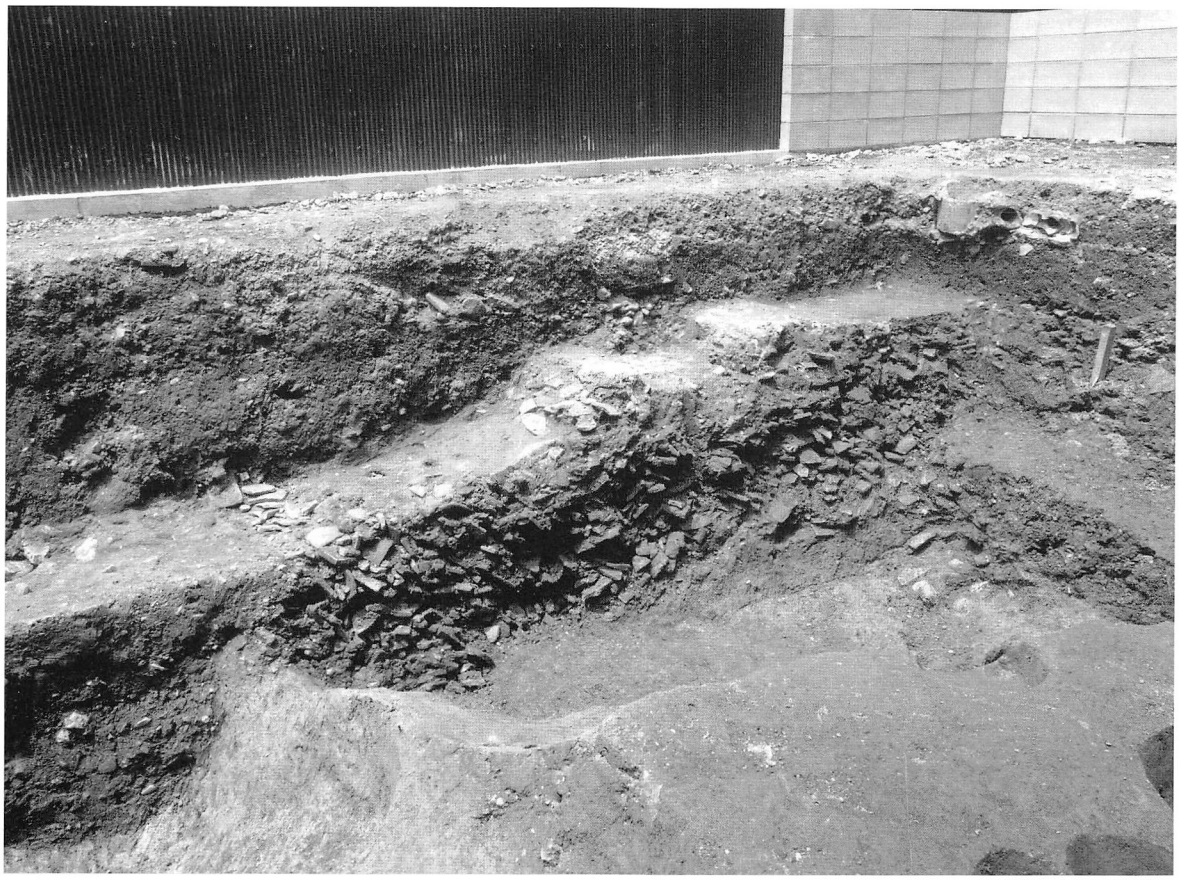
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大原草生町地区	散布地	平安時代～江戸時代	畦、耕作土整地層	土師器、須恵器、白磁、焼締陶器、瓦	江戸時代以降の畦、耕作土整地層を検出
大原野村町地区	散布地	平安時代以降	落ち込み、石列、土石流跡	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、木製品	平安時代以降の畦痕跡とみられる石列を検出

図　　版

図版1　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺構



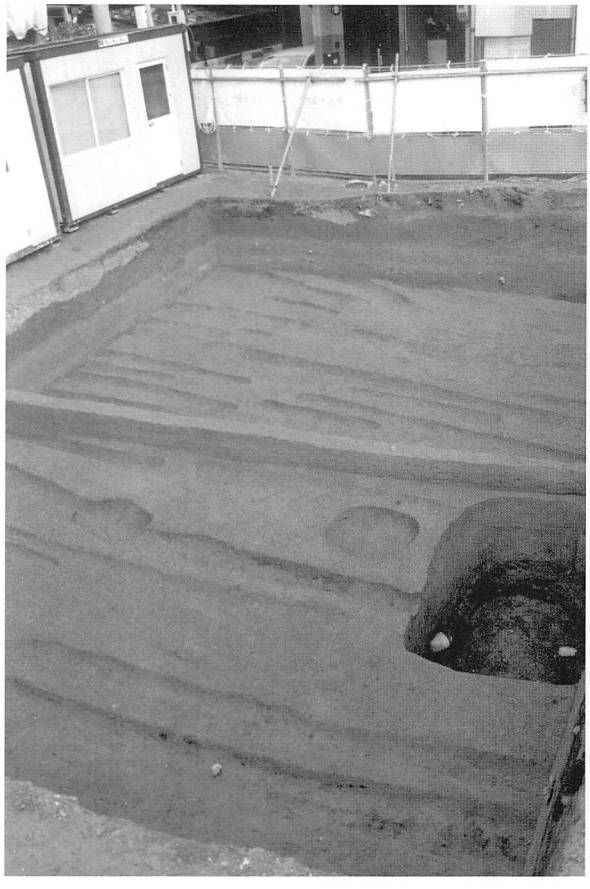
1　調査区全景（北から）



2　土坑26断面：瓦出土状況（南東から）

図版2　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺物

土坑26出土瓦

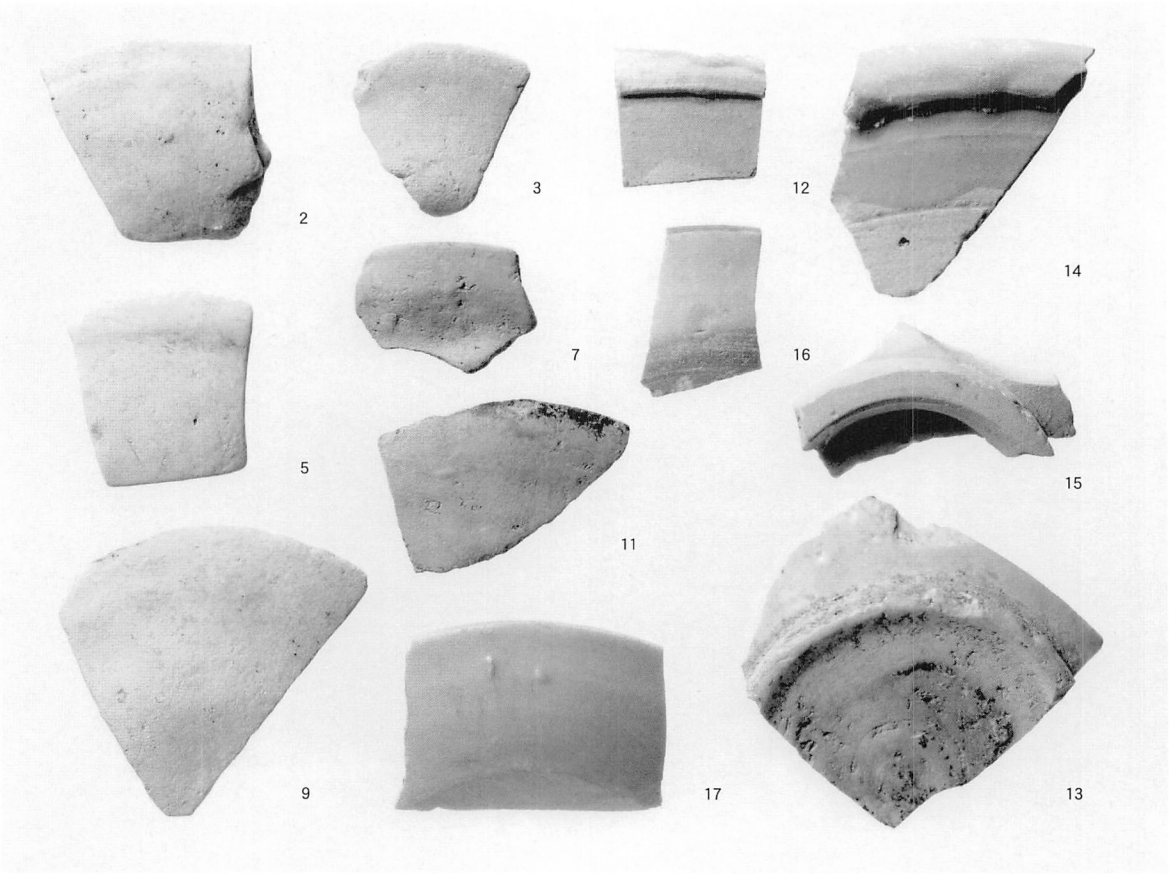


1　第２面全景（南東から）

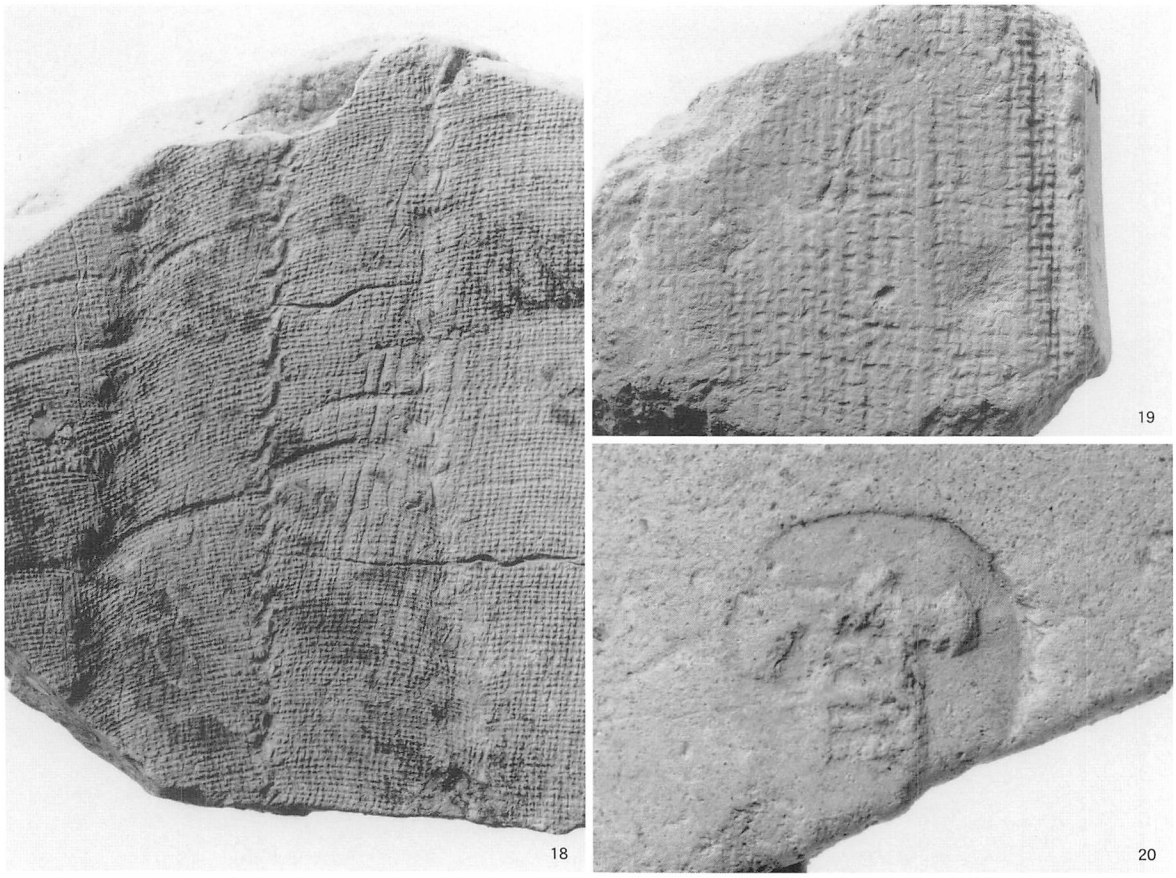
2　第３面全景（南東から、奥が溝54）

3　第４面全景（南東から）

図版4　北白川廃寺　遺物



1　土器類



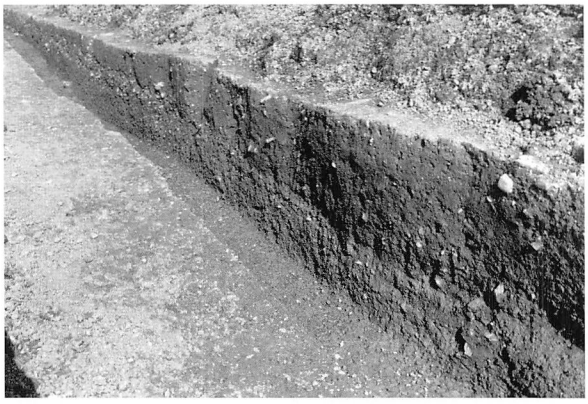
2　瓦類

1　調査区全景（北西から）

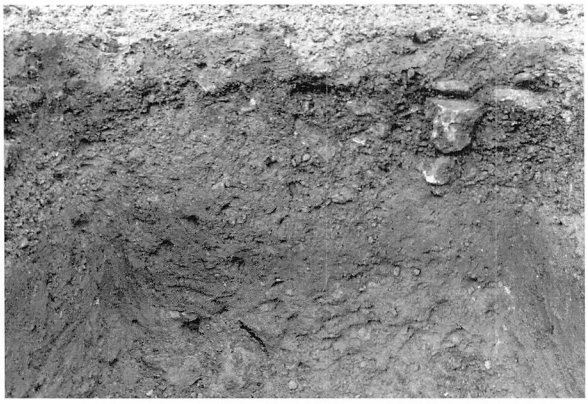
2　西壁断割（南東から）

3　北壁断割（北東から）

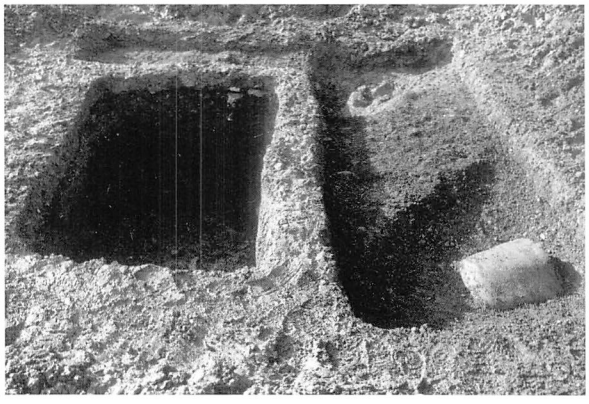
1　大原草生町地区１・２区全景（北東から）



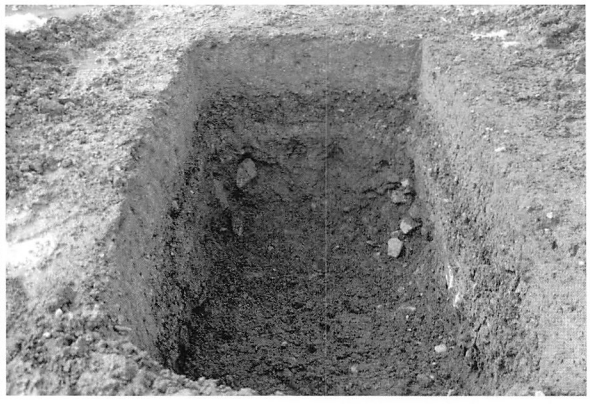
2　大原草生町地区１区断割断面（南西から）



3　大原草生町地区３区断面（南西から）



4　大原草生町地区３区拡張全景（南西から）



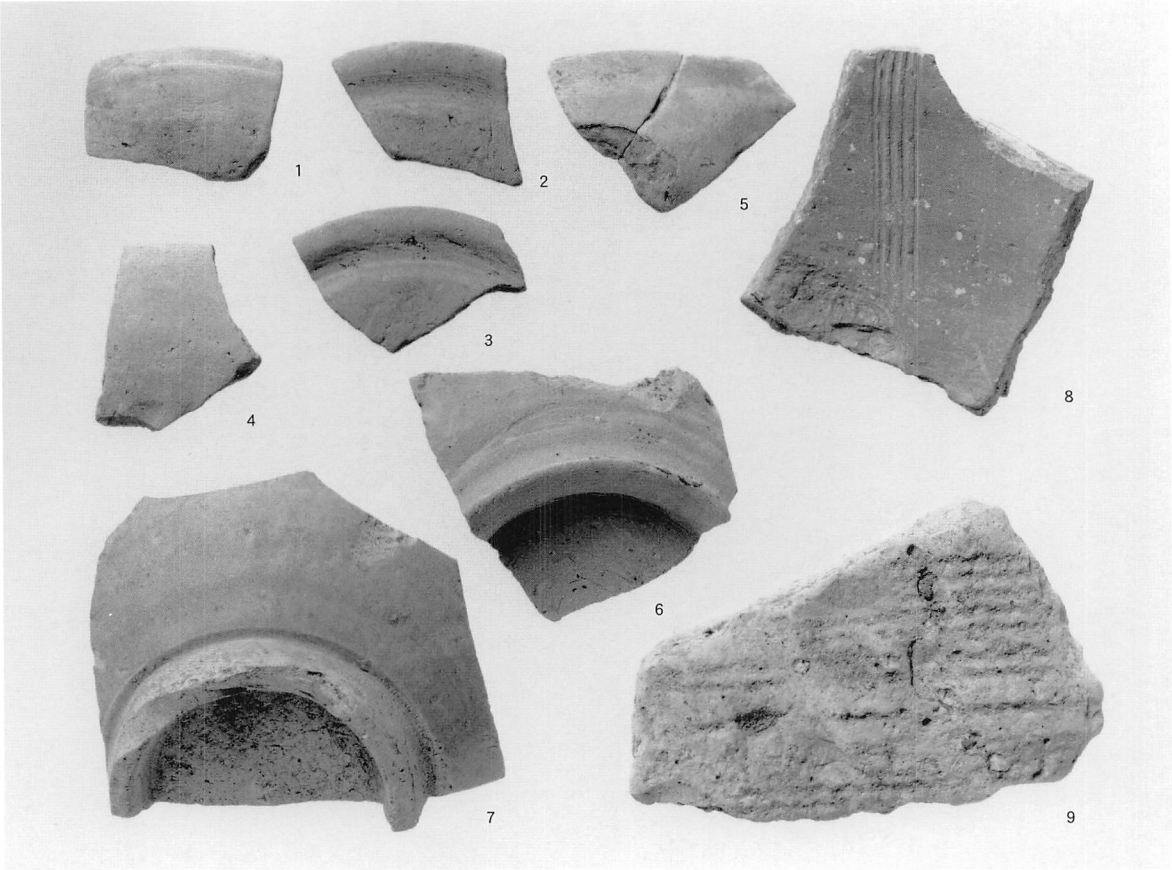
5　大原草生町地区４区全景（南東から）

1　大原野村町地区１・２区全景（北東から）

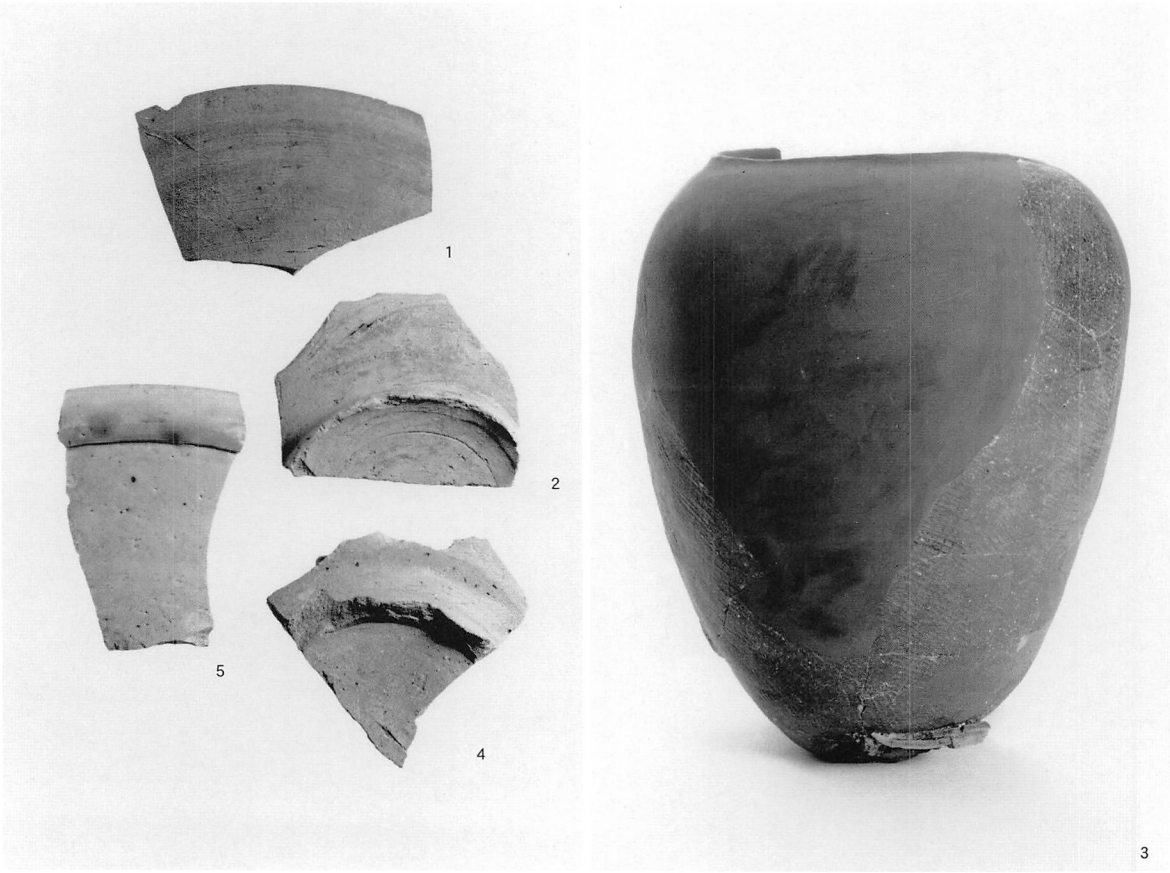
2　大原野村町地区３区全景（北北東から）

3　大原野村町地区３区石列断割断面（南西から）

4　大原野村町地区１区断割断面（北東から）



1　大原草生町地区出土遺物



2　大原野村町地区出土遺物

京都市内遺跡発掘調査報告
平成20年度

発行日　2009年３月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　(財) 京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/
印　刷　三星商事印刷株式会社